茨城県教育財団文化財調査報告第183集

神田遺跡 3

葛城一体型特定土地区画整理事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

平成14年3月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第183集

神田（じんでん）遺跡 3

葛城一体型特定土地区画整理事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

平成14年3月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人　茨城県教育財団

序

茨城県は，研究学園都市としてさらなる発展を期待されているつくば市において，国際交流の拠点にふさわしい町づくりを進めております。この町づくりの一環として，茨城県とつくば市，都市基盤整備公団茨城地域支社は，つくば市と東京圏を直結するつくばエクスプレスの建設と同時に，沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業を計画的に推進しています。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県と都市基盤整備公団茨城地域支社から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成７年から同10年，ついで平成13年１月から３月まで葛城地区の発掘調査を実施いたしました。その成果の一部は，既に『(仮称) 葛城地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』として刊行いたしました。

本書は，平成９年と同13年に発掘調査を行った神田遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が，学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史の理解，教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理を進めるにあたり，委託者である茨城県と都市基盤整備公団茨城地域支社から賜りました多大なる御協力に対し厚く御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，つくば市教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位からいただいた御指導，御協力に対し，衷心より感謝の意を表します。

平成14年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　齋　藤　佳　郎

例　　言

1　本書は，茨城県と都市基盤整備公団茨城地域支社の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成９年及び12年度に発掘調査を実施した，茨城県つくば市大字苅間字上ノ前1015ほかに所在する神田遺跡の発掘調査報告書である。

2　当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は，以下のとおりである。

調査　平成９年４月１日～平成９年７月31日，平成13年１月１日～平成13年３月31日

整理　平成13年11月１日～平成14年３月31日

3　当遺跡の平成９年度の発掘調査は，調査第二課長和田雄次の指揮のもと，調査第二課班長鶴見貞雄，主任調査員小林孝，同川村満博が担当した。平成12年度の発掘調査は，調査第二課長鈴木美治の指揮のもと，調査第二課班長瓦吹堅，主任調査員飯島一生，同和田清典が担当した。

4　当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は，整理第二課長瓦吹堅の指揮のもと，主任調査員飯島一生が担当した。

5　発掘調査及び整理に際し御指導・御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，X＝＋8,720m，Y＝＋23,560mの交点を基準点（A１a1）とした。この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C‥‥，西から東へ１，２，３‥‥とし，「A１区」，「B２区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は，北から南へa，b，c‥‥j，西から東へ１，２，３‥‥0とし，名称は，大調査区の名称を冠して「A１a1区」，「B２b2区」のように呼称した。

2　本書では，調査・整理の整合性から本遺跡を神田遺跡とした。本遺跡は『茨城県遺跡地図』（茨城県教育委員会平成13年３月改訂）において，「苅間神田遺跡」と名称変更されている。また，本文中「神田遺跡２」と表記してあるものは『茨城県教育財団文化財調査報告第134集』である。なお，遺構番号は平成７年度調査からの継続である。

3　土層観察と遺物における色調の判定には，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

4　遺構・遺物・土層に使用した記号は，次のとおりである。

【遺構】　住居跡－SI　土坑－SK　井戸跡－SE　溝跡－SD　道路状遺構－SF　柱穴－P

【遺物】　土製品－DP　石器・石製品－Q　金属製品－M　拓本土器－TP

【土層】　撹乱－K

5　遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

粘土・竈材・施釉・黒色処理　焼土・赤彩

●　土器　○　土製品　□　石器・石製品　△　金属製品

6　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

(1)　遺構全体図は500分の１，遺構は60分の１に縮尺して掲載した。

(2)　遺物は原則として３分の１の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合がある。

7　「主軸方向」は，炉または竈の中心と入り口を結んだ軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とみなし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N－10°－E，N－10°－W）。

8　遺物観察表における土器の計測値の単位は，cmである。なお，現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。備考の欄は，残存率や写真図版番号等，その他必要と思われる事項を記した。

抄　　録

ふりがな	じんでんいせき
書名	神田遺跡３
副書名	葛城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ
巻次	4
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第183集
著者名	飯島　一生
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　TEL　029－225－6587
発行機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　TEL　029－225－6587
発行日	2002（平成14）年３月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
神田遺跡（じんでんいせき）	茨城県つくば市（いばらきけんつくばし） 大字苅間字上ノ前（おおあざかりまあざうえのまえ）1015ほか	08220 － 085	36度 04分 39秒	140度 05分 48秒	24 ～ 25 m	19970401 ～ 19970731 20000104 ～ 20000331	9,431㎡	葛城地区一体型特定土地区画整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神田遺跡	集落跡	旧石器		剥片	古墳時代から奈良・平安時代の集落及び中・近世の墓域。調査区の北およそ100mには，苅間城のものとされている土塁が現存する。
		縄文		縄文土器片	
		古墳	竪穴住居跡　5軒	土師器（坏・椀・高坏・甕・甑）	
		奈良平安	竪穴住居跡　22軒	土師器(坏・皿・甕・甑) 須恵器（坏・甕・甑）	
	墓域	中・近世	墓壙　18基	土師質土器（小皿・内耳鍋片）	
	その他	不明	土坑　17基 溝　15条 道路状遺構　2条	陶器（碗・皿） 五輪塔	

第1図　神田遺跡調査区設定図1

目　　次

序
例言
凡例
抄録
目次
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査経過……1
第２章　位置と環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……3
第３章　調査の成果……7
　第１節　遺跡の概要……7
　第２節　基本層序の検討……7
　第３節　遺構と遺物……8
　　1　古墳時代の遺構と遺物……8
　　(1)　竪穴住居跡……8
　　2　奈良・平安時代の遺構と遺物……16
　　(1)　竪穴住居跡……16
　　3　中近世の遺構と遺物……59
　　(1)　方形竪穴状遺構……59
　　(2)　地下式壙……59
　　(3)　火葬土坑……61
　　(4)　墓壙……62
　　(5)　溝跡……64
　　(6)　井戸跡……66
　　(7)　道路状遺構……66
　　(8)　その他の土坑……67
　　4　遺構外出土遺物……68
　第４節　まとめ……69
写真図版

第1章　調　査　経　緯

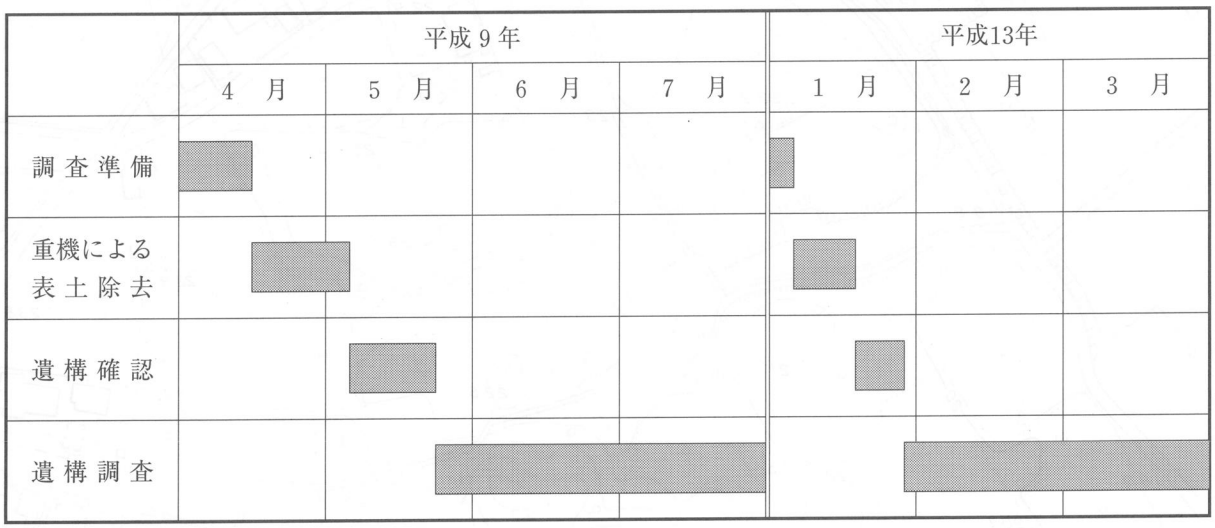
第1節　調査に至る経緯

茨城県は，つくば市において，国際都市にふさわしい新しい町づくりを推進している。その一環として取り組んでいるのが，西暦2005年度開業をめざしたつくばエクスプレスの建設とそれに伴う沿線開発である。現在，葛城地区においては都市基盤整備公団茨城地域支社を事業主体として，土地区画整理事業が行われている。

当遺跡のある葛城地区については，平成６年８月18日，茨城県知事が茨城県教育委員会あてに，常磐新線沿線地域の土地区画整理事業地域内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。それに対して茨城県教育委員会は，平成６年９月19日から27日にかけて現地踏査を行い，平成７年３月８日，茨城県知事あてに，常磐新線沿線地域の土地区画整理事業地内に神田遺跡が所在する旨回答した。平成７年３月９日，回答を受けた茨城県知事から茨城県教育委員会あてに神田遺跡の取り扱いについて協議があり，文化財保護の立場から再三協議を行った。その結果，茨城県教育委員会は，現状保存が困難であると判断し，茨城県に対し神田遺跡を記録保存するよう回答し，調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。財団法人茨城県教育財団は，平成７年４月１日から平成９年３月31まで37,380㎡について調査を実施した。

さらに茨城県と茨城県教育財団は，未調査部分の埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び，平成９年４月１日から同年７月31日にかけて，神田遺跡（9,431㎡）の発掘調査を実施することとした。平成９年７月23日，両者は土地所有者との調整が未了等の理由から，当初予定した調査範囲から（1,927㎡）を除くこととし，調整後に調査することとした。その後，平成10年度から葛城地区の土地区画整理事業の主体者は，茨城県から都市基盤整備公団茨城地域支社に引き継がれた。平成12年３月24日，茨城県教育財団は，都市基盤整備公団茨城地域支社の委託を受け，平成13年１月４日から平成13年３月31日まで未調査部分の発掘調査を実施した。

第2節　調　査　経　過



第2図　神田遺跡調査区設定図2

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

神田遺跡は，つくば市苅間字上ノ前1015ほかに所在し，蓮沼川左岸の台地上に立地する。

この台地は，筑波・稲敷台地と呼ばれ，台地の北側を八溝山地の南端に位置する筑波山を中心とするつくば山塊と接し，東側を東流して霞ヶ浦に流入する桜川と西側を南流する小貝川に挟まれた台地である。筑波・稲敷台地は，常総台地の一部で標高20～25m前後の平坦な台地であるが，花室川，蓮沼川，東谷田川などの中小河川により，浅い谷津も数多く形成されている。当遺跡の立地する周辺は，蓮沼川が形成する緩やかな河岸段丘が広がり，標高は約23～24mで眼下に広がる低地との比高は６～７ｍほどである。

台地の地質は，龍ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体となり，常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層，さらに2.5～３ｍの厚さの関東ローム層，最上部の腐植土層の順に堆積している。

第２節　歴史的環境

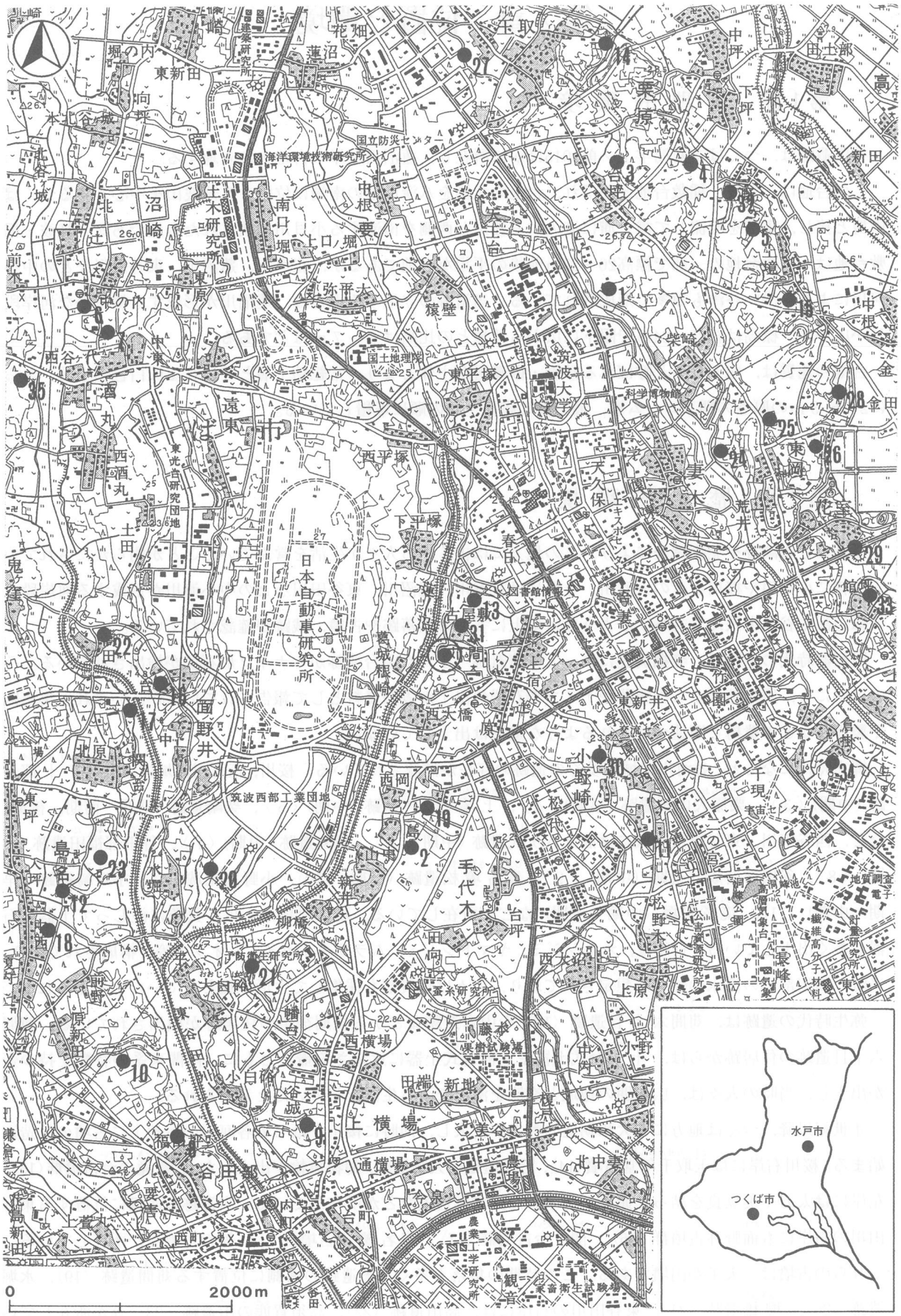
遺跡の分布調査や発掘調査により，この地方には古くから人々が生活を営んでいたことが明らかにされている。特に小貝川や桜川などの大河川，さらには花室川，蓮沼川，東谷田川などの中小河川が形成する河岸段丘の縁辺部や谷津を挟んで対峙するような台地上に多くの集落跡や古墳，城跡が確認されている。

旧石器時代の遺物は，発掘調査によって柴崎遺跡〈１〉や中台遺跡からナイフ形石器が検出されている。そのほかにも，周辺地域から尖頭器やナイフ形石器の出土が表採資料として報告されているが，いずれも集落跡や製作跡などの遺構と関連づけられるような遺物は出土していない。

縄文時代になると，各河川流域で多くの遺跡の存在が確認されている。桜川，花室川流域には栗原才十郎遺跡（中期）〈３〉，栗原大山西遺跡（早期）〈４〉，上境作ノ内遺跡（中期）〈５〉，柴崎遺跡（早期～前期，後期）など，西谷田川，東谷田川流域には酒丸八ヶ代遺跡（中期）〈６〉，酒丸遺跡（中期）〈７〉，谷田部福田遺跡（中期）〈８〉，谷田部台成井遺跡（中期）〈９〉，島名境松遺跡（中期）〈10〉，小野川流域には，小野崎遺跡（早期・中期）〈11〉，境松貝塚（中期～後期）などが所在している。境松貝塚からは，貝類に混じって土器や石器も多く出土している。貝類は，オキシジミ，ヤマトシジミ，ムラサキイガイ，シオフキ等で構成されており，当時，周辺部への海水の侵入が想定されており，人々は魚貝類も採集して生活の糧としていたと考えられる。

弥生時代の遺跡は，苅間六十目遺跡〈13〉や中台遺跡などから後期後半の住居跡が検出されている。苅間六十目遺跡の住居跡からは，十王台式土器や上稲吉式土器に比定さる壺とともに，南関東系の特徴を持つ壺が出土し，当時の人々は，広範囲の地域と交流を深めながら生活をしていたと考えられる。

４世紀以降，つくば地方にも大和朝廷の勢力が侵入し，同時に桜川をはじめ各河川の台地上に古墳の築造が始まる。桜川右岸には玉取千年堂古墳〈14〉，円筒埴輪や人物埴輪，動物埴輪が出土した上境滝の台古墳群〈15〉，左岸には太刀や美豆良を結った頭髪が出土した武者塚古墳などが所在している。当遺跡の西側に位置する東谷田川の右岸にも面野井古墳群〈16〉，関ノ台古墳群〈17〉，島名榎内古墳群〈18〉等の古墳群が所在している。これらの古墳は，大半が円墳である。この時期の集落も多く，当遺跡の南側に位置する苅間遺跡〈19〉，水堀遺跡〈20〉，柳橋遺跡〈21〉，東谷田川の右岸には，高田遺跡〈22〉，高須賀熊の山遺跡〈23〉等が所在している。熊の山遺跡は発掘調査がなされ，古墳時代から平安時代に形成された大集落であることが確認されている。



第3図　周辺遺跡分布図

表1　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中近世
◎	苅間神田遺跡	○	○		○	○	○	18	島名榎内古墳群				○		
1	柴崎遺跡	○	○		○	○	○	19	苅間遺跡				○		
2	苅間城跡						○	20	水堀遺跡				○		
3	栗原才十郎遺跡		○					21	柳橋遺跡				○		
4	栗原大山西遺跡		○		○			22	高田遺跡				○		
5	上境作ノ内遺跡		○		○			23	高須賀熊の山遺跡				○	○	○
6	酒丸八ヶ代遺跡		○		○			24	東岡中原遺跡	○	○		○	○	○
7	酒丸遺跡		○					25	九重東岡廃寺					○	
8	谷田部福田遺跡		○					26	金田西坪A遺跡					○	
9	谷田部台成井遺跡		○					27	方穂故城						○
10	島名境松遺跡		○		○			28	金田城跡						○
11	小野崎遺跡		○		○			29	花室城跡						○
12	島名薬師遺跡				○			30	小野崎館跡						○
13	苅間六十目遺跡			○	○	○	○	31	苅間城跡						○
14	玉取千年堂古墳				○			32	上野天神塚古墳				○		
15	上境滝の台古墳群				○			33	上ノ室城跡						○
16	面野井古墳群				○			34	倉掛遺跡				○		
17	関ノ台古墳群				○			35	高野古墳群				○		

奈良・平安時代になると当遺跡付近は，律令制度の確立に伴って河内郡菅田郷に属するようになる。当遺跡の東側に位置する東岡中原遺跡〈24〉や柴崎遺跡は，発掘調査によりこの時期の大規模な集落であることが確認されている。九重東岡廃寺〈25〉は，部分的な発掘調査がなされ，掘立柱建物跡等の建物跡と軒丸瓦，軒平瓦，平瓦等の遺物が検出されている。金田西坪A遺跡〈26〉からは，確認調査によって多量の炭化米や掘立柱建物跡，大規模な区画溝が検出されている。西坪遺跡は，九重東岡廃寺に隣接し，東側の低地には条里遺構も存在することから，旧河内郡の郡衙跡と想定されている。また，桜川を遡ると筑波郡衙跡とされる平沢官衙遺跡が位置し，つくば山塊東部から桜川左岸に位置する小高，東城寺，小野地区には須恵器の窯群が所在している。これらの遺跡やそこから出土する遺物は，当時の社会構造を考える上で重要な手がかりとなっており，当地域は地方政治・文化の中心地であったと考えられる。

鎌倉幕府成立後，筑波山の南部地域は小田氏の勢力下におかれ，方穂故城跡〈27〉，金田城跡〈28〉，花室城跡〈29〉，小野崎館跡〈30〉，苅間城跡〈31〉などの，小田氏関係の城館跡が数多く所在している。また，三村山麓一帯には中世寺院群があり，修行の場，布教活動の中心地となっていたと考えられる。

戦国期になると，小田氏は次第に衰退していき，天正二年（1574年）佐竹氏により小田城が攻略されると小田氏関係の城館もほとんどが廃城になったと考えられる。その後，当地方は，一時期佐竹氏の支配下に置かれるが，秋田移封後には土浦藩に属することになり，その後明治を迎え現在に至っている。

参考文献

・大山年次，蜂須紀夫　『茨城県　地学のガイド』　コロナ社1977年

・蜂須紀夫，大森昌衛『茨城の地質をめぐって』築地書館1979年

・谷田部の歴史編さん委員会　『谷田部の歴史』　谷田部町教育委員会　1975年９月

・桜村史編さん委員会　『桜村史上巻』　桜村教育委員会　1982年３月

・大穂町史編さん委員会　『大穂町史』　つくば市大穂地区教育事務所　1989年３月

・豊里町史編さん委員会　『豊里の歴史』　豊里町　1985年３月

・茨城県史編さん中世史部会『茨城県史料中世編Ⅰ』茨城県　1970年

・中山信名　『新編常陸国誌』崙書房　復刻版1964年

・茨城県教育財団　「主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　境松遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第41集1987年３月

・茨城県教育財団　「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　柴崎遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第93集1994年９月

・茨城県教育財団　「（仮称）北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書　中台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第102集1995年12月

・茨城県教育財団　「（仮称）葛城地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　神田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第134集1997年３月

・茨城県教育財団　「（仮称）島名・福田坪地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第149集1999年３月

・茨城県教育財団　「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　中原遺跡３」『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集2001年３月

第３章　調査の成果

第１節　遺跡の概要

神田遺跡は，つくば市の中央部，蓮沼川左岸の標高22～24m前後の台地上に立地する。調査区域は，蓮沼川沿いの緩やかに西へ傾斜する河岸段丘部である。調査区域の北側には，苅間城に付随すると考えられる土塁が現存している。

調査範囲は，南北約300m×東西約150mの面積46,811㎡である。すでに37,380㎡については調査報告がなされており，古墳時代の竪穴住居跡18軒，奈良・平安時代の竪穴住居跡120軒，土坑約600基(中近世の地下式壙，火葬施設，方形竪穴状遺構，墓壙を含む)，溝20条等が確認されている。竪穴住居跡からは，土師器や須恵器，土製品（土玉），鉄製品（刀子）等の遺物が出土した。また，第453号土坑からは，白銅製の和鏡「松樹千鳥鏡」が出土している。

今回の調査面積は，9,431㎡である。調査によって，竪穴住居跡27軒，土坑35基，溝15条，道路状遺構２条が確認された。竪穴住居跡からは，土師器や須恵器，鉄製品（刀子）等の遺物が出土した。これらの遺構の多くは，出土遺物から奈良・平安時代のものである。また，検出された土坑の中には，地下式壙，火葬施設，墓壙などが確認されている。調査区北端の斜面部に確認された道路状遺構は，その位置や形状から苅間城の施設と何らかの関係を持つ可能性がある。

遺物は，遺物収納箱（60×40×20cm）に35箱出土している。遺物の大部分は，住居跡から出土した土師器，須恵器（坏，甕，甑など）である。その他の遺物として，縄文土器片，紡錘車，支脚，砥石，陶器・磁器などがある。

第２節　基本層序の検討

調査区内（Ｆ５ｅ2区）にテストピットを掘り，基本土層を観察した（第４図）。

第１層は20～25cmの厚さの耕作土層で，暗褐色をしている。

第２層は，ソフトローム層である。暗褐色をしている。層厚は20cmである。

第３層は，黒褐色をしたハードローム層である。層厚は10～20cmである。第１黒色帯に相当すると考えられる。

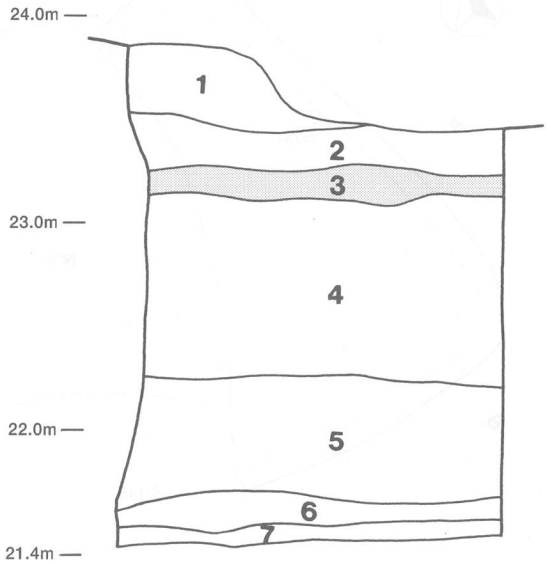
第４層は，褐色をしたハードローム層である。層厚は80～90cmである。

第５層は，暗褐色をしたハードローム層で，極少量の砂礫を含んでいる。層厚は30～40cmである。

第６層は，ハードローム層と常総粘土層の間層でにぶい褐色をしている。層厚は10～20cmほどである。

第７層は，灰白色をした層で常総粘土層である。

なお，遺構は，２層上面で確認した。



第４図　基本土層図

第3節　遺構と遺物

平成9・12年度の調査では，竪穴住居27軒，地下式壙2基，土坑35基，井戸2基，溝15条，道路状遺構2条が確認された。以下，確認された遺構と遺物を時代ごとにまとめて記述する。なお，平成7・8年調査で一部報告されている遺構や遺物については，報告書から実測図・遺物解説を転載し，今回調査した部分と併せて報告する。

1　古墳時代の遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

第140号住居跡（第5図）

位置　調査区南東部のG7a1区に位置し，平坦な台地上に立地している。

重複関係　南東部を第145号住居に掘り込まれ，東部は撹乱されている。

規模と形状　南北4.18m，東西（3.78）mである。第145号住居に掘り込まれ，撹乱も受けているため平面形は不明である。西壁高は50cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。所々にわずかな硬化面が確認できる。

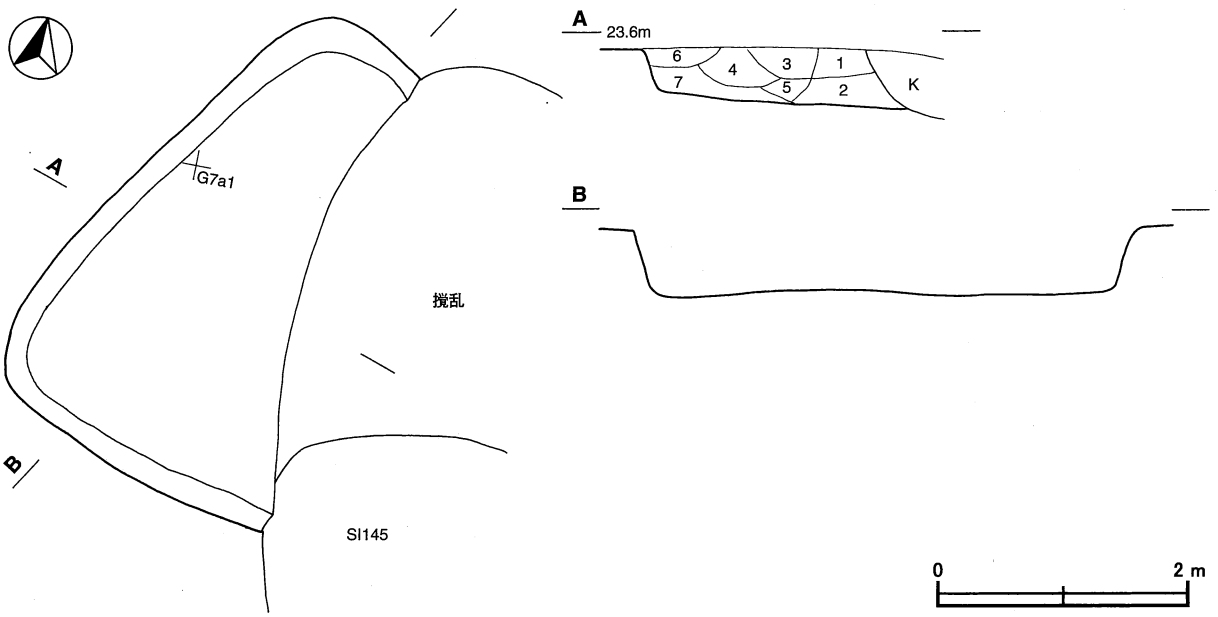
覆土　焼土や炭化物を含む7層からなる。いずれの層も不規則なブロック状の堆積をし人為堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
2　黒　褐　色　炭化物中量，ローム粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子・炭化物少量
4　暗　褐　色　炭化物中量，ローム粒子少量，焼土粒子微量
5　黒　褐　色　炭化物中量，ローム粒子少量
6　暗　褐　色　ロームブロック少量
7　黒　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片20点，須恵器片5点が南西コーナー付近の覆土下層（第7層）から出土している。いずれも坏や甕の細片である。なお，流れ込んだ陶器片3点が覆土上層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物（坏口縁部，甕口縁部）の形状，第145号住居跡（8世紀後半）に掘り込まれていることなどから6世紀後葉～7世紀前葉と考えられる。



第5図　第140号住居跡実測図

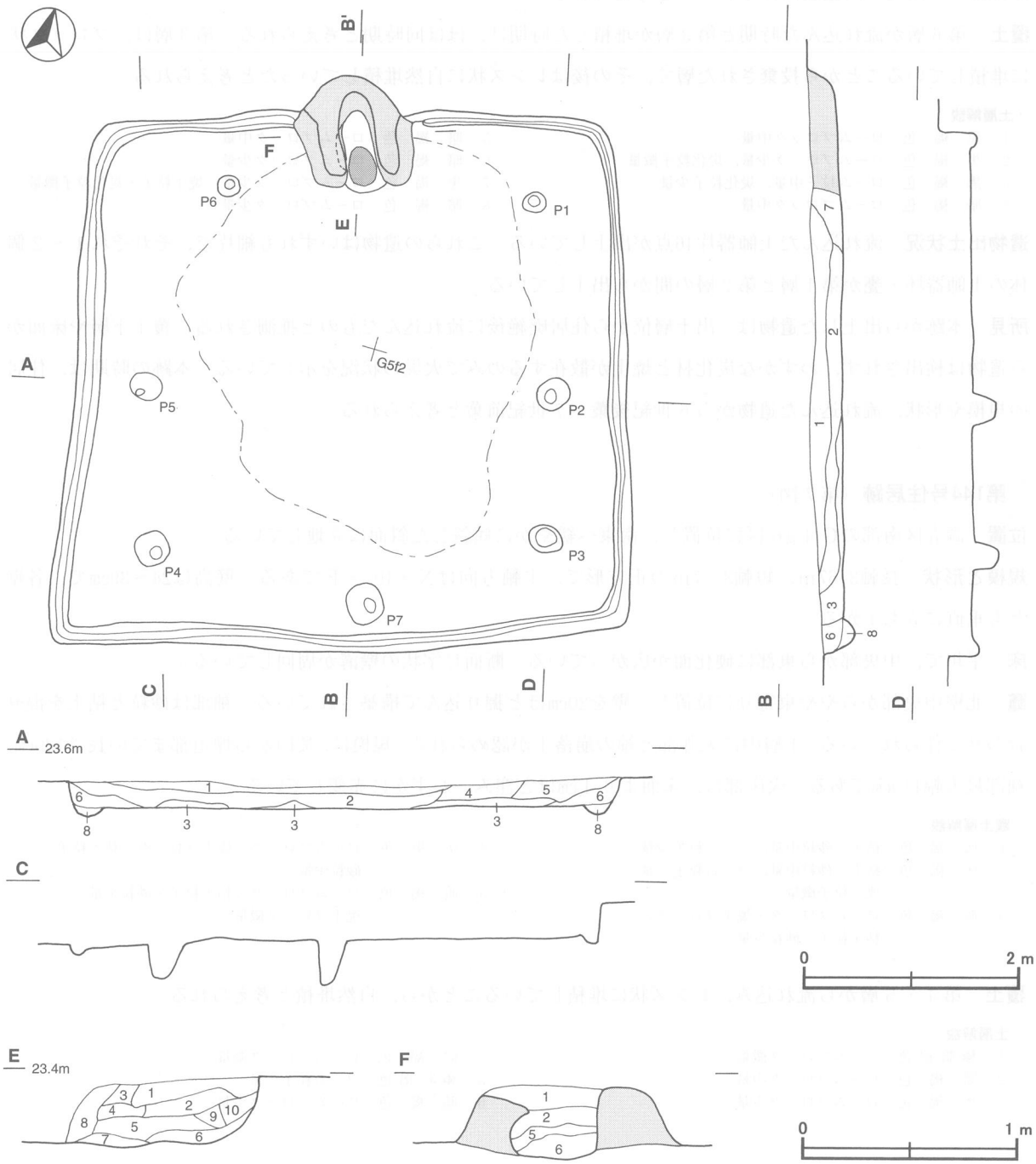
第142号住居跡（第６図）

位置　調査区南部のＧ５ｆ２区に位置し，南へ傾斜した斜面に立地している。

規模と形状　長軸5.40ｍ，短軸5.05ｍの正方形で，主軸方向はＮ－20°－Ｗである。壁高は20～25cmで，各壁とも垂直に立ち上がる。

床　平坦である。中央部から竈付近にかけて硬化面が広がっている。東部の床面には炭化材，南壁際にはブロック状の焼土が散在し焼失家屋の状況を示している。断面Ｕ字状の壁溝が周回している。

竈　北壁中央部に位置し，壁を40cmほど掘り込んで構築されている。袖部は砂粒と粘土を混ぜ合わせて作られており，残存状況は良好である。奥壁には天井の残存部が，燃焼部には多量の灰が認められる。規模は，焚口



第６図　第142号住居跡実測図

から煙道部までの長さ100cm，袖部最大幅100cmである。火床部は，床面よりも３cmほど窪み，わずかに赤変している。

竈土層解説

1　灰赤褐色　粘土粒子・砂粒多量
2　暗赤褐色　粘土粒子・砂粒中量，焼土ブロック・炭化物少量
3　にぶい黄褐色　粘土粒子少量，焼土粒子微量
4　灰　黄　色　粘土粒子中量，焼土ブロック少量
5　極暗赤褐色　焼土ブロック・粘土粒子少量，砂粒微量
6　灰　褐　色　焼土ブロック少量，灰多量
7　赤　褐　色　焼土ブロック多量
8　暗　褐　色　ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量，焼土ブロック微量
9　極暗赤褐色　焼土粒子中量，炭化粒子少量
10　にぶい赤褐色　焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット　７か所。主柱穴はＰ２～Ｐ５で，深さ25～42cmである。北壁側のＰ１・Ｐ６は深さ25cmほどである。主柱穴よりも小さいが主柱穴と平行に並ぶことから，柱穴と推測される。Ｐ７は南壁中央寄りに位置し，深さは25cmで，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　第６層が流れ込んだ時期と第３層が堆積した時期は，ほぼ同時期と考えられる。第３層は，ブロック状に堆積していることから投棄された層で，その後はレンズ状に自然堆積していったと考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック中量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量
5　暗　褐　色　ロームブロック中量
6　暗　褐　色　ロームブロック少量
7　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　流れ込んだ土師器片46点が出土している。これらの遺物はいずれも細片で，それぞれ１～２個体の土師器坏・甕が第１層と第２層の間から出土している。

所見　本跡から出土した遺物は，出土層位から住居廃絶後に流れ込んだものと推測される。覆土下層や床面から遺物は検出されず，わずかな炭化材と焼土が散在するのみで火災の状況を示している。本跡の時期は，住居の規模や形状，流れ込んだ遺物から６世紀後葉～７世紀前葉と考えられる。

第144号住居跡（第７図）

位置　調査区南部のＧ４ｇ6区に位置し，南東へ緩やかに傾斜した斜面に立地している。

規模と形状　長軸3.67m，短軸3.57mの正方形で，主軸方向はＮ－10°－Ｅである。壁高は24～39cmで，各壁とも垂直に立ち上がる。

床　平坦で，中央部から東部に硬化面が広がっている。断面Ｕ字状の壁溝が周回している。

竈　北壁中央部からやや東寄りに位置し，壁を20cmほど掘り込んで構築されている。袖部は砂粒と粘土を混ぜ合わせて作られている。土層中に天井部と袖の崩落土が認められる。規模は，焚口から煙道部までの長さ120cm，袖部最大幅110cmである。火床部は，床面より４cmほど窪み，わずかに赤変している。

竈土層解説

1　灰　褐　色　粘土・砂粒中量，ローム粒子少量
2　灰　褐　色　粘土・砂粒中量，ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
4　灰　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
5　暗　褐　色　ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量，焼土ブロック微量

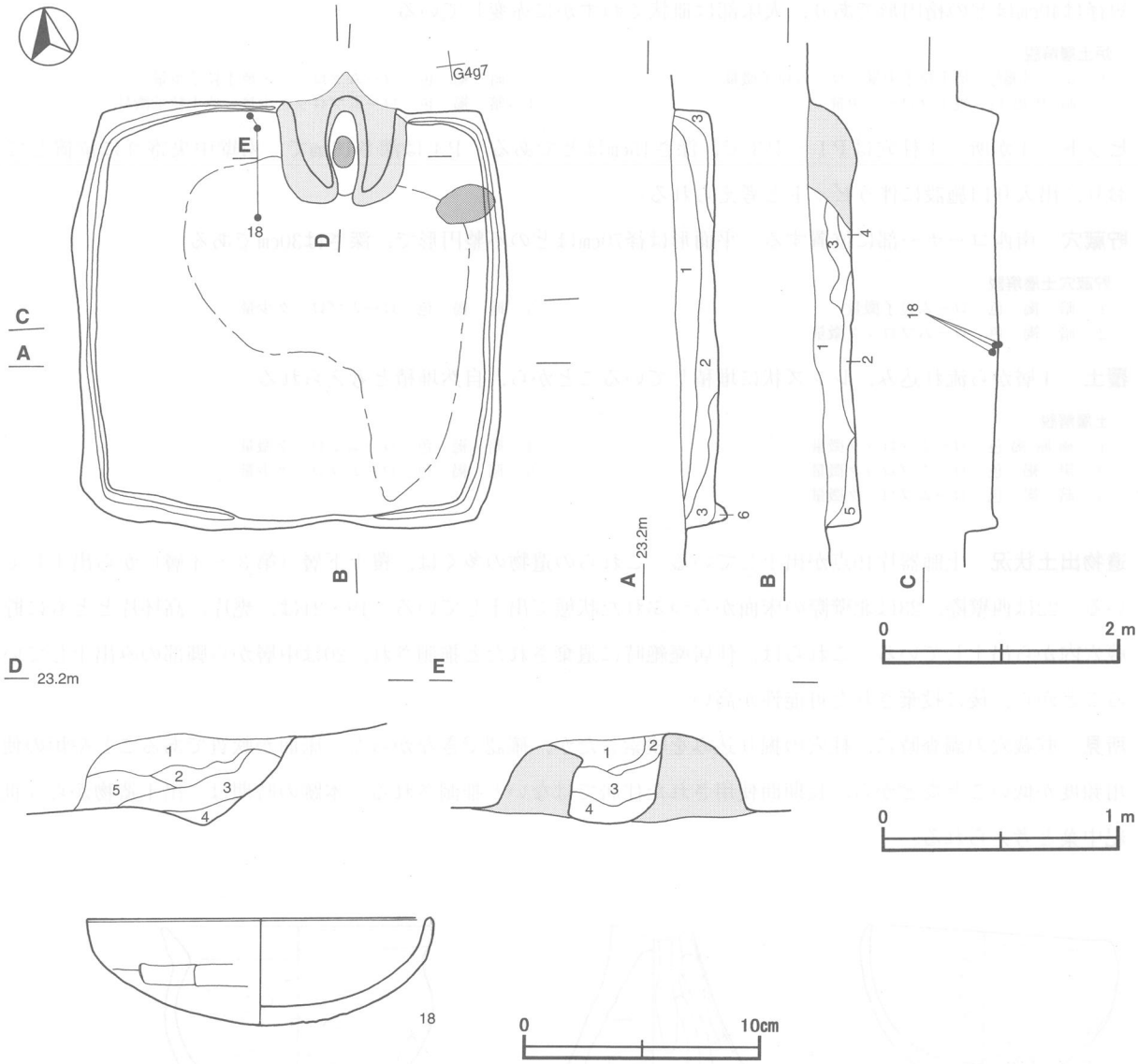
覆土　第４・５層から流れ込み，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　極暗褐色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量
4　暗　褐　色　ロームブロック微量
5　極暗褐色　ローム粒子少量
6　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片57点が出土している。これらの遺物の多くは，竈周辺の覆土下層（第２～３層）から出土している。18は竈西側の床面から出土した細片を接合したものである。竈東側の床面からは，土師器の甕の口縁部片が出土している。

所見　本跡から出土した遺物は，出土位置から住居廃絶時に遺棄されたと推測される。本跡の時期は，これらの遺物から７世紀前葉と考えられる。



第７図　第144号住居跡・出土遺物実測図

第144号住居跡出土遺物観察表（第７図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
18	土師器	坏	14.5	4.5	－	赤色粒子	橙色	普通	体部内外面ヘラ削り後ナデ	竈西側床面	50%砥石転用

第146号住居跡（第８・９図）

位置　調査区南部のＧ４b6区に位置し，南東へ緩やかに傾斜した斜面に立地している。

規模と形状　長軸4.70m，短軸4.37mの正方形で，主軸方向はＮ－22°－Ｗである。壁高は22～24cmで，各壁とも外傾して立ち上がる。

床　中央部がやや窪んでおり，軟質である。断面Ｕ字状の壁溝が周回している。

炉　北壁中央部よりやや西寄りに位置し，床面を４cmほど掘り込んで設置されている。長径（南北）は50cm，短径は40cmほどの楕円形であり，火床部は皿状でわずかに赤変している。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子微量
2　暗赤褐色　焼土ブロック中量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
4　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量

ピット　４か所。主柱穴はＰ１～Ｐ３で，深さ15cmほどである。Ｐ４は深さ16cmで，南壁中央寄りに位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　南西コーナー部に位置する。平面形は径70cmほどの不整円形で，深さは30cmである。

貯蔵穴土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量

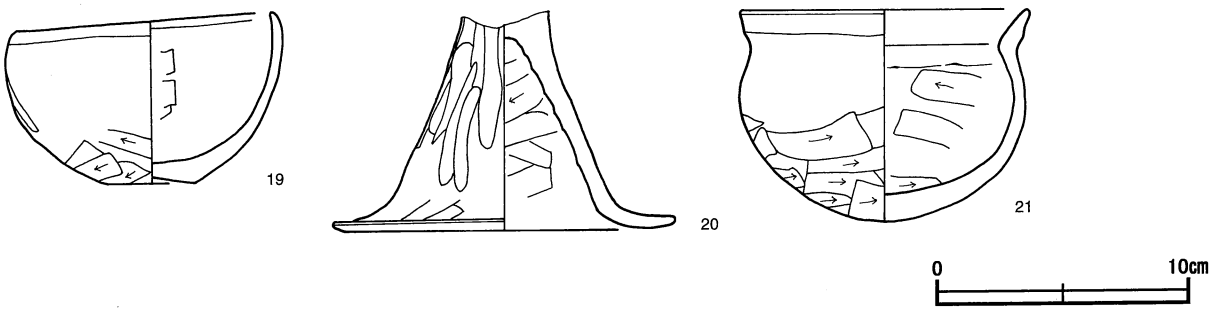
覆土　４層から流れ込み，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

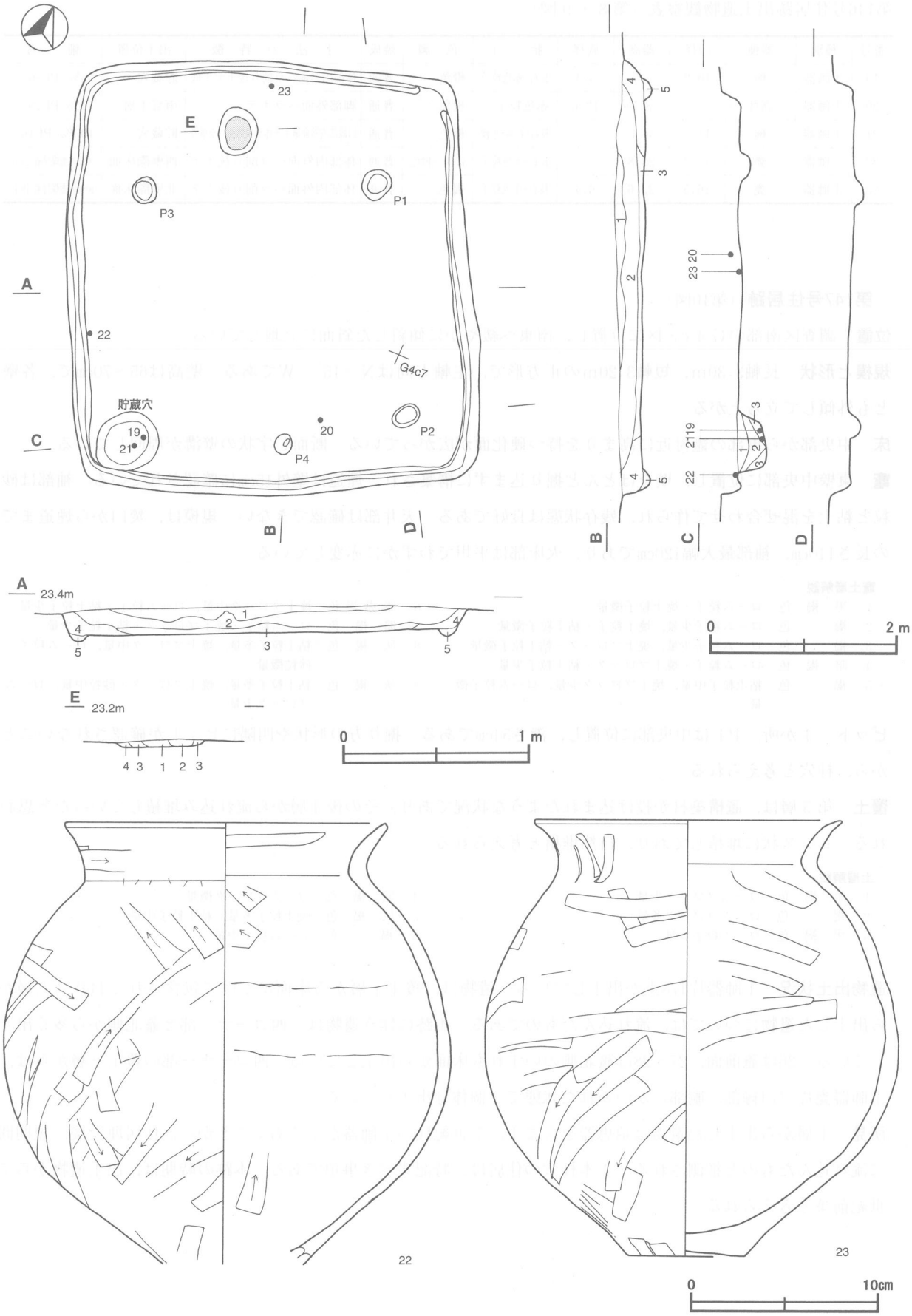
1　極暗褐色　ロームブロック微量
2　黒　褐　色　ロームブロック微量
3　暗　褐　色　ロームブロック微量
4　暗　褐　色　ロームブロック微量
5　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片19点が出土している。これらの遺物の多くは，覆土下層（第３～４層）から出土している。22は西壁際，23は北壁際の床面からつぶれた状態で出土している。19・21は，甕片，高坏片とともに貯蔵穴内から出土している。これらは，住居廃絶時に遺棄されたと推測され，20は中層から脚部のみ出土していることから，後に投棄された可能性が高い。

所見　貯蔵穴の調査時に，柱穴の掘り込みを検索したが，確認できなかった。床面が軟質であることや炉の使用頻度が低いことなどから，長期間使用された住居ではないと推測される。本跡の時期は，出土遺物から５世紀中葉と考えられる。



第８図　第146号住居跡出土遺物実測図



第9図　第146号住居跡・出土遺物実測図

第146号住居跡出土遺物観察表（第８・９図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
19	土師器	椀	10.2	6.7	3.4	長石･赤色粒子	橙色	普通	体部内外面ヘラ削り後ナデ平底	貯蔵穴	95% PL16
20	土師器	高坏	－	(8.7)	13.6	赤色粒子	橙色	普通	脚部外面ヘラナデ	南部下層	50% PL16
21	土師器	椀	11.5	8.4	－	長石･石英･小礫	橙色	普通	口縁部内外面横ナデ体部内外面ヘラ削り	貯蔵穴	100% PL16
22	土師器	甕	17.2	(23.8)	－	長石･赤色粒子	にぶい橙色	普通	体部内外面ヘラ削り後ナデ	西壁際床面	90%外面煤付着 PL16
23	土師器	甕	16.5	23.6	6.4	長石･赤色粒子	褐色	普通	体部内外面ヘラ削り後ナデ	北壁際床面	90%外面煤付着 PL16

第147号住居跡（第10図）

位置　調査区南部のＧ４ｃ５区に位置し，南東へ緩やかに傾斜した斜面に立地している。

規模と形状　長軸3.30m，短軸3.20mの正方形で，主軸方向はＮ－15°－Ｗである。壁高は65～70cmで，各壁とも外傾して立ち上がる。

床　中央部から東部の竈付近に高まりを持つ硬化面が広がっている。断面Ｕ字状の壁溝が周回している。

竈　東壁中央部に位置し，壁をほとんど掘り込まずに構築され，煙道は壁外15cmに確認されている。袖部は砂粒と粘土を混ぜ合わせて作られ，残存状態は良好である。天井部は確認できない。規模は，焚口から煙道までの長さ110cm，袖部最大幅120cmであり，火床部は平坦でわずかに赤変している。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・粘土粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子少量，焼土ブロック・粘土粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量
5　褐　　色　粘土粒子中量，焼土ブロック少量，ローム粒子微量
6　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ローム粒子・粘土粒子少量
7　暗　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量
8　灰　褐　色　粘土粒子多量，焼土ブロック中量，ローム粒子・砂粒微量
9　灰　褐　色　粘土粒子多量，焼土ブロック・砂粒中量，ローム ブロック少量

ピット　１か所。Ｐ１は中央部に位置し，深さ54cmである。掘り方の形状や四隅にピットが確認されないことから，柱穴と考えられる。

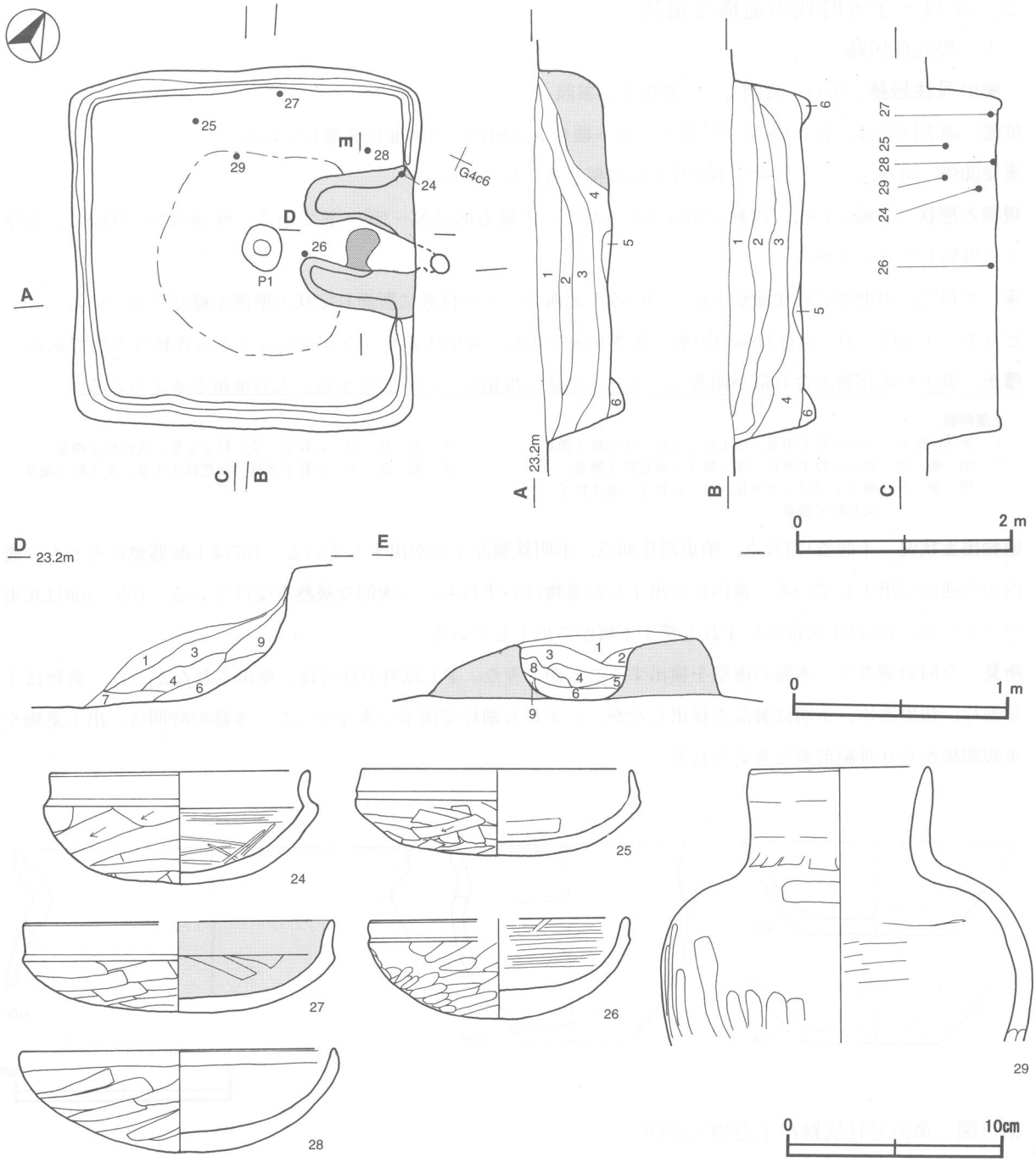
覆土　第５層は，竈構築材が投げ込まれたような状況であり，その後４層から流れ込み堆積していったと思われる。レンズ状に堆積しており，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック多量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量
4　暗　褐　色　ロームブロック微量
5　灰　褐　色　焼土粒子多量，粘土粒子中量
6　褐　　色　ローム粒子中量

遺物出土状況　土師器片178点が出土している。遺物は，覆土上層から床面にかけて包含されており，上層から出土した遺物については，流れ込んだものである。本跡に伴う遺物は，西コーナー部と竈北側から多く出土している。26は竈前面，27・28は竈北側のいずれも床面から出土している。西コーナー部の覆土下層からは，土師器甕片（口縁部，胴部）がつぶれた状態で２個体分出土している。

所見　上層から出土した遺物は須恵器を含まず，７世紀代の土師器が主であることから，住居埋没後，短期間に流れ込んだものと推測される。１本柱穴の住居は，特記すべき事項である。本跡の時期は，出土遺物から７世紀前葉と考えられる。



第10図　第147号住居跡・出土遺物実測図

第147号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
24	土師器	坏	12.0	5.2	－	長石・石英	褐灰色	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ内面ヘラ磨き	竈北側下層	100% PL16
25	土師器	坏	12.6	4.0	－	長石･赤色粒子	明赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り内面ヘラ削り後ナデ	北部上層	95% PL16
26	土師器	坏	[12.0]	4.7	－	長石・石英	にぶい橙色	普通	体部外面ヘラナデ内面ヘラ磨き	竈西側床面	45%
27	土師器	坏	[14.5]	4.3	－	長石・石英	褐灰色	普通	体部外面ヘラ削り内面ナデ	北壁際床面	60%内面黒色処理
28	土師器	坏	14.6	4.7	－	長石・石英	灰褐色	普通	体部内外面ヘラ削り後ナデ	竈北側床面	60%外面煤付着
29	土師器	壺	8.4	(12.9)	－	長石･赤色粒子	明赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ	北部上層	50%

2　奈良・平安時代の遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

第91号住居跡（第11・12図）　『神田２』参照

位置　調査区北部のＢ６ｈ8区に位置し，北へ緩やかに傾斜した斜面に立地している。

重複関係　南西コーナー付近を第92号住居に掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.10m，短軸3.00mの正方形で，主軸方向はＮ－10°－Ｅである。壁高は14～16cmで，各壁とも外傾して立ち上がる。

床　平坦で，中央部に硬化面が広がっている。北西コーナー付近に断面Ｕ字状の壁溝が確認されている。

ピット　１か所。Ｐ１は径21cmの円形，深さ９cmである。対応するピットがないことから性格は不明である。

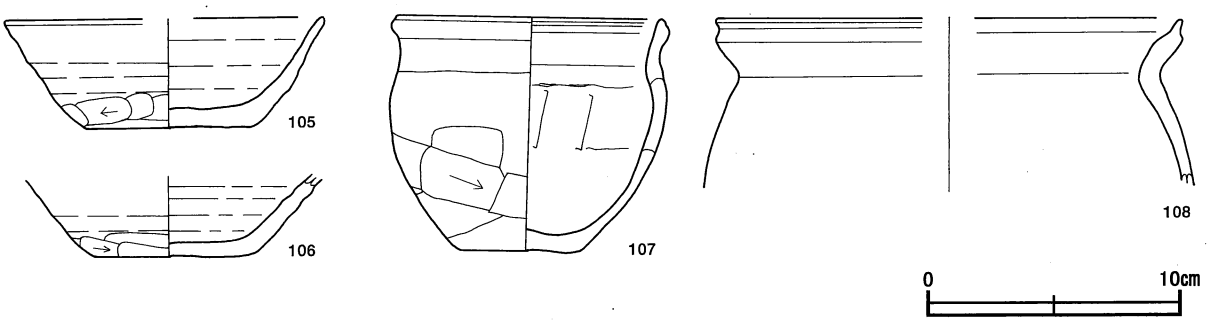
覆土　焼土や炭化物の含有量が顕著で，ブロック状に堆積していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

1　極暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　焼土小ブロック中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片112点，須恵器片39点，不明鉄製品１点が出土している。107は土師器甕片とともに竈内から逆位で出土している。竈内から出土した遺物はいずれも，二次的な被熱を受けている。105・108は北東コーナー部，106は中央部のいずれも覆土下層から出土している。

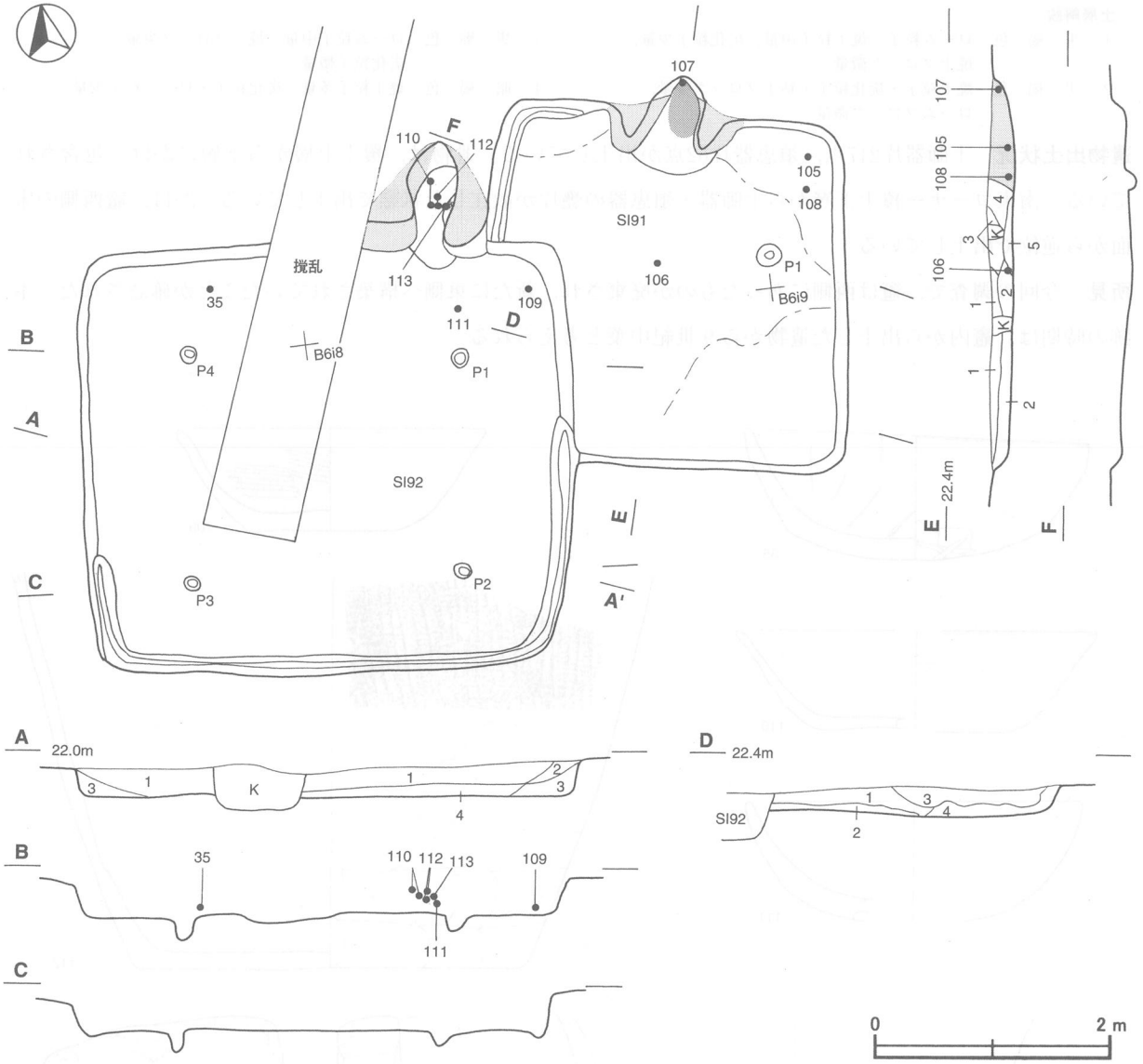
所見　今回の調査で，本跡の南壁を検出することができた。Ｐ１以外の柱穴は，検出されなかった。遺物は土師器片，須恵器片，不明鉄製品を検出したが，いずれも細片で図示できなかった。本跡の時期は，出土遺物や重複関係から９世紀前葉と考えられる。



第11図　第91号住居跡出土遺物実測図

第91号住居跡出土遺物観察表（第11図）　ゴシックの番号は報告済みである。

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
105	須恵器	坏	[12.7]	4.3	6.6	長石・雲母	黄灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り	北東部覆土下層	70%
106	須恵器	坏	－	(3.0)	6.2	長石・雲母	灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り	中央部覆土下層	40%
107	土師器	小形甕	10.5	9.3	4.9	長石･雲母･小礫	赤褐色	普通	体部外面下半ヘラ削り内面ヘラナデ	竈内	95%
108	土師器	甕	[18.5]	(6.7)	－	長石･雲母･小礫	にぶい赤褐色	普通	口縁部内・外面ナデ	北東部覆土下層	5％



第12図　第91・92号住居跡実測図

第92号住居跡（第12・13図）　『神田２』参照

位置　調査区北部のＢ６ｈ8区に位置し，北へ緩やかに傾斜した斜面に立地している。

重複関係　北東コーナー付近が第91号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸4.20m，短軸3.90mの正方形で，主軸方向はＮ－５°－Ｅである。壁高は20～25cmで，各壁とも外傾して立ち上がる。

床　軟質で平坦である。北壁中央付近と撹乱された床面に赤変硬化の跡が検出された。断面Ｕ字状の壁溝が南壁に確認された。

竈　竈は北壁の東コーナー寄りに位置し，壁を60cmほど掘り込んで構築されている。

ピット　４か所。主柱穴はＰ１～Ｐ４で，深さ20～25cmである。

覆土　第３層から流れ込み，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量，焼土ブロック微量

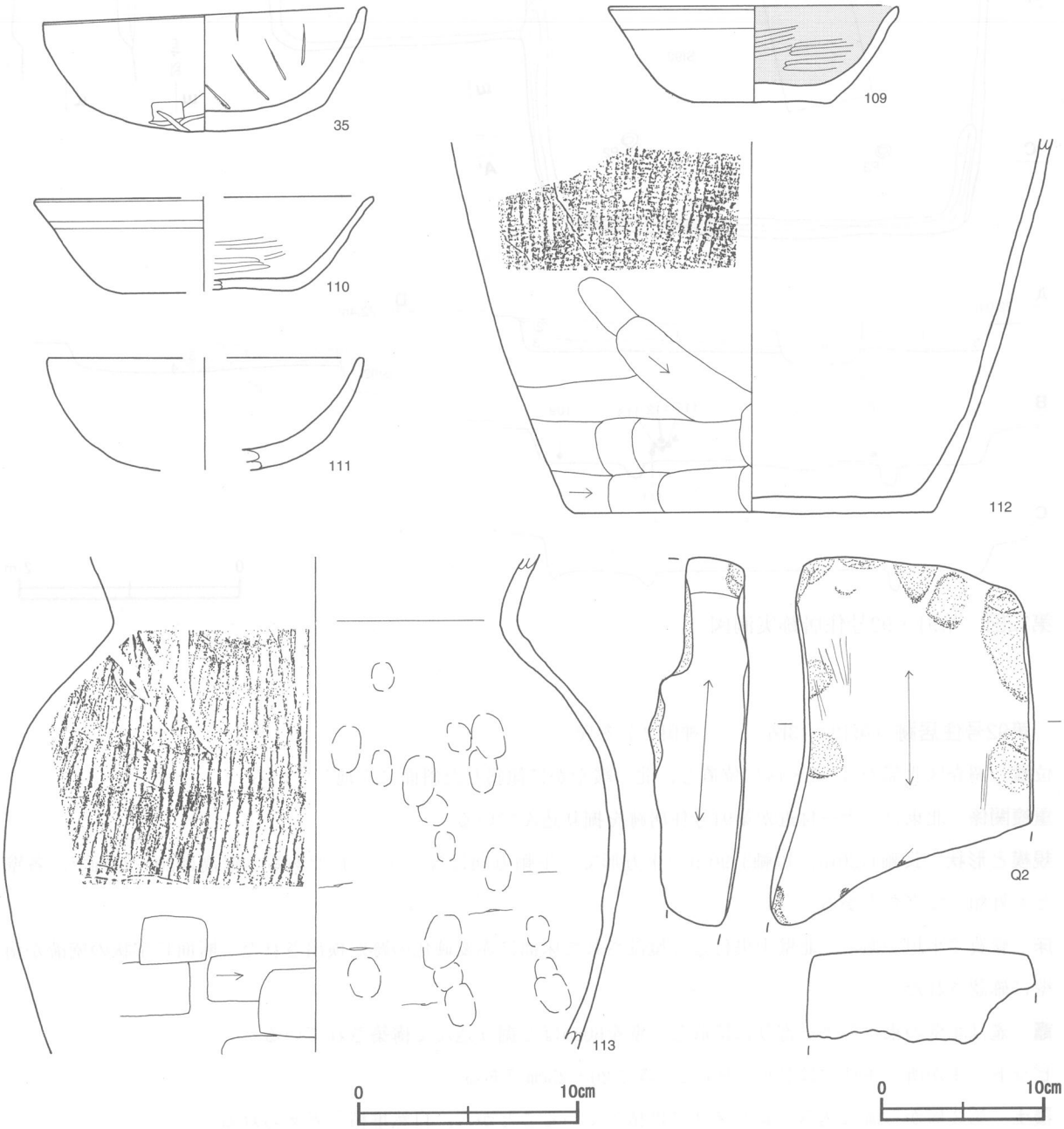
2　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量，ロームブロック微量

3　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量

4　暗　褐　色　焼土粒子多量，炭化粒子・ローム粒子少量

遺物出土状況　土師器片217点，須恵器片62点が出土している。遺物は，覆土上層から下層にかけて包含されている。南東コーナー覆土下層から土師器・須恵器の甕片が散在した状態で出土している。35は，竈西側の床面から逆位で出土している。

所見　今回の調査で，竈は西側にあったものが廃棄され，新たに東側へ構築されていたことが確認された。本跡の時期は，竈内から出土した遺物から9世紀中葉と考えられる。



第13図　第92号住居跡出土遺物実測図

第92号住居跡出土遺物観察表（第13図）　ゴシックの番号は報告済みである。

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
35	土師器	坏	14.5	5.6	－	長石･赤色粒子	橙色	普通	体部内外面ヘラ削り後ナデ内面一部磨き	北壁際床面	90%
109	土師器	坏	13.2	4.5	6.8	長石・雲母	橙色	普通	体部内面ヘラ磨き	北東部覆土下層	90%内面黒色処理
110	土師器	坏	[15.6]	4.2	[7.6]	長石・雲母	にぶい褐色	普通	底部回転糸切り	竈内	30%
111	土師器	坏	[14.4]	(5.1)	－	長石･雲母･小礫	橙色	普通	器面荒れ調整不明	中央部覆土下層	30%
112	須恵器	甕	－	(17.0)	16.5	長石・雲母	橙色	普通	体部上位格子叩き下位ヘラ削り	竈内	20%
113	須恵器	甕	－	(22.6)	－	長石・雲母	橙色	普通	内面指頭圧痕	竈内	20%

番号	器種	計　測　値				材　質	特　　徴	出土位置	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q2	砥石	(22.2)	15.8	6.0	(1,900)	凝灰岩	二面使用二面とも一方向へ使用痕一部被熱痕有り	覆土上層	PL19

第110号住居跡（第14～16図）　『神田２』参照

位置　調査区北西部のＣ６ｂ１区に位置し，西へ緩やかに傾斜した斜面に立地している。

規模と形状　長軸4.80m，短軸4.78mの正方形で，主軸方向はＮ－５°－Ｅである。壁高は32～37cmで，各壁とも垂直に立ち上がる。

床　全面が貼床である。中央部から竈付近は高まりを持つ硬化面が広がっている。北東コーナー付近を除いて断面Ｕ字状の壁溝が確認された。竈南側の貼床下面が楕円形に赤変硬化しており，竈跡と考えられる。北東コーナー付近は，締まりもなく軟質な床である。また，竈跡から西壁，さらに南壁際から北方向へ東壁溝に平行な壁溝が確認された。

ピット　３か所。主柱穴はＰ１～Ｐ３で，深さ12～17cmである。

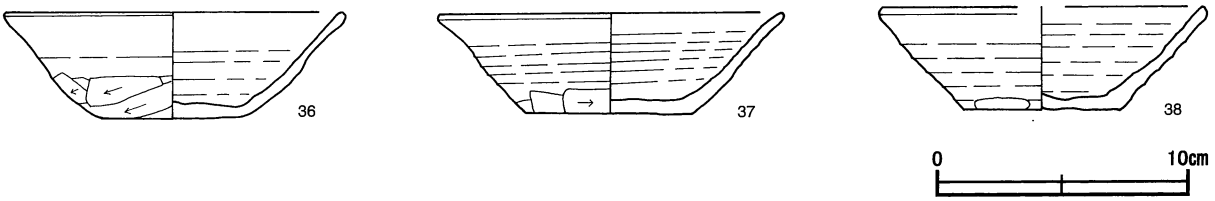
覆土　第４層から流れ込み，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。第５層は貼床である。

土層解説

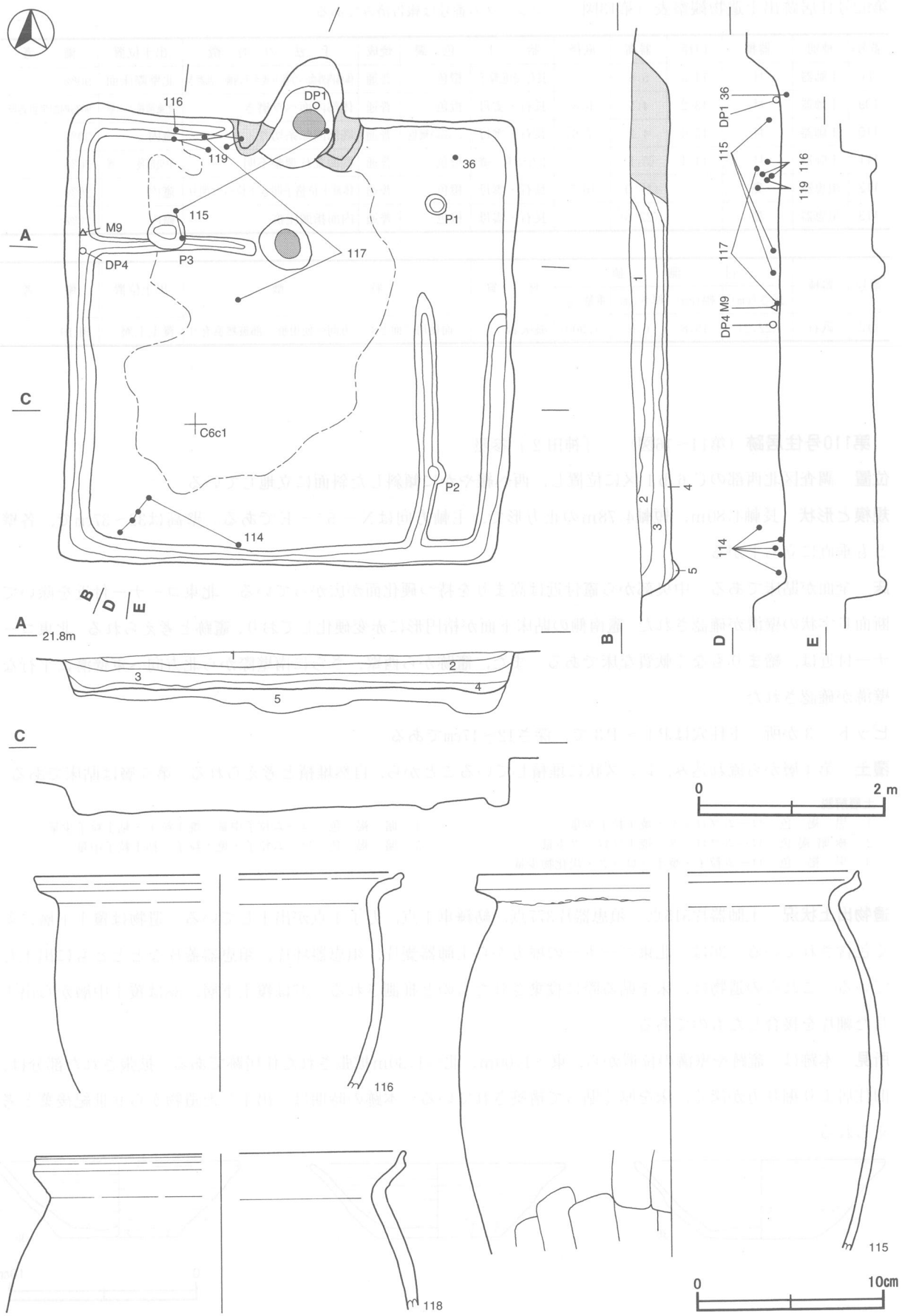
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
2　極暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化物少量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・粘土粒子少量
5　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子中量

遺物出土状況　土師器片515点，須恵器片377点，紡錘車１点，刀子１点が出土している。遺物は覆土下層に多く包含されている。36は，北東コーナーの堀方から土師器甕片，須恵器坏片，須恵器蓋片などとともに出土している。これらの遺物は，床を貼る際に投棄されたものと推測される。37は覆土下層，38は覆土中層から出土した細片を接合したものである。

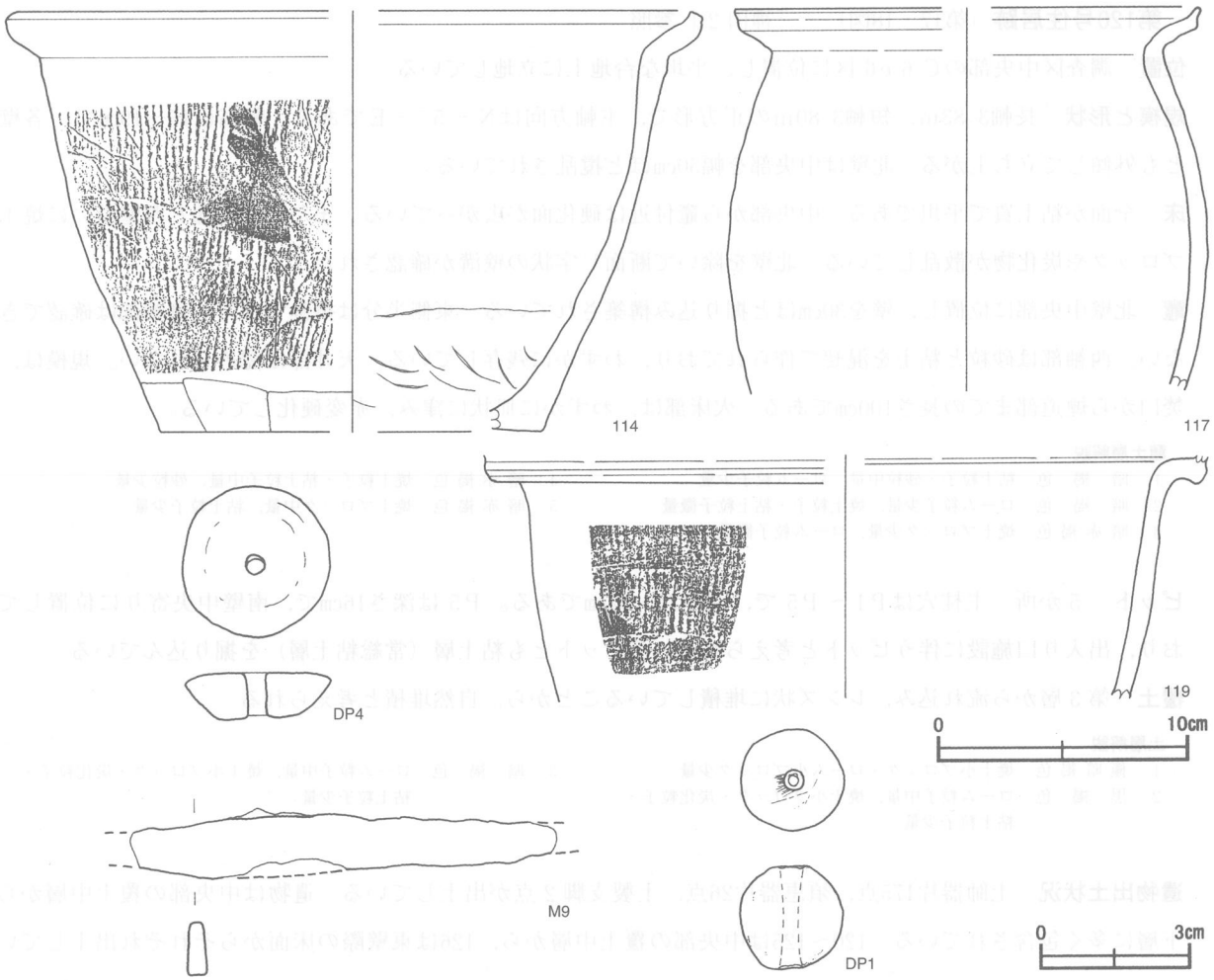
所見　本跡は，竈跡や壁溝の位置から，東へ1.00m，北へ1.30m拡張された住居跡である。拡張された部分は，旧住居より掘り方が深く，床を厚く貼って構築されている。本跡の時期は，出土した遺物から９世紀後葉と考えられる。



第14図　第110号住居跡出土遺物実測図(1)



第15図　第110号住居跡・出土遺物実測図



第16図　第110号住居跡出土遺物実測図(2)

第110号住居跡出土遺物観察表（第14・16図）　ゴシックの番号は報告済みである。

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
36	須恵器	坏	13.4	4.3	5.9	長石・雲母	灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部多方向のヘラ削り	北東コーナー床面	100% PL17
37	須恵器	坏	13.6	4.1	6.5	長石・雲母	灰色	普通	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	覆土中層	70% PL17
38	須恵器	坏	[12.8]	4.1	6.2	長石・雲母	灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部多方向のヘラ削り	覆土上層	40%
114	須恵器	鉢	[27.0]	17.0	－	長石・雲母・小礫	黒褐色	普通	体部上位格子叩き下位ヘラ削り内面当て具痕	南西部覆土上層	40%
115	土師器	甕	[20.5]	(20.4)	－	長石・雲母・小礫	にぶい褐色	普通	体部外面下位ヘラ削り	竈内	30%
116	土師器	甕	[19.7]	(11.6)	－	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部内外面ナデ	竈西側覆土上層	15%
117	土師器	甕	[18.5]	(15.4)	－	長石・雲母	にぶい橙色	普通	体部内外面ナデ	中央部床面	10%
118	土師器	甕	[19.8]	(8.3)	－	長石・雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	体部外面ナデ内面ヘラナデ	覆土中	5%
119	須恵器	甕	－	(9.8)	－	長石・雲母・小礫	黄灰色	普通	体部上位縦位並行叩き内面ナデ	竈西側覆土上層	5%

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長径	厚さ	孔径	重量				
DP1	土玉	2.1	2.0	0.4	7.4	土製	断面は棗状 穿孔は円形	中央部床面	PL20
DP4	紡錘車	6.0	1.8	0.7	63.0	土製	断面は台形 穿孔は円形	西壁溝	100%

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
M9	刀子	(8.5)	1.2	0.4	(10.0)	鉄	先端部および中子部欠損	西壁溝際	

第120号住居跡（第17・18図）　『神田２』参照

位置　調査区中央部のＣ６ｅ6区に位置し，平坦な台地上に立地している。

規模と形状　長軸3.83m，短軸3.80mの正方形で，主軸方向はＮ－５°－Ｅである。壁高は16～19cmで，各壁とも外傾して立ち上がる。北壁は中央部を幅50cmほど撹乱されている。

床　全面が粘土質で平坦である。中央部から竈付近は硬化面が広がっている。また，中央部と西壁沿いに焼土ブロックや炭化物が散乱している。北壁を除いて断面Ｕ字状の壁溝が確認された。

竈　北壁中央部に位置し，壁を30cmほど掘り込み構築されている。東側半分は撹乱されて，東袖部は確認できない。西袖部は砂粒と粘土を混ぜて作られており，わずかに残存している。天井部は認められない。規模は，焚口から煙道部までの長さ100cmである。火床部は，わずかに皿状に窪み，赤変硬化している。

竈土層解説

1　暗　褐　色　粘土粒子・砂粒中量，ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・粘土粒子微量
3　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子微量
4　暗赤褐色　焼土粒子・粘土粒子中量，砂粒少量
5　暗赤褐色　焼土ブロック中量，粘土粒子少量

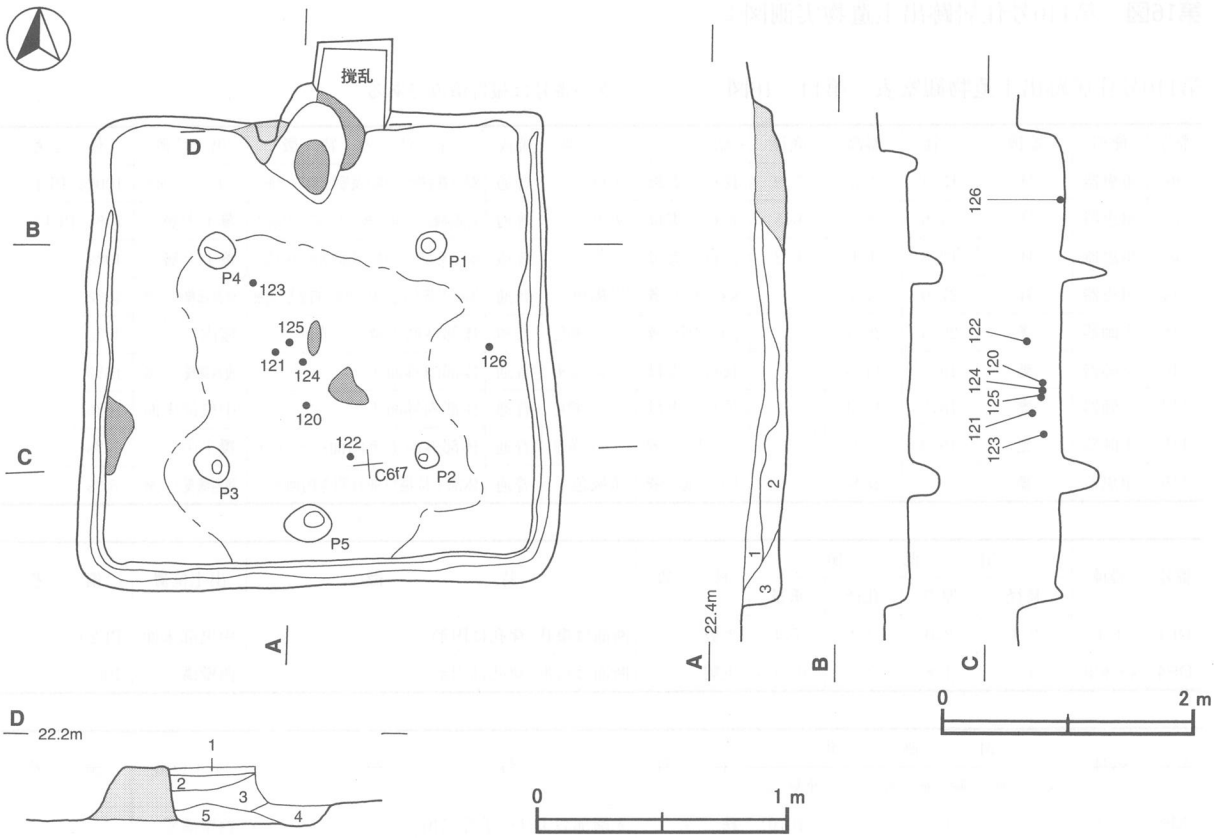
ピット　５か所。主柱穴はＰ１～Ｐ５で，深さ24～32cmである。Ｐ５は深さ16cmで，南壁中央寄りに位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。各ピットとも粘土層（常総粘土層）を掘り込んでいる。

覆土　第３層から流れ込み，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　極暗褐色　焼土小ブロック・ローム小ブロック少量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量

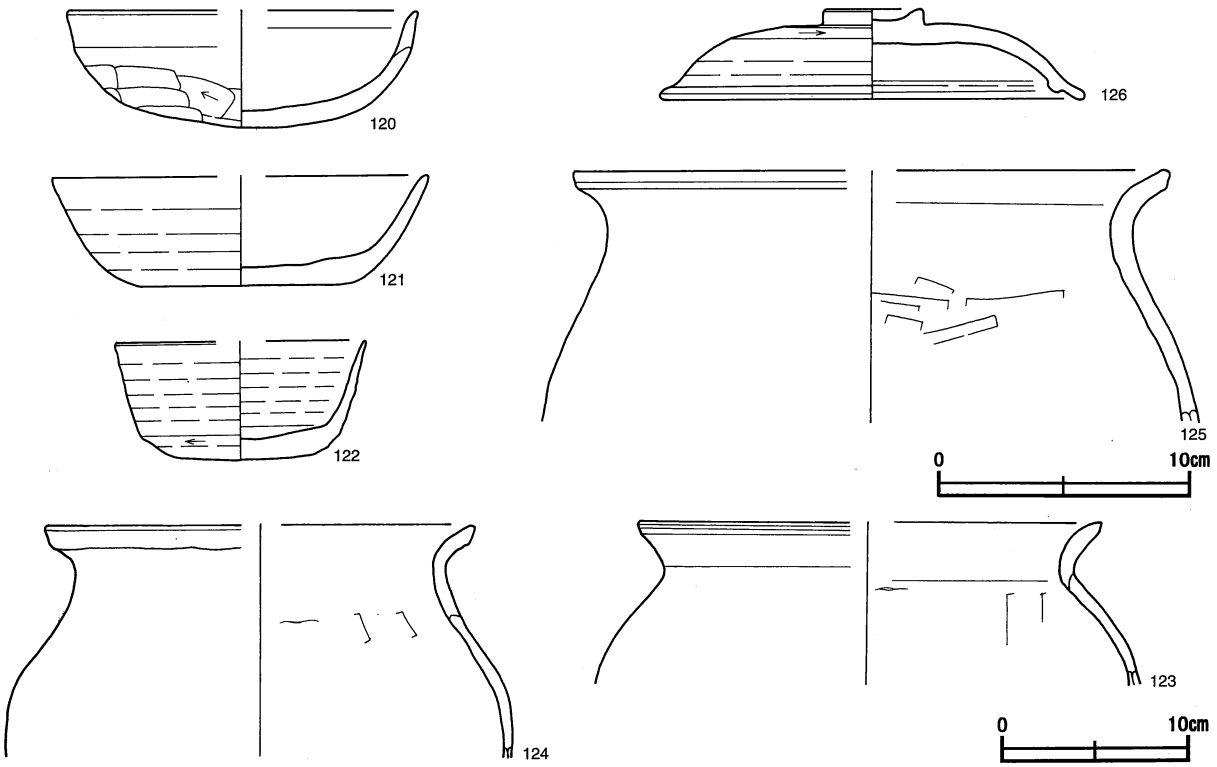
遺物出土状況　土師器片175点，須恵器片26点，土製支脚２点が出土している。遺物は中央部の覆土中層から下層に多く包含されている。120～125は中央部の覆土中層から，126は東壁際の床面からそれぞれ出土してい



第17図　第120号住居跡実測図

る。土製支脚は，焚口前方の床面から横位で出土している。

所見　今回の調査で，北東部のピットが検出され，本跡が柱穴を４本持つ住居跡であることが確認された。火床面の検出状況から竈が長期に，または頻繁に使用された痕跡が認められる。さらに床面の中央部も著しく硬化している。これらのことから本跡は，長期間にわたって居住されていた住居と考えられる。床面に焼土ブロックや炭化材が散乱することから，本跡が焼失した可能性もある。出土遺物から，本跡の時期は８世紀前葉と考えられる。



第18図　第120号住居跡出土遺物実測図

第120号住居跡出土遺物観察表（第18図）　ゴシックの番号は報告済みである。

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
120	土師器	坏	[14.0]	4.7	－	雲母･赤色粒子	明赤褐色	普通	体部下位ヘラ削り	中央部覆土中層	60%
121	須恵器	坏	[15.0]	4.4	[8.0]	長石・雲母	灰黄色	普通	体部下端回転ヘラ削り底部回転ヘラ削り	中央部覆土上層	45%
122	須恵器	坏	[9.9]	4.7	6.9	長石・雲母	灰白色	普通	体部下端回転ヘラ削り底部回転ヘラ削り	南東部覆土上層	50%
123	土師器	甕	[24.0]	(8.6)	－	長石･雲母･小礫	にぶい黄橙	普通	体部外面ナデ内面ヘラナデ	中央部覆土中層	10%
124	土師器	甕	[22.1]	(12.1)	－	長石･雲母･小礫	にぶい橙色	普通	体部外面ナデ内面ヘラナデ	中央部覆土中層	15%
125	土師器	甕	[23.7]	(10.0)	－	長石･雲母･小礫	橙色	普通	体部外面ナデ内面ヘラナデ	中央部覆土中層	10%
126	須恵器	蓋	16.9	3.6	－	長石・雲母	灰黄色	普通	天井部回転ヘラ削り後ロクロナデ	東壁際床面	90%

第141号住居跡（第19・20図）

位置　調査区南端のＨ６ａ2区に位置し，南へ傾斜した斜面に立地している。

規模と形状　長軸4.00m，短軸3.66mの長方形で，主軸方向はＮ－５°－Ｅである。壁高は30～38cmで，各壁とも外傾して立ち上がる。

床　平坦で，中央部から竈付近に硬化面が広がっている。北東コーナー付近に，竈構築材と見られる粘土が投棄されている。東壁から南壁にかけて断面U字状の壁溝が周回している。

竈　北壁中央部に位置し，壁を50cmほど掘り込んで構築されている。袖部は砂粒と粘土を混ぜ合わせて作られており，つぶれた状態で検出された。天井部は確認できない。焚口の前面に焼土と灰が散乱しており，掻き出されたものと考えられる。規模は，焚口から煙道部までの長さ90cm，袖部最大幅110cmである。火床部は，床面よりも4cmほど窪んでおり，燃焼部とともに赤変硬化している。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土ブロック微量
4　暗赤褐色　ローム粒子微量，焼土粒子少量
5　暗赤褐色　粘土粒子中量，焼土ブロック少量，ローム粒子微量
6　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子微量
7　黒　褐　色　粘土粒子・砂粒中量，ローム粒子・焼土粒子微量
8　暗赤褐色　焼土ブロック中量，粘土粒子・砂粒少量，ローム粒子微量
9　暗　褐　色　ローム粒子微量

ピット　4か所。主柱穴はP1～P3で，深さ20cmほどである。P4は深さ25cmで，南壁中央寄りに位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

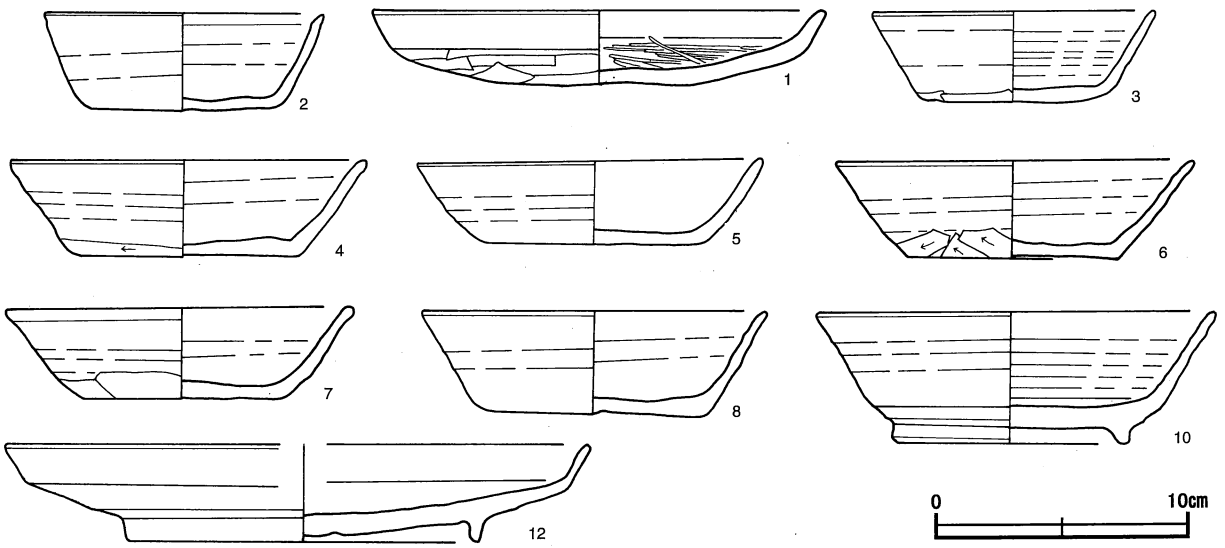
覆土　第5・6・7層が流れ込み自然堆積した後，竈構築材と見られる粘土や焼土を含む層が投げ込まれた状況を示している。

土層解説

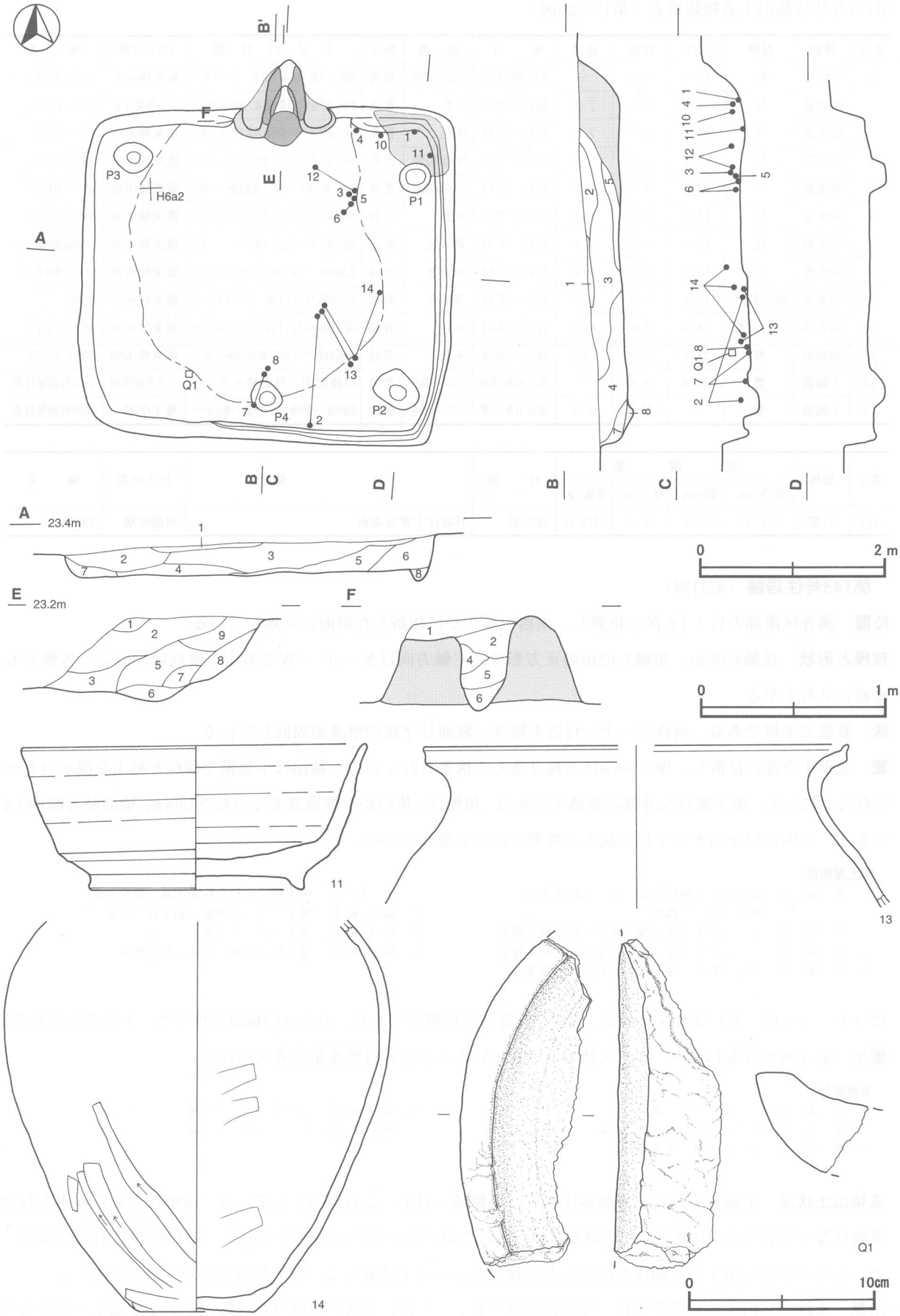
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
3　黒　褐　色　ロームブロック微量
4　極暗褐色　ロームブロック微量
5　褐　　色　ローム粒子中量
6　褐　　色　ローム粒子少量
7　暗　褐　色　ローム粒子多量
8　暗　褐　色　ローム粒子中量

遺物出土状況　土師器片52点，須恵器片81点，石製品（石皿）1点が出土している。これらの遺物の多くは，覆土下層（第5・6層）から出土している。1・3～6・10～12は竈東側の床面から正位で出土し，須恵器坏の3・5・6は6・5・3の順に重なった状態で出土している。また，2・13はP2西側の床面からまとまって出土した細片が接合したものである。

所見　撹乱により南西部の柱穴が検出できなかったが，4本柱の住居であったと考えられる。竈東側から出土した遺物をはじめ床面から出土した遺物は，住居が廃絶された際に遺棄されたものと推測される。本跡の時期は出土した遺物から，8世紀中葉と考えられる。



第19図　第141号住居跡出土遺物実測図



第20図　第141号住居跡・出土遺物実測図

第141号住居跡出土遺物観察表（第19・20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	盤	18.0	3.0	－	雲母・赤色粒子	にぶい橙色	普通	内面ヘラ磨き底部多方向へのヘラ削り	竈東側床面	60%外面煤付着 PL15
2	須恵器	坏	11.0	3.9	7.3	長石・雲母	灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部二方向のヘラ削り	P２西側床面	95% PL15
3	須恵器	坏	11.2	3.7	7.5	長石・雲母	灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部多方向のヘラ削り	竈東側床面	95% PL15
4	須恵器	坏	14.2	3.9	8.6	長石・雲母	明赤褐色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部二方向のヘラ削り	竈東側床面	95% PL15
5	須恵器	坏	13.6	3.5	8.4	長石・雲母	にぶい橙色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部回転ヘラ削り	竈東側床面	85% PL15
6	須恵器	坏	14.2	4.0	8.4	長石・雲母	灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部二方向のヘラ削り	竈東側床面	80% PL15
7	須恵器	坏	13.7	3.7	7.8	長石・雲母	黄灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部多方向のヘラ削り	竈南側床面	70%外面煤付着 PL15
8	須恵器	坏	13.6	4.2	8.8	長石・雲母	灰黄色	普通	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	竈南側床面	70%二次焼成痕 PL15
10	須恵器	高台付坏	15.8	5.3	9.2	長石・雲母	黄灰色	普通	高台貼り付け後 ロクロナデ	竈東側床面	80%
11	須恵器	高台付椀	18.6	7.8	11.3	長石・雲母	灰色	普通	高台貼り付け後 ロクロナデ	竈東側床面	90% PL15
12	須恵器	盤	[23.1]	3.9	13.9	長石・雲母	灰色	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	竈東側床面	80% PL15
13	土師器	甕	22.8	(8.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ	P２西側床面	10%外面煤付着
14	土師器	甕	－	(27.5)	8.0	長石・石英・小礫	にぶい赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ内面ヘラ削り後ナデ	覆土中層	20%外面煤付着

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q1	石皿	(17.7)	(7.0)	(5.5)	(478.0)	安山岩	外面は丁寧な面取	南部中層	PL20

第143号住居跡（第21図）

位置　調査区南部のＧ４ｆ８区に位置し，南西へ緩やかに傾斜した斜面に立地している。

規模と形状　長軸4.00m，短軸3.62mの正方形で，主軸方向はＮ－３°－Ｗである。壁高は50cmで，各壁とも垂直に立ち上がる。

床　軟質で平坦である。南西コーナー付近を除き，断面Ｕ字状の壁溝が周回している。

竈　北壁中央部に位置し，壁を50cmほど掘り込んで構築されている。袖部は小規模で砂粒と粘土を混ぜ合わせて作られている。第１層は天井部の崩落土である。規模は，焚口から煙道部までの長さ130cm，袖部最大幅100cmである。火床部は床面から平坦に続き，奥壁だけが赤変している。

竈土層解説

1　黒褐色　粘土粒子・砂粒中量，ローム粒子少量，焼土ブロック微量
2　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・粘土粒子微量
3　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・粘土粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
5　灰褐色　焼土粒子・粘土粒子中量，砂粒少量
6　暗赤褐色　焼土ブロック中量，粘土粒子少量
7　暗赤褐色　焼土ブロック少量
8　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子微量

ピット　１か所。Ｐ１は深さ23cmで，南壁中央寄りに位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

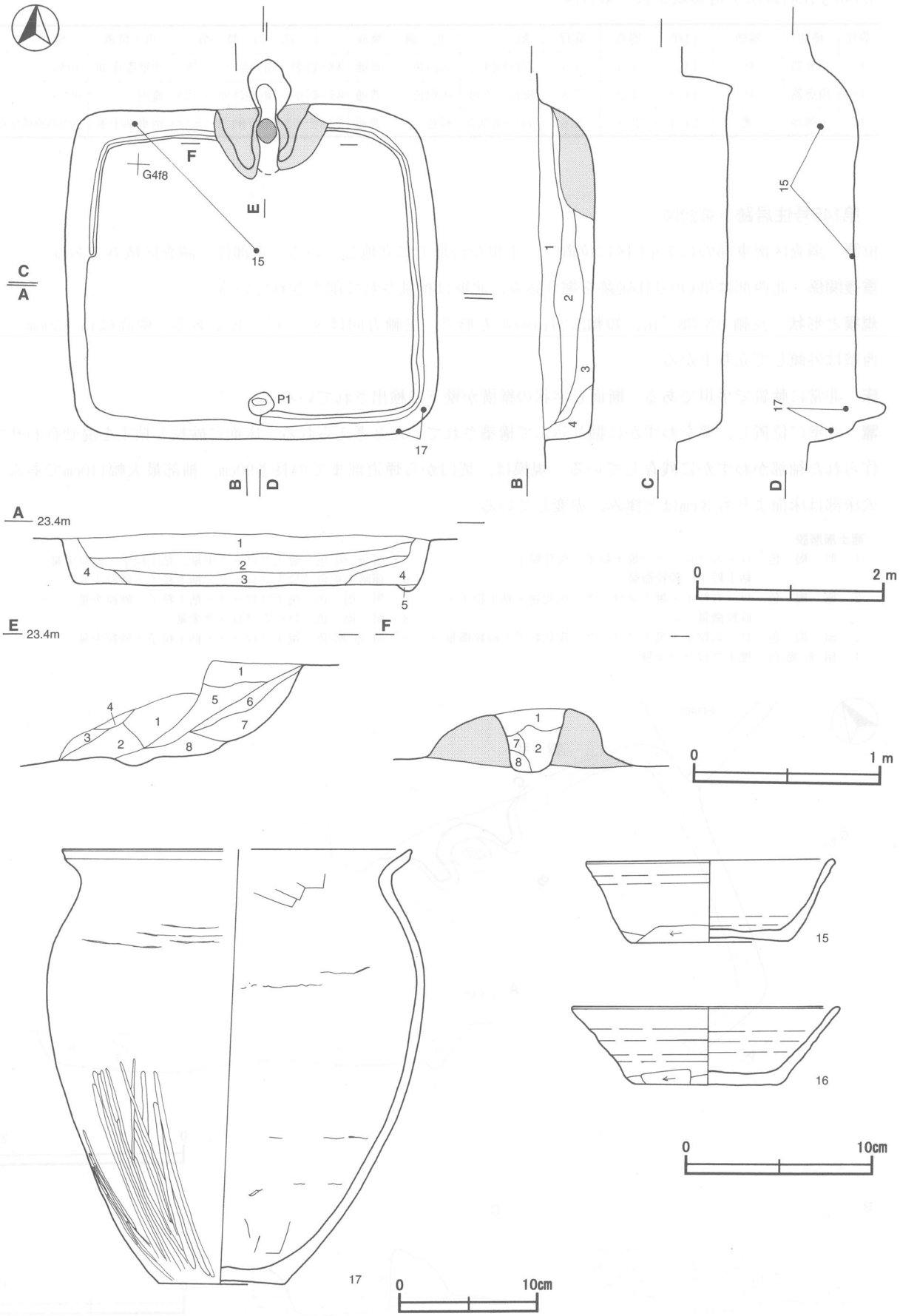
覆土　第４層から流れ込み，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒褐色　ロームブロック微量
2　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック微量
3　暗褐色　ロームブロック微量
4　暗赤褐色　ロームブロック中量
5　褐色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師器片71点，須恵器片36点，鉄製品（刀子）２点が出土している。南壁付近から検出された遺物は覆土中層から，中央部より北側から検出された遺物は下層から出土している。15は北壁際，17は南東コーナーからそれぞれ出土した細片を接合した遺物である。刀子は細片で，中央部の床面から出土している。

所見　本跡から出土した遺物数は，比較的少量である。17は，本跡が廃絶された際にそのまま遺棄されたものと推測される。本跡の時期は，出土した遺物から８世紀後葉と考えられる。



第21図　第143号住居跡・出土遺物実測図

第143号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
15	須恵器	坏	[13.3]	4.3	8.4	雲母・赤色粒子	灰白色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部一方向のヘラ削り	北壁際床面	40%
16	須恵器	坏	[14.2]	4.2	7.8	長石・雲母	灰白色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部多方向のヘラ削り	竈内	60%
17	土師器	甕	[24.4]	30.6	8.6	長石・石英・雲母	橙色	普通	体部下位ヘラ削り後ヘラ磨き上位ヘラナデ	南東部中層	50%外面煤付着

第145号住居跡（第22図）

位置　調査区南東部のＧ７ａ１区に位置し，平坦な台地上に立地している。東部は，調査区域外である。

重複関係　北西部は第140号住居跡を掘り込み，北壁は撹乱されて削平されている。

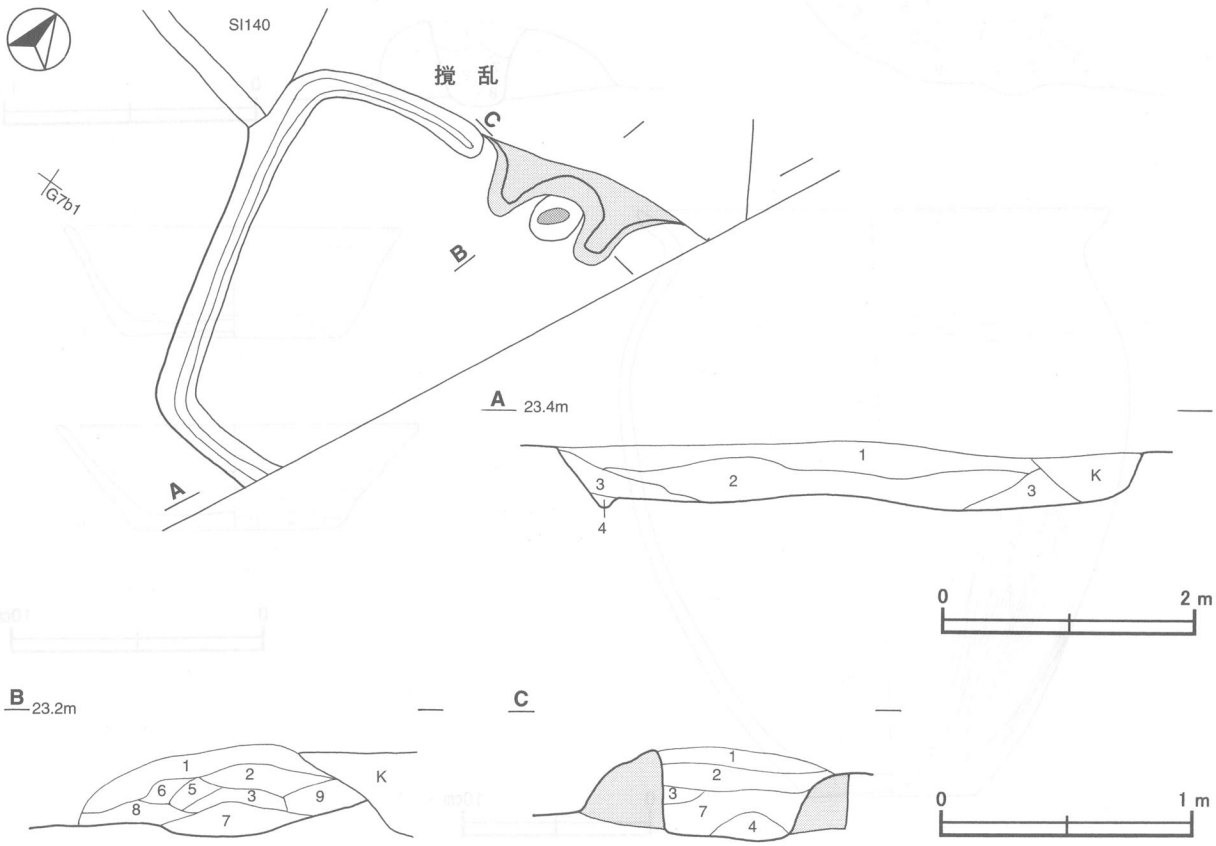
規模と形状　長軸（3.38）ｍ，短軸3.34ｍの正方形で，主軸方向はＮ－９°－Ｅである。壁高は45～50cmで，西壁は外傾して立ち上がる。

床　非常に軟質で平坦である。断面Ｕ字状の壁溝が壁下に検出されている。

竈　北壁に位置し，壁をわずかに掘り込んで構築されていたと考えられる。床面に砂粒と粘土を混ぜ合わせて作られた袖部がわずかに残存している。規模は，焚口から煙道部までの長さ90cm，袖部最大幅110cmである。火床部は床面よりも３cmほど窪み，赤変している。

竈土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
2　暗　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒微量
3　暗　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒微量
4　暗赤褐色　焼土ブロック少量
5　暗赤褐色　焼土ブロック中量，粘土粒子・砂粒少量
6　極暗赤褐色　焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
7　黒　褐　色　焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
8　暗　褐　色　ロームブロック少量
9　暗赤褐色　焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量



第22図　第145号住居跡実測図

覆土　第３層から流れ込み，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量

遺物出土状況　須恵器の細片５点が中央部の覆土下層から出土している。いずれも鉢の破片である。

所見　検出された壁溝は，竈東側にも周回するものと考えられる。本跡の時期は，須恵器鉢の口縁部の形状から８世紀後半と推測される。

第148号住居跡（第23・24図）

位置　調査区南部のＦ４ｇ9区に位置し，南西へ傾斜した台地上に立地している。

規模と形状　長軸4.70ｍ，短軸4.30ｍの正方形で，主軸方向はＮ－５°－Ｅである。壁高は18～25cmで，各壁とも緩やかに立ち上がる。

床　平坦で中央部に硬化した面が認められる。

竈　北壁中央部に位置し，壁を30cmほど掘り込み構築されている。袖部は小規模で砂粒と粘土を混ぜて作られている。規模は，焚口から煙道部までの長さ90cm，袖部最大幅120cmである。火床部は床面からわずかに窪み，全体が赤変している。

竈土層解説

1　暗　褐　色　焼土ブロック・粘土粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，粘土粒子微量
3　暗　褐　色　焼土ブロック中量，粘土粒子微量
4　灰褐色　粘土粒子中量，焼土ブロック少量
5　暗　褐　色　焼土ブロック少量

ピット　５か所。主柱穴はＰ１～Ｐ４で，深さは25～80cmほどである。Ｐ５は深さ23cmで，南壁中央寄りに位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

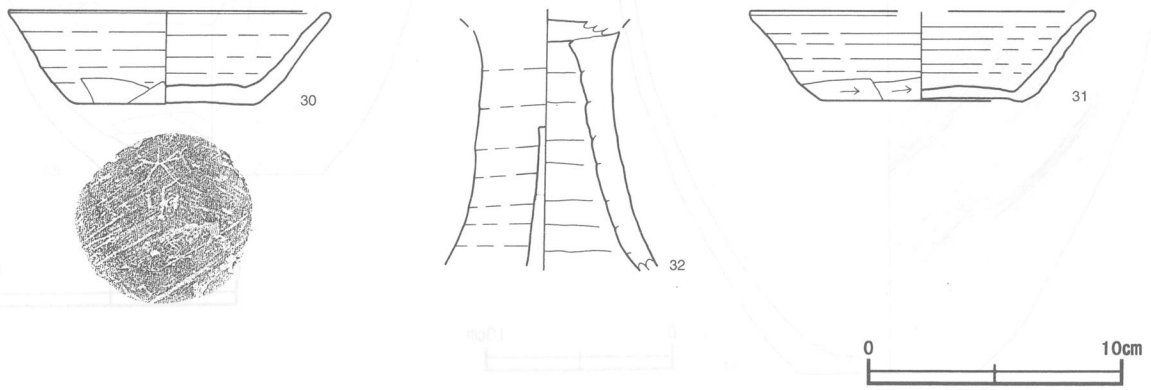
覆土　第４層から流れ込み，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

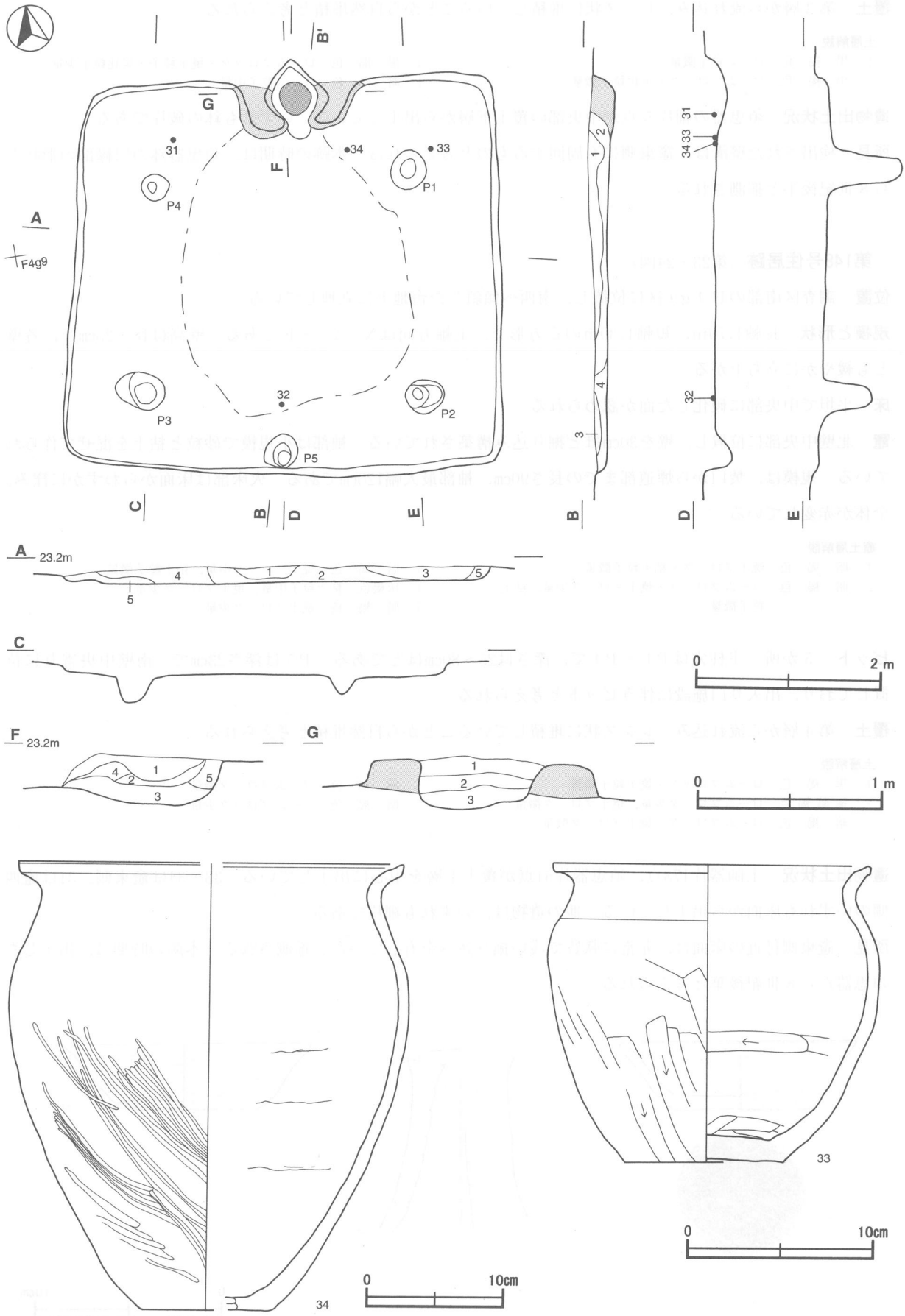
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
2　極暗褐色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック微量
4　暗　褐　色　ロームブロック微量
5　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片173点，須恵器片51点が覆土下層を中心に出土している。33・34は竈東側，31は竈西側のいずれも床面から出土している。他の遺物は，いずれも細片である。

所見　竈東側付近の床面は，非常に軟質で浅い掘り込みを有していたと推測される。本跡の時期は，出土した須恵器から８世紀後葉と考えられる。



第23図　第148号住居跡出土遺物実測図



第24図　第148号住居跡・出土遺物実測図

第148号住居跡出土遺物観察表（第23・24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
30	須恵器	坏	12.6	3.7	7.3	長石・雲母	褐灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部一方向のヘラ削り	覆土中層	70%底部刻書「大山」PL18
31	須恵器	坏	[13.6]	3.6	8.0	長石・雲母	褐灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部一方向のヘラ削り	竈西側床面	40%
32	須恵器	高盤	－	(10.0)	－	砂粒	灰白色	普通	脚部内外面ロクロナデ	南部床面	10%
33	土師器	小形甕	17.0	16.3	8.6	長石・石英・雲母	橙色	普通	体部外面ヘラ削り口縁部内・外面横ナデ	竈東側床面	70%外面煤付着 PL16
34	土師器	甕	[27.0]	31.6	[9.0]	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	体部下半ヘラ削り後ヘラ磨き内面ヘラ削り後ナデ	竈東側床面	40%外面煤付着

第149号住居跡（第25～27図）

位置　調査区北西部のＢ６ｊ３区に位置し，北西へ傾斜した台地上に立地している。

規模と形状　長軸4.74m，短軸4.32mの正方形で，主軸方向はＮ－19°－Ｅである。壁高は24～30cmで，各壁とも外傾して立ち上がる。

床　平坦で，中央部から東部に硬化面が広がっている。

竈　北壁中央部に位置し，壁を30cmほど掘り込んで構築されている。袖部は砂粒と粘土を混ぜ合わせて作られている。第３層は天井部の崩落土である。規模は，焚口から煙道部までの長さ100cm，袖部最大幅120cmである。火床部は３cmほどⅢ状に窪み，奥壁付近が著しく赤変している。

竈土層解説

1　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・砂粒微量
2　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗赤褐色　砂粒中量，ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
4　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量
5　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量
6　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量

ピット　４か所。主柱穴はＰ１～Ｐ４で，深さ45～60cmほどである。

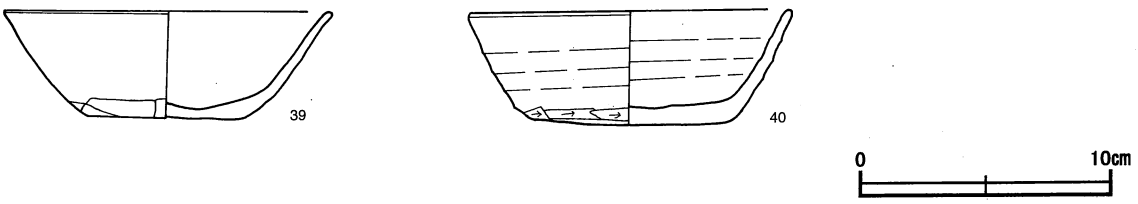
覆土　第２・５層から流れ込み，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

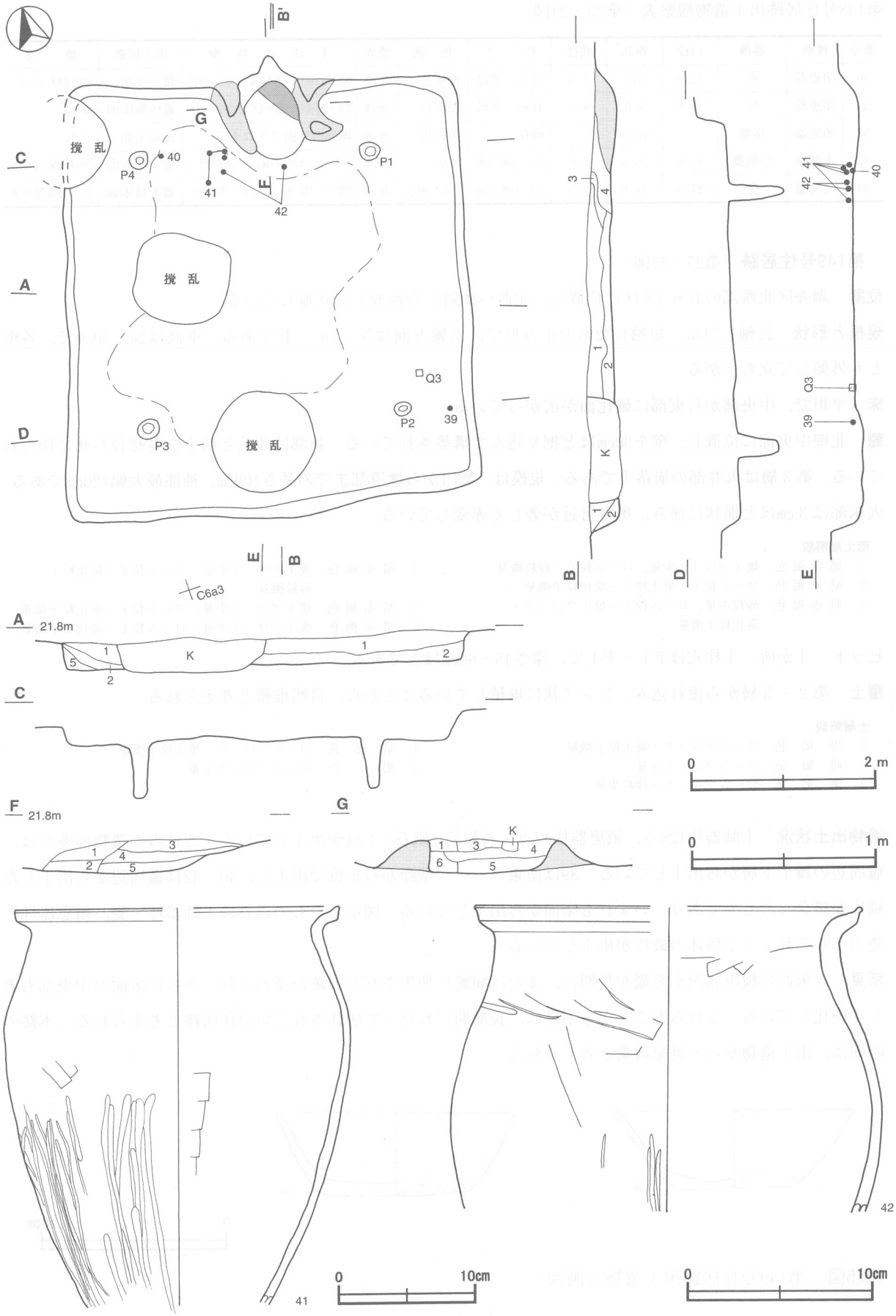
1　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック少量
3　暗褐色　ロームブロック・砂粒少量
4　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子微量
5　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片125点，須恵器片47点，石製品（砥石）１点が出土している。これらの遺物の多くは，竈周辺の覆土下層から出土している。39は南東コーナー壁際から正位で出土し，40～42は竈周辺から出土した細片が接合したものであり，いずれも床面から出土している。図示したもの以外に土師器坏・甕，須恵器坏・甕のそれぞれ１～２個体の破片が出土している。

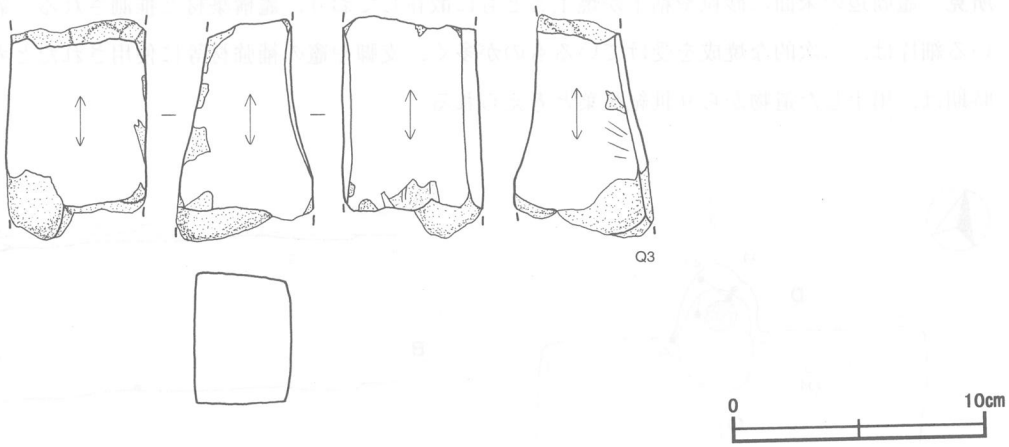
所見　火床面の検出状況から竈が長期に，または頻繁に使用された痕跡が認められ，さらに床面の中央部も著しく硬化している。これらのことから本跡は，長期間にわたって居住されていた住居跡と考えられる。本跡の時期は，出土遺物から９世紀前葉と考えられる。



第25図　第149号住居跡出土遺物実測図(1)



第26図　第149号住居跡・出土遺物実測図



第27図　第149号住居跡出土遺物実測図(2)

第149号住居跡出土遺物観察表（第25～27図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
39	須恵器	坏	13.0	4.3	6.3	長石･赤色粒子	明赤褐色	普通	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	南東コーナー床面	90%二次焼成痕 PL17
40	須恵器	坏	12.8	4.6	8.0	長石・雲母	灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部一方向のヘラ削り	竈西側床面	70% PL17
41	土師器	甕	[23.4]	(28.9)	－	長石・雲母	にぶい褐色	普通	体部外面下半ヘラ削り後ヘラ磨き	竈西側床面	30%外面煤付着
42	土師器	甕	[20.8]	(16.5)	－	長石・雲母	橙色	普通	体部上位ヘラナデ下位ヘラ磨き	竈西側床面	20%

番号	器種	計測値				材　質	特　　徴	出土位置	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q3	砥石	(8.8)	5.6	5.3	(324.0)	砂岩	断面は方柱状で四面使用一部に金属器による擦痕あり	東壁際床面	PL20

第150号住居跡（第28図）

位置　調査区北西部のＢ６h6区に位置し，平坦な台地上に立地している。

規模と形状　耕作により，ほとんど削平されている。残存する壁や覆土，床面の範囲などから長軸［3.20m］，短軸3.00mのほどの正方形と推測される。主軸方向はＮ－12°－Ｅで，壁高は10cmである。

床　中央部を中心に，硬化したロームブロックが散在している。

竈　北壁中央部に位置し，壁を50cmほど掘り込んで構築されている。袖部，天井部ともに確認できない。規模は，焚口から煙道部までの長さ110cmである。火床部は，床面よりも皿状に５cmほど窪んでおり，焼土やロームが赤変した部分は見られない。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック少量
2　暗　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，砂粒微量
3　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
4　暗赤褐色　焼土粒子多量

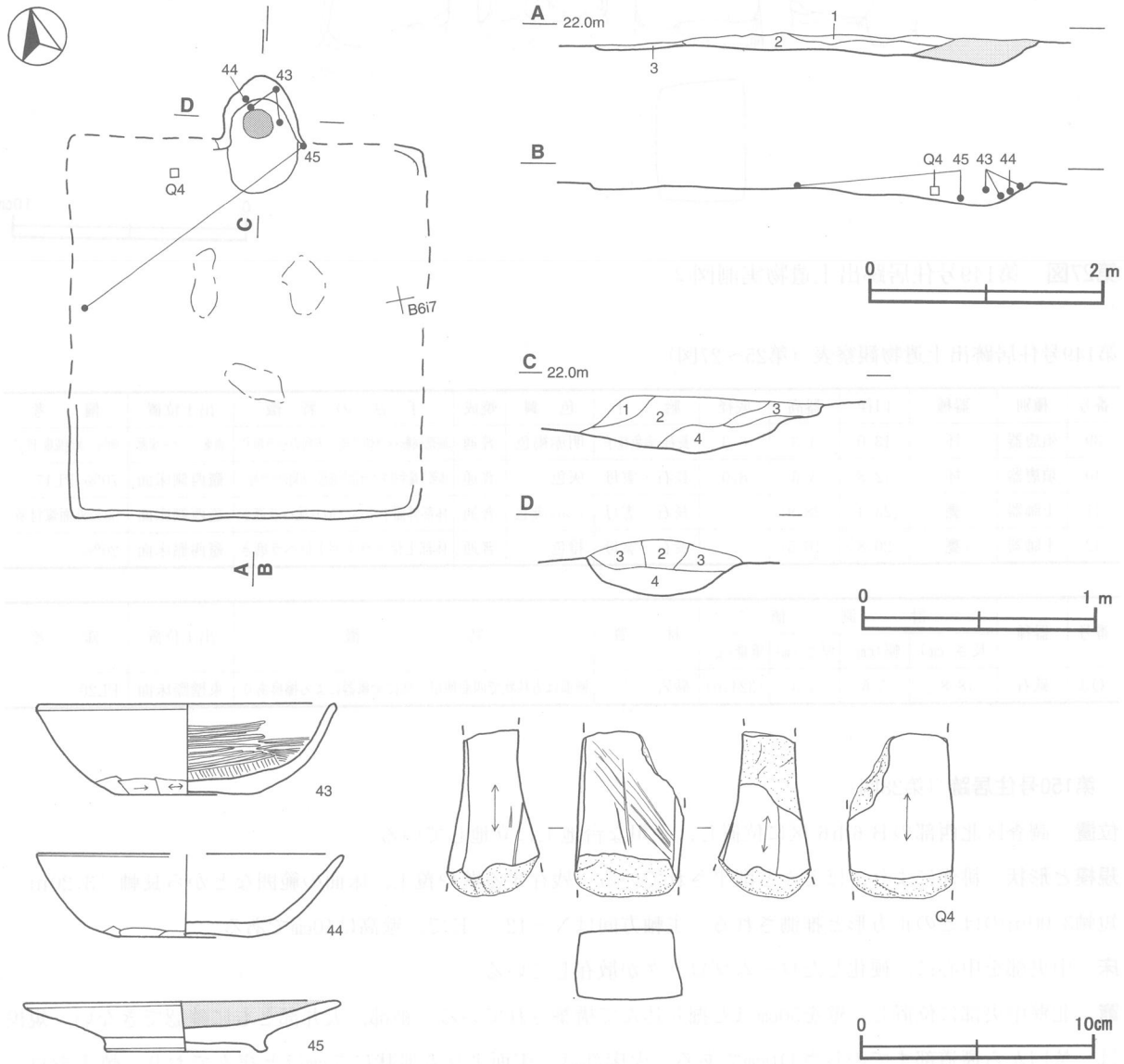
覆土　最下層のみ確認できたが，堆積状況は不明である。

土層解説

1　暗　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片103点，須恵器片73点，石製品（砥石）１点が出土している。これらの遺物の多くは，竈周辺および竈内部から出土している。いずれも耕作時によって破損した細片のみである。43～45は竈内部から出土した遺物を接合したものであり，45の一部は西壁際からも出土している。竈内部からは，図示したもの以外に土師器や須恵器の細片が出土している。

所見　竈周辺の床面に砂粒や粘土が焼土とともに散在しており，竈構築材と推測される。竈内部から出土している細片は，二次的な焼成を受けているものが多く，支脚や竈の補強材等に使用されたと考えられる。本跡の時期は，出土した遺物から９世紀後葉と考えられる。



第28図　第150号住居跡・出土遺物実測図

第150号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
43	土師器	坏	12.8	3.9	6.0	長石・石英	橙色	普通	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	竈内	70%二次焼成痕 PL17
44	土師器	坏	[13.0]	3.6	6.0	雲母・砂粒	橙色	普通	底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り	竈内	50%二次焼成痕
45	土師器	高台付皿	13.5	2.2	6.8	雲母・砂粒	橙色	普通	内外面ロクロナデ	竈内	80%内面黒色処理 PL17

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q4	砥石	(7.1)	4.6	4.0	(150.9)	砂岩	断面は方柱状で四面使用一部に金属器による擦痕あり	竈西側床面	PL20

第151号住居跡（第29～31図）

位置　調査区北西部のＣ６ｂ2区に位置し，西へ傾斜した台地上に立地している。

規模と形状　長軸3.97ｍ，短軸3.87ｍの正方形で，主軸方向はＮ－５°－Ｅである。壁高は40cmで，各壁とも外傾して立ち上がる。

床　軟質で平坦な貼床であり，掘り方は四隅が深くなっている。断面Ｕ字状の壁溝が周回している。

竈　北壁中央部に位置し，壁を80cmほど掘り込んで構築されている。掘り込み部に砂粒と粘土を混ぜ合わせた竈構築材が貼り付けてある。袖部と天井部は確認できない。火床部は，皿状に窪み赤変硬化している。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・砂粒少量
2　暗　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・砂粒少量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量，焼土ブロック微量

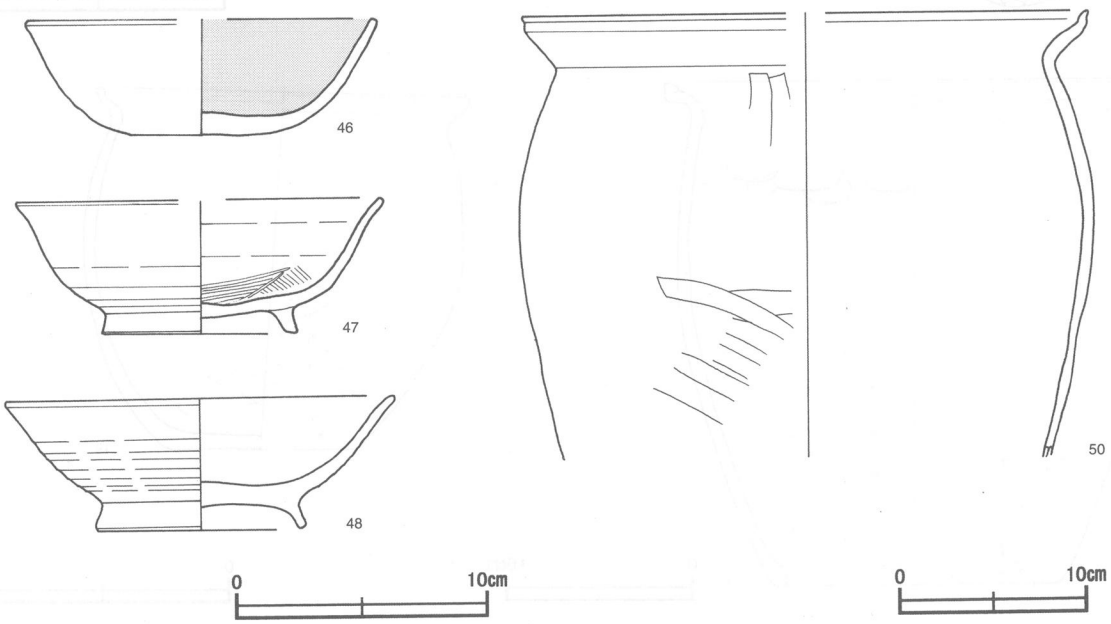
覆土　５層は投棄されたもので，その後２層，４層と順に堆積していったと思われる。

土層解説

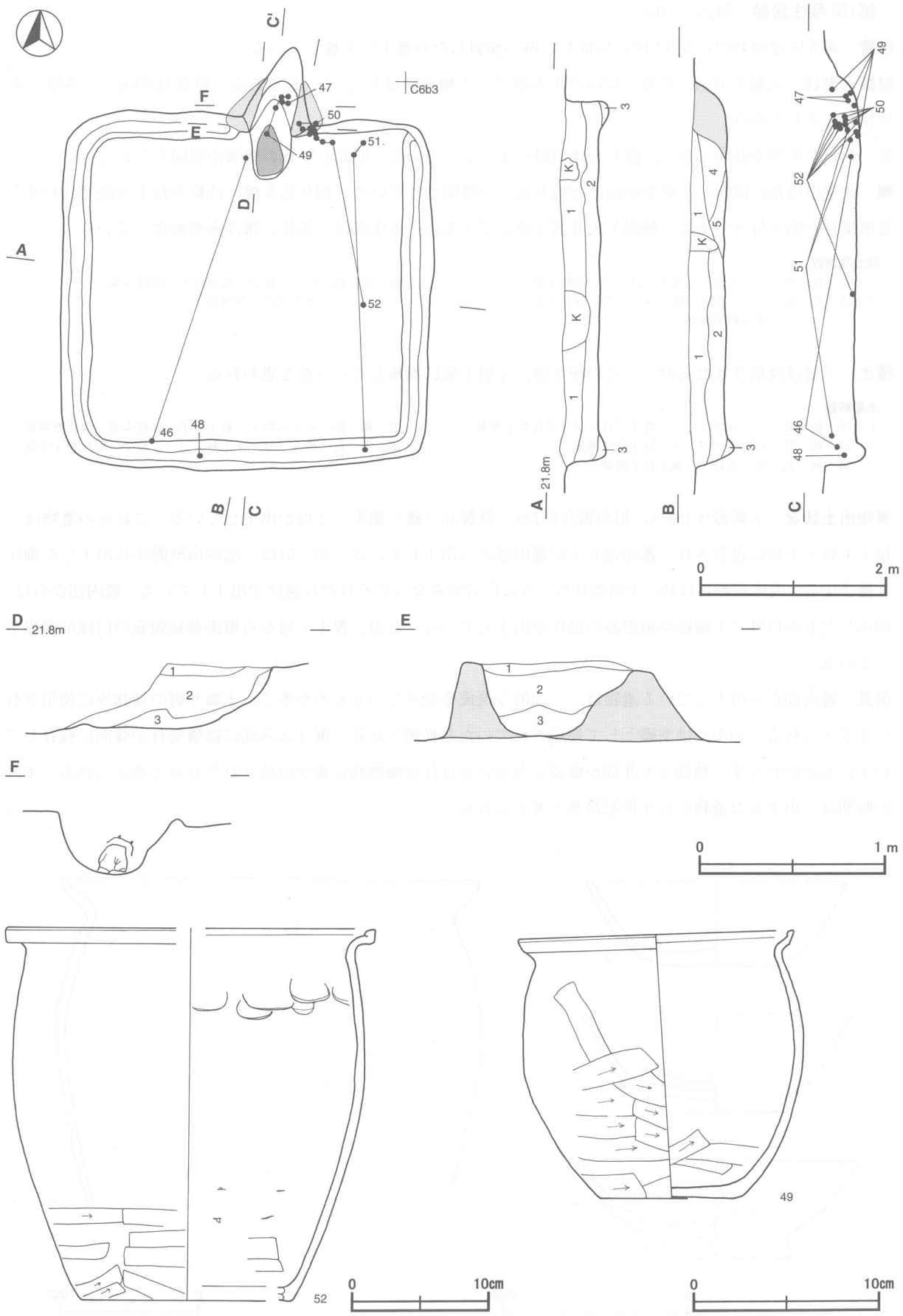
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量，炭化物微量
5　暗　褐　色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片439点，須恵器片257点，鉄製品（鎌・鋤先）２点が出土している。これらの遺物は，覆土上層～下層に包含され，竈周辺および竈内部から出土している。46・51は一部が南壁際から出土した細片と接合する。火床部からは49，土師器坏片，さらに47が重なってそれぞれ逆位で出土している。竈内部からは，図示したもの以外に土師器や須恵器の細片が出土している。なお，覆土上層から須恵器短頸壺の口縁部が出土している。

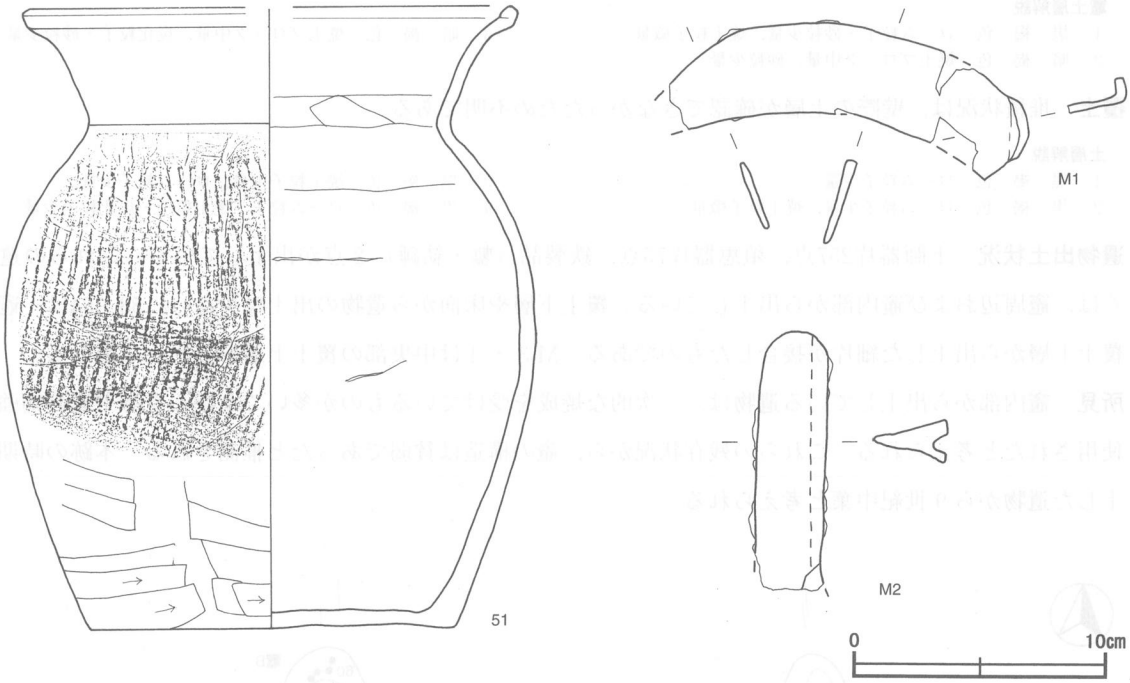
所見　竈内部から出土している遺物は，二次的な焼成を受けているものが多く，支脚や竈の補強等に使用されたと考えられる。49や47は支脚として使用されていたと推測される。掘り込み部に竈構築材が強固に残存しているにもかかわらず，袖部と天井部が確認できないのは住居廃絶時に竈が破壊されたためと考えられる。本跡の時期は，出土した遺物から９世紀後葉と考えられる。



第29図　第151号住居跡出土遺物実測図(1)



第30図　第151号住居跡・出土遺物実測図



第31図　第151号住居跡出土遺物実測図(2)

第151号住居跡出土遺物観察表（第29～31図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
46	土師器	坏	[13.9]	4.6	5.4	長石･赤色粒子	にぶい黄橙	普通	器面荒れ調整不明	竈西側下層	70%内面黒色処理
47	土師器	高台付椀	[14.5]	5.4	7.7	長石・雲母	橙色	普通	高台貼り付け後 ロクロナデ	竈内	60%
48	須恵器	高台付坏	15.4	5.2	8.2	長石・雲母	にぶい黄橙色	普通	高台貼り付け後 ロクロナデ	南壁際中層	60%
49	土師器	小形甕	14.7	14.5	7.8	長石･石英･小礫	橙色	普通	体部外面下位ヘラ削り内面ヘラ削り後ナデ	竈内	30%二次焼成痕 PL17
50	土師器	甕	[30.0]	(23.7)	－	長石・雲母	明赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り内面ヘラ削り後ナデ	竈東側中層	90%
51	須恵器	甕	[19.0]	25.4	14.4	長石･石英･小礫	灰黄色	普通	体部外面上位擬格子目叩き下位ヘラ削り	竈東側中層	50%二次焼成痕 PL17
52	須恵器	甑	[26.4]	26.9	15.0	長石･石英･小礫	にぶい黄橙色	普通	体部外面縦位の並行叩き下半ヘラ削り5孔式	竈東側中層	50%外面煤付着

番号	器種	計　測　値				材　質	特　徴	出土位置	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
M1	鎌	(14.4)	3.5	0.4	(49.3)	鉄	曲刃先端部は欠損柄付き部一部折り返し	覆土中層	80%
M2	鋤先	(10.3)	2.8	1.7	(44.4)	鉄	先端部は欠損内側にV字状の溝を有する	覆土中層	30% PL20

第152号住居跡（第32・33図）

位置　調査区北部のＣ６ｂ9区に位置し，平坦な台地上に立地している。第153号住居跡と東壁で接している。

規模と形状　長軸3.25m，短軸3.17mの正方形で，主軸方向はＮ－７°－Ｅである。壁高は30cmで，各壁とも垂直に立ち上がる。

床　硬化面は確認できず，軟質で平坦な面が広がっている。竈周辺の床面に，砂粒や粘土が焼土とともに散在している。

竈　北壁中央部に位置し，壁を70cmほど掘り込んで構築されている。袖部は砂粒と粘土を混ぜ合わせて作られ，天井部と東袖部は認められない。焚口から煙道部までの長さは，100cmである。火床部は，床面よりも５cmほど皿状に掘り込まれている。焚口は壁際に位置し，奥壁に位置する部分が赤変している。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・砂粒少量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　焼土ブロック中量，砂粒少量
3　暗　褐　色　焼土ブロック中量，炭化粒子・砂粒少量

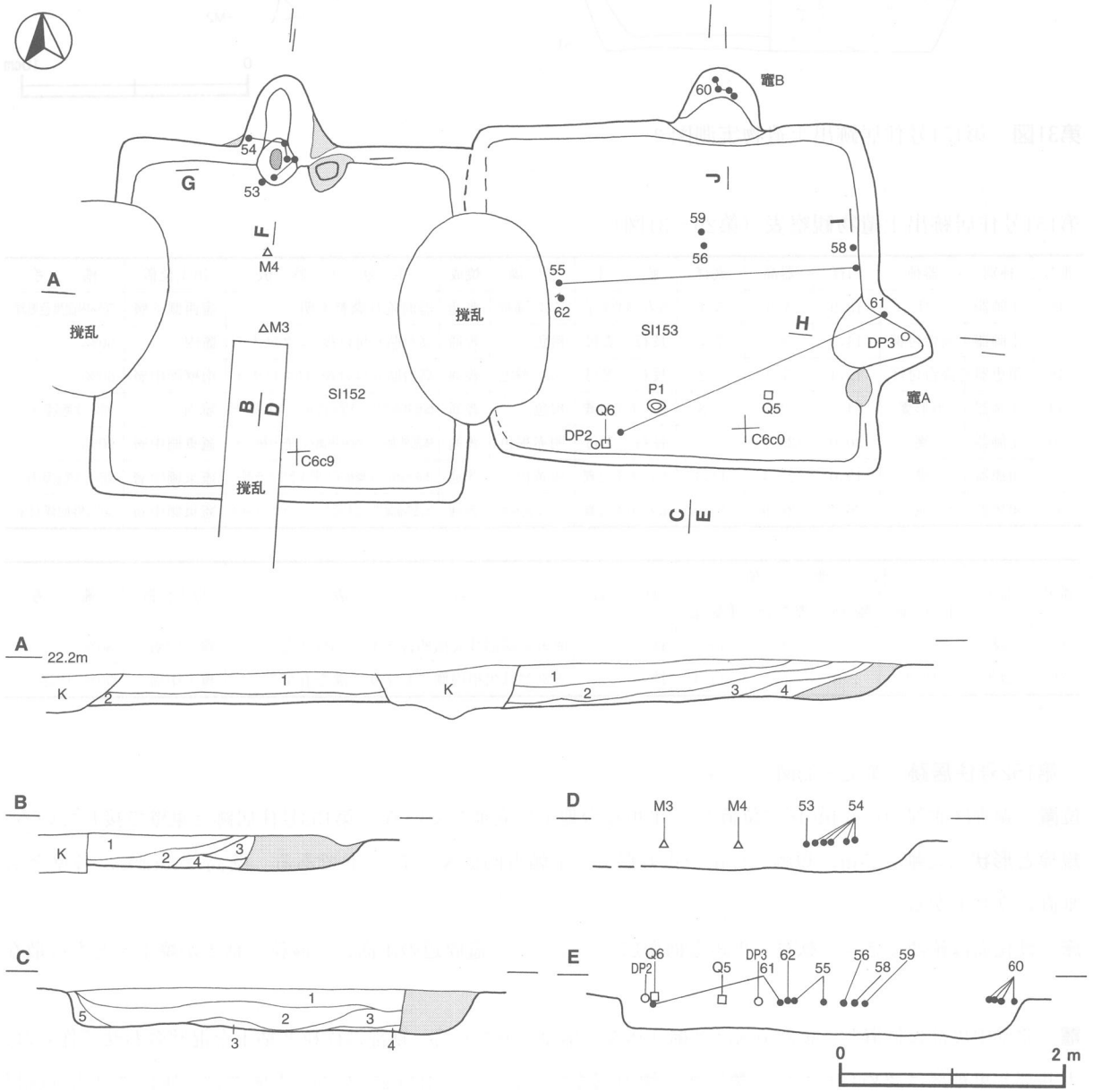
覆土　堆積状況は，壁際の土層が確認できなかったため不明である。

土層解説

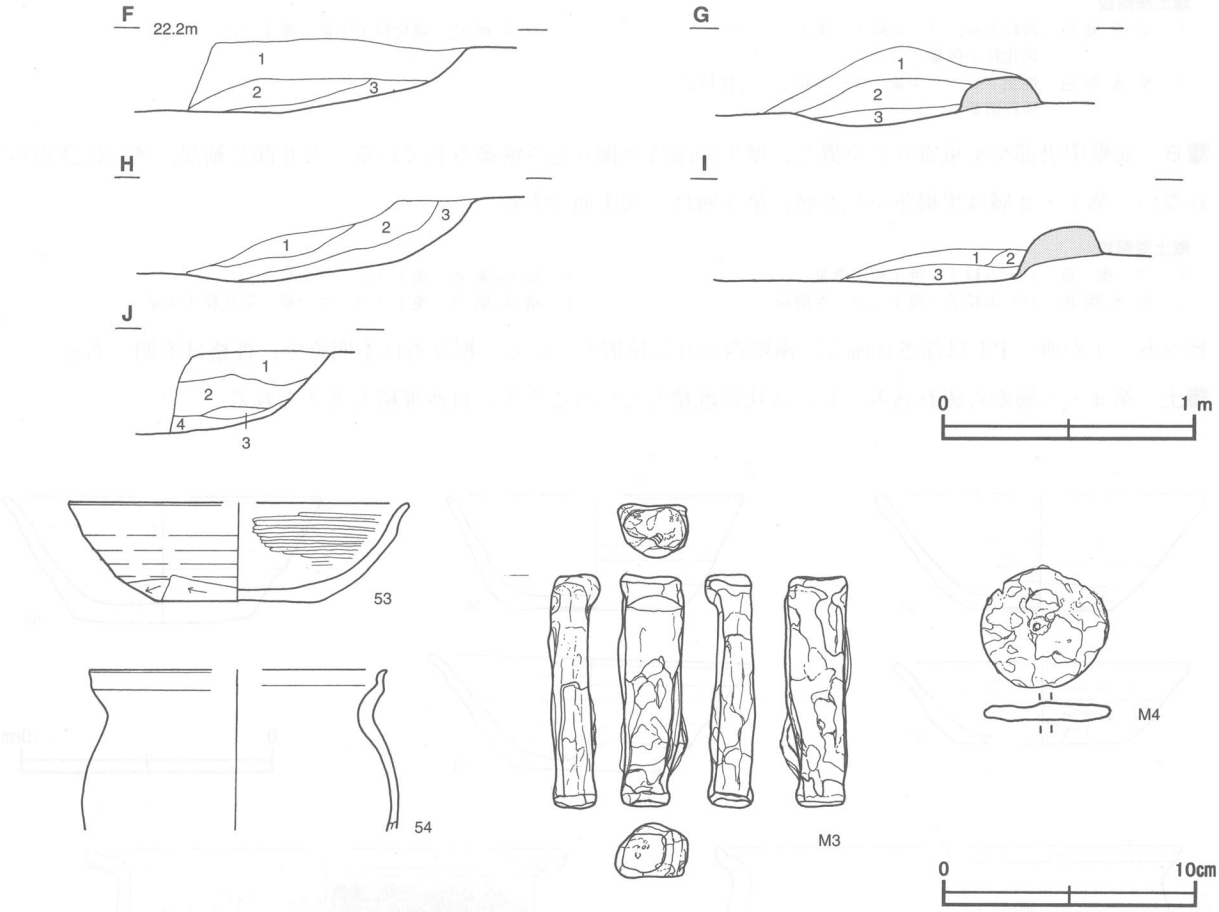
1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　黒　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子少量
4　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片257点，須恵器片75点，鉄製品（鏨・紡錘）2点が出土している。これらの遺物の多くは，竈周辺および竈内部から出土している。覆土下層や床面から遺物の出土は少ない。53・54は，竈内部の覆土上層から出土した細片が接合したものである。M3・4は中央部の覆土上層から出土している。

所見　竈内部から出土している遺物は，二次的な焼成を受けているものが多いことから支脚や竈の補強材等に使用されたと考えられる。これらの残存状況から，竈の構造は貧弱であったと推測される。本跡の時期は，出土した遺物から9世紀中葉と考えられる。



第32図　第152・153号住居跡実測図



第33図　第152・153号住居跡，第152号住居跡出土遺物実測図

第152号住居跡出土遺物観察表（第33図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
53	土師器	坏	[13.4]	3.9	[6.6]	長石・雲母	にぶい黄色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部一方向のヘラ削り	竈内	30%
54	土師器	小形甕	[11.8]	(6.3)	－	長石・赤色粒子	明赤褐色	普通	器面荒れ調整不明	竈内	30%

番号	器種	計　測　値				材　質	特　　徴	出土位置	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
M3	鏨	9.2	2.8	2.1	131.0	鉄	上下に打面を有する 断面形は方柱状	中央部中層	80% PL20
M4	紡錘	－	5.0	0.8	(19.2)	鉄	軸部は欠損 形状は円盤状	中央部中層	50%

第153号住居跡（第32～35図）

位置　調査区南部のＣ６ｂ9区に位置し，平坦な台地上に立地している。第152号住居跡と西壁で接している。

規模と形状　長軸3.48m，短軸3.02mの長方形で，主軸方向はＮ－85°－Ｗである。壁高は30～40cmで，各壁とも外傾して立ち上がる。

床　硬化面は確認できず，平坦で軟質な面が広がっている。

竈Ａ　東壁の南東コーナー寄りに位置し，壁を40cmほど掘り込んで構築されている。南袖部は砂粒と粘土を混ぜ合わせて作られている。天井部と北袖部は認められない。規模は，焚口から煙道部までの長さ90cmである。火床部は平坦で，軟質な灰状の面が広がっている。

竈土層解説

1　暗赤褐色　砂粒少量，ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
2　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量
3　暗赤褐色　炭化粒子中量，焼土ブロック微量

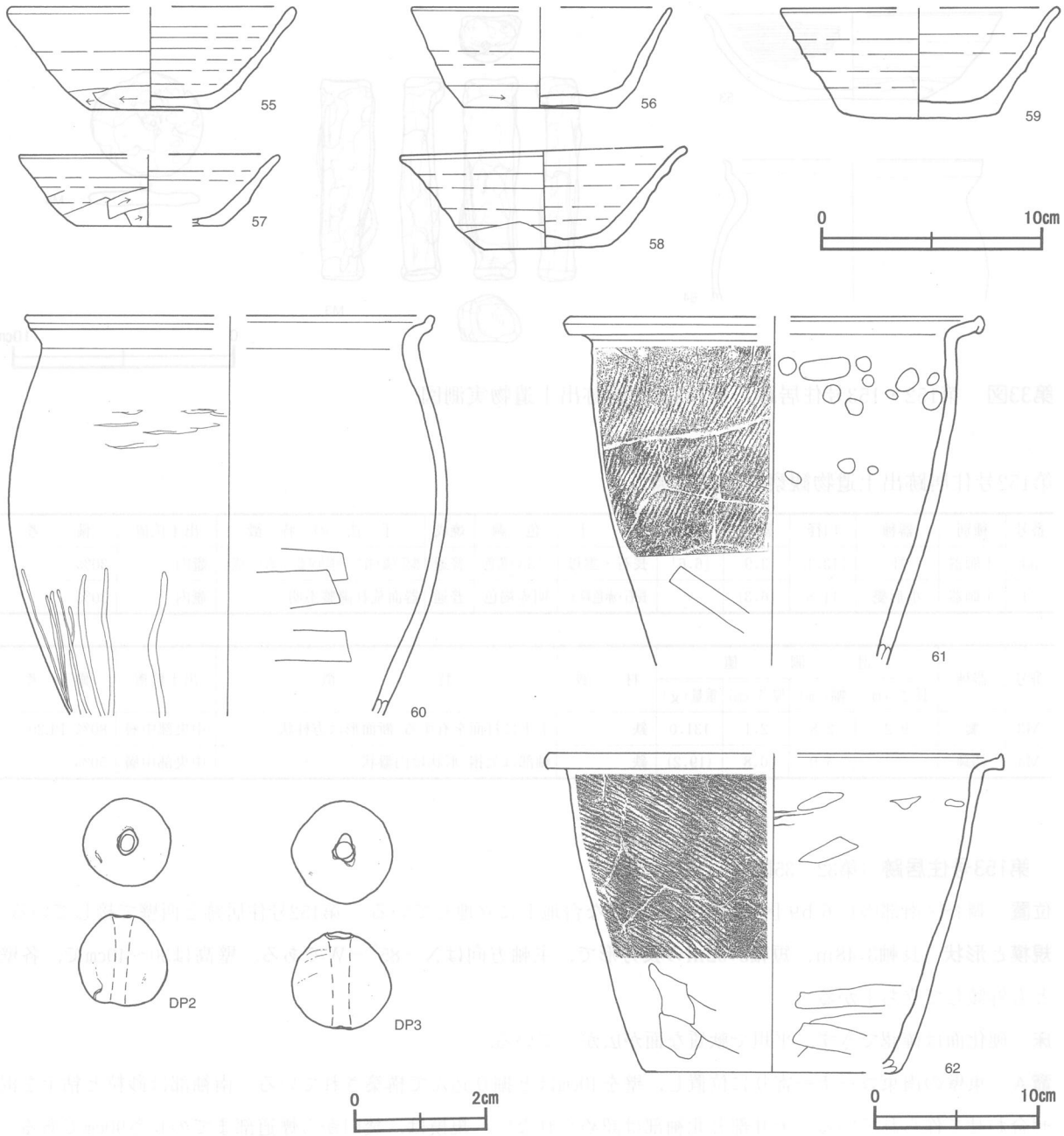
竈B　北壁中央部やや東寄りに位置し，壁を50cmほど掘り込み構築されている。天井部と袖部，焚口は認められない。第1・2層は黒褐色をした層，第4層は，火床面である。

竈土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　暗赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック微量
3　暗赤褐色　焼土ブロック中量
4　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化粒子少量

ピット　1か所。P1は深さ10cmで，南壁西寄りに位置している。掘り方は不明瞭で，性格は不明である。

覆土　第4・5層から流れ込み，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

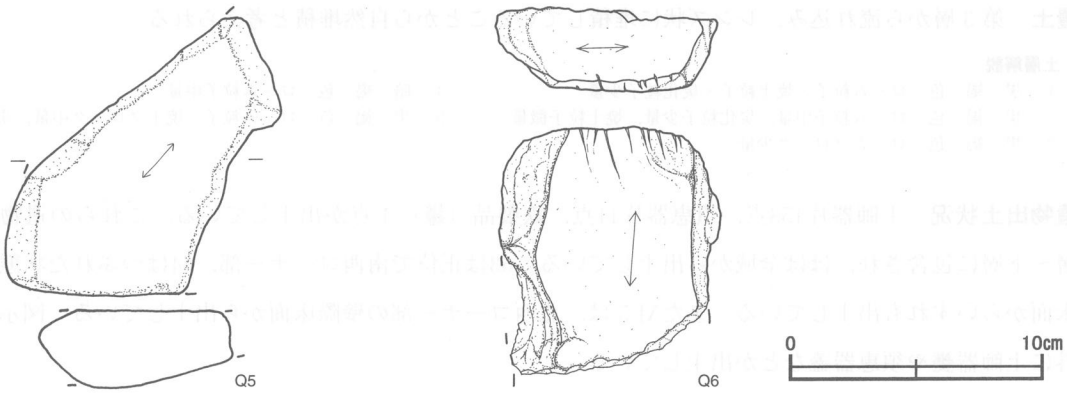


第34図　第153号住居跡出土遺物実測図(1)

土層解説
1　黒　褐　色　焼土粒子中量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
4　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量，砂粒少量
5　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片300点，須恵器片128点，土製品（土玉）2点，石製品（砥石）2点が出土している。これらの遺物の多くは，覆土上層および竈内部から出土している。覆土下層や床面から遺物の出土は少ない。55・56・59・62は中央部，60は竈B，61は竈Aのいずれも覆土上層から出土した細片を接合したものである。61・55は，西壁際や南壁際から出土した細片と接合する。また，覆土中層から土師器坏・甕，須恵器鉢・蓋・高坏脚部などの破片が出土している。

所見　竈Bの袖部と焚口は確認できない。したがって，二つの竈の同時使用は考えにくく，竈Bから竈Aへという使用順が考えられる。また，竈内部から出土している遺物は，二次的な焼成を受けているものが多いことから支脚や竈の補強等に使用されたと考えられる。離れた位置関係にある遺物が互いに接合したことは，耕作等の人為的な行為によってなされたものである。本跡の時期は，出土した遺物から9世紀後葉と考えられる。



第35図　第153号住居跡出土遺物実測図(2)

第153号住居跡出土遺物観察表（第34・35図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
55	須恵器	坏	[13.0]	4.7	5.4	長石・雲母	灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部一方向のヘラ削り	中央部上層	50% PL17
56	須恵器	坏	[11.7]	4.6	7.0	長石・雲母	黄灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部回転ヘラ削り	中央部上層	40%
57	須恵器	坏	[11.8]	3.2	6.4	長石・雲母	灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土上層	40% PL17
58	須恵器	坏	13.0	4.4	5.6	長石・雲母	黄灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部一方向のヘラ削り	竈A北側上層	80%二次焼成痕 PL17
59	須恵器	坏	[12.6]	5.0	7.0	長石・雲母	灰白色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部回転ヘラ削り	中央部上層	30%
60	土師器	甕	[24.6]	(24.2)	－	長石・石英・小礫	橙色	普通	体部外面上位ヘラナデ下半ヘラ削り後ヘラ磨き	竈B内	30%
61	須恵器	甕	[24.8]	(21.3)	－	長石・赤色粒子	明赤褐色	普通	体部外面上位斜位の並行叩き下位ヘラ削り	竈A内	10%二次焼成痕
62	須恵器	鉢	[27.2]	20.0	[15.2]	長石・雲母	灰黄褐色	普通	体部外面上位斜位の並行叩き下位ヘラ削り	中央部上層	30%

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長径	厚さ	孔径	重量				
DP2	土玉	2.1	1.9	0.5	6.7	土製	断面は棗状 穿孔は楕円形	南壁際上層	PL20
DP3	土玉	2.1	2.3	0.6	8.5	土製	断面は棗状 穿孔は楕円形	竈内上層	PL20

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q5	砥石	(11.0)	10.9	3.1	(393.0)	砂岩	断面は方柱状 一面使用	竈西側上層	PL20
Q6	砥石	(9.75)	(8.9)	(3.2)	(403.0)	雲母片岩	断面は台形状 二面使用	南壁際上層	PL20

第154号住居跡（第36・37図）

位置　調査区北部のＣ６ａ０区に位置し，平坦な台地上に立地している。

規模と形状　長軸2.87m，短軸2.72mの正方形で，主軸方向はＮ－８°－Ｗである。壁高は26～30cmで，各壁とも垂直に立ち上がる。

床　中央部から南壁にかけて，高まりを持つ硬化面が広がっている。北壁付近は軟質である。

竈　東壁中央部からやや南寄りに位置し，壁を20cmほど掘り込んで構築されている。袖部は砂粒と粘土を混ぜ合わせて作られており，残存状態は良好である。第１層は，天井部の崩落土と考えられる。規模は，焚口から煙道部までの長さ100cm，袖部最大幅120cmである。火床部は平坦で，著しく赤変硬化している。

竈土層解説

1　にぶい黄褐色　粘土粒子・砂粒多量，ローム粒子・焼土粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
3　暗赤褐色　焼土ブロック多量，粘土粒子少量
4　暗　褐　色　焼土粒子・粘土粒子多量
5　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，粘土粒子微量
6　暗赤褐色　焼土ブロック・粘土粒子少量
7　暗　褐　色　焼土粒子中量，炭化粒子・粘土粒子少量
8　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，粘土粒子微量
9　黒　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量

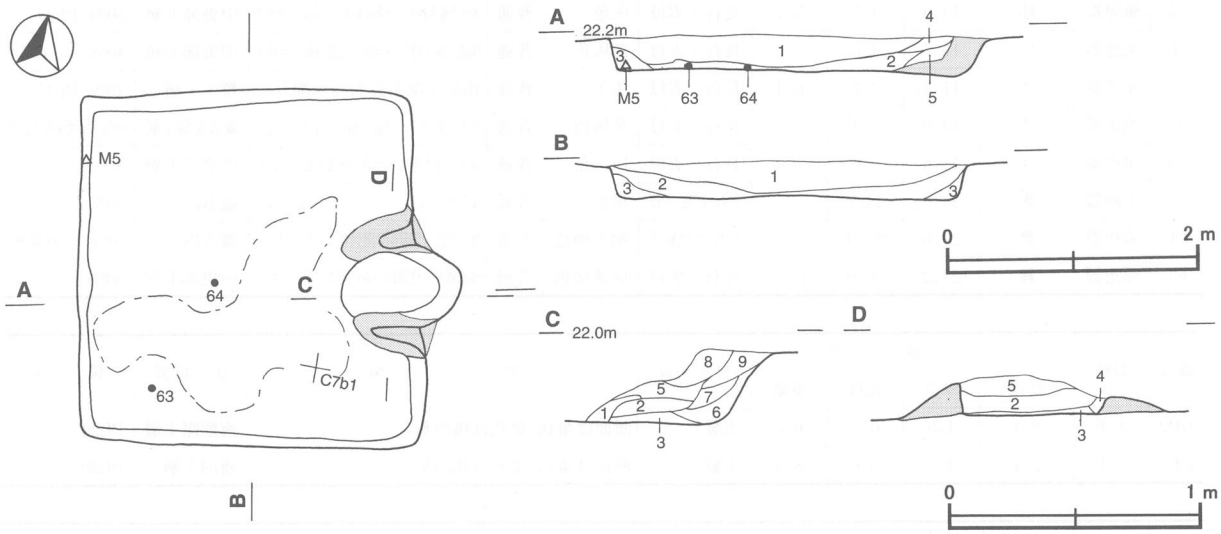
覆土　第３層から流れ込み，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

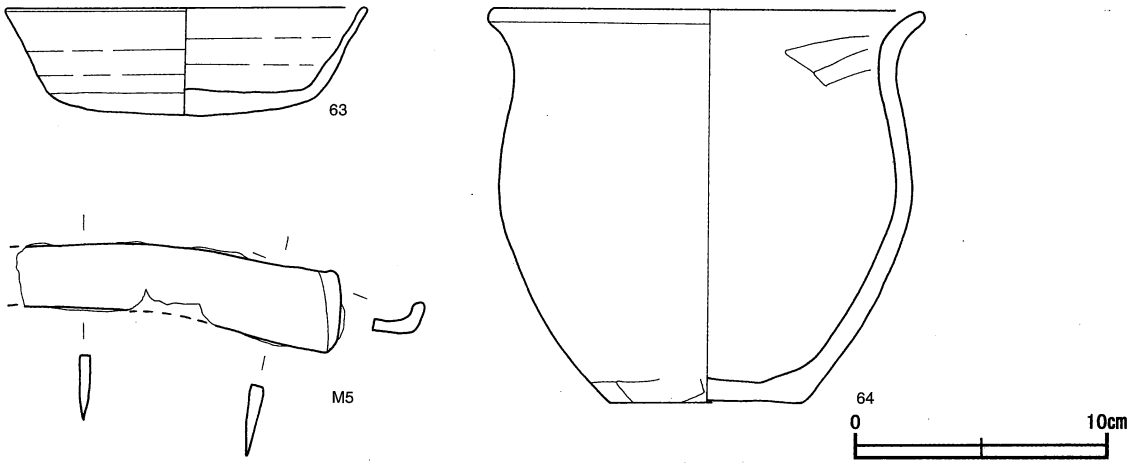
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量
5　黒　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック中量，炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片153点，須恵器片11点，鉄製品（鎌）１点が出土している。これらの遺物は，覆土上層～下層に包含され，ほぼ全域から出土している。63は正位で南西コーナー部，64はつぶれた状態で中央部の床面からいずれも出土している。またＭ５は，北西コーナー部の壁際床面から出土している。図示したもの以外に土師器甕や須恵器蓋などが出土している。

所見　本跡は，住居としては非常に小規模で，竈の構造も貧弱である。しかし，火床面の検出状況からは竈が長期に使用された痕跡が認められ，床面も著しく硬化している。これらのことから本跡は，長期間にわたって居住されていた住居と考えられる。本跡の時期は，出土した遺物から８世紀前葉と考えられる。



第36図　第154号住居跡実測図



第37図　第154号住居跡出土遺物実測図

第154号住居跡出土遺物観察表（第37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
63	須恵器	坏	14.2	4.3	7.7	長石・雲母	灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部多方向のヘラ削り	南西部床面	75% PL18
64	土師器	小形甕	17.1	15.6	7.7	長石・石英・小礫	にぶい黄橙	普通	器面荒れ 体部下端ヘラ削り	中央部床面	60%外面煤付着

番号	器種	計　測　値				材　質	特　　徴	出土位置	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
M5	鎌	(13.2)	3.3	0.5	(61.7)	鉄	曲刃 先端部は欠損 柄付き部折り返し	北西壁際床面	PL20

第155号住居跡（第38・39図）

位置　調査区北部のＣ６ｃ0区に位置し，平坦な台地上に立地している。

重複関係　第156号住居跡の上に構築され，南東コーナーは第663号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.50m，短軸3.39mの正方形で，主軸方向はＮ－２°－Ｅである。壁高は28～32cmで，西壁・南壁は外傾して立ち上がる。

床　平坦で，中央部に硬化面が広がっている。東側は第156号住居跡の上に貼床をして構築されている。西壁から南壁にかけて断面Ｕ字状の壁溝が巡っている。

竈Ａ　北壁の北東コーナー寄りに位置し，壁を50cmほど掘り込んで構築されている。東袖部は砂粒と粘土を混ぜ合わせて作られているが，天井部は認められない。規模は，焚口から煙道部までの長さ100cmである。火床部は平坦で，壁際に赤変硬化した面が広がっている。

竈土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
3　暗 赤 褐 色　焼土ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子微量

竈Ｂ　北壁中央部に位置し，壁を40cmほど掘り込んで構築されている。天井部と袖部，焚口は認められない。第１層は暗褐色の締まりのある土層で，第２層は火床面である。

竈土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ローム粒子微量

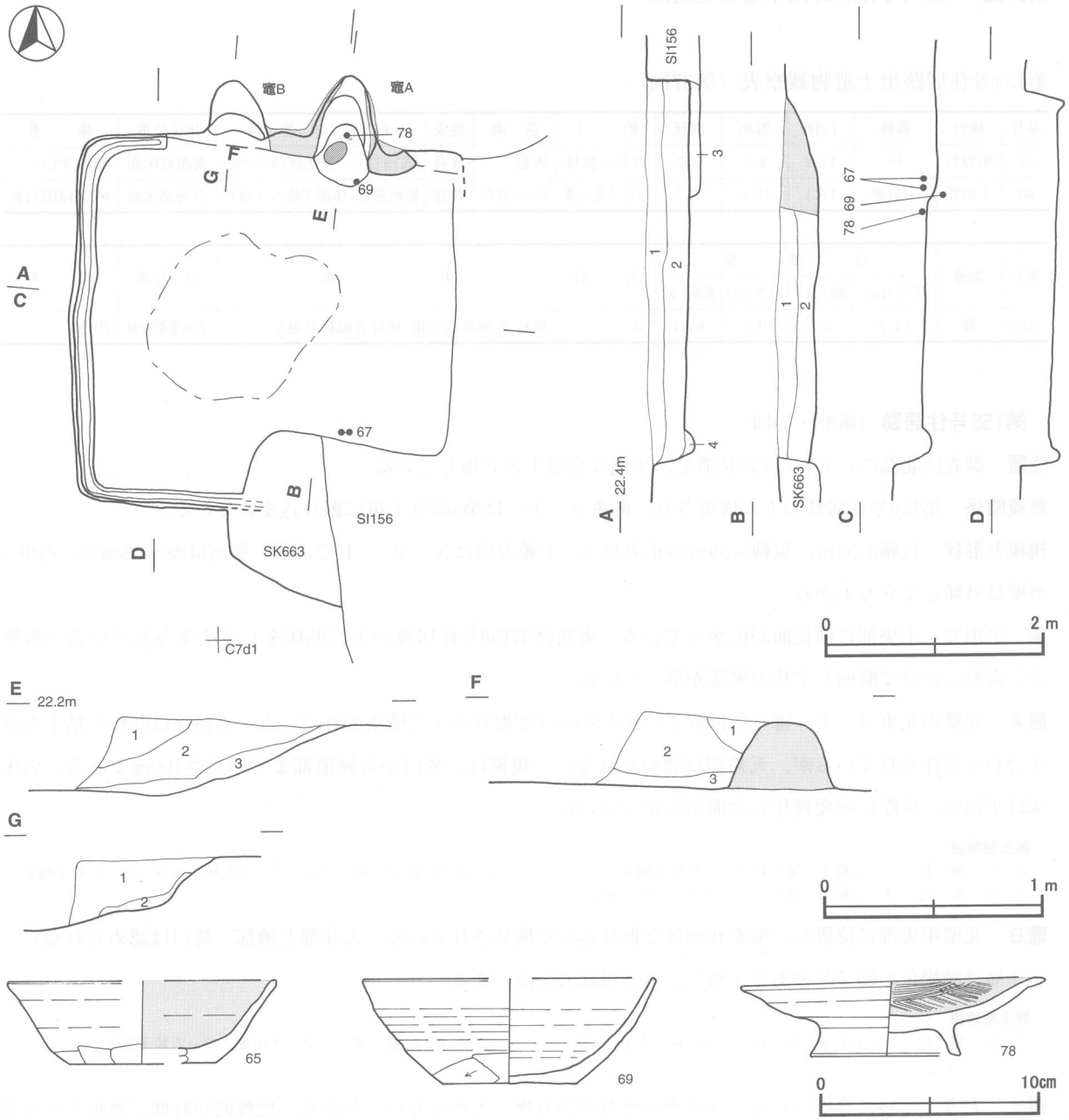
覆土　大きく２層に分層される。それぞれ色調や含有物に大差がないことから，比較的短時間に堆積したと考えられる。第３層は，貼床である。

土層解説

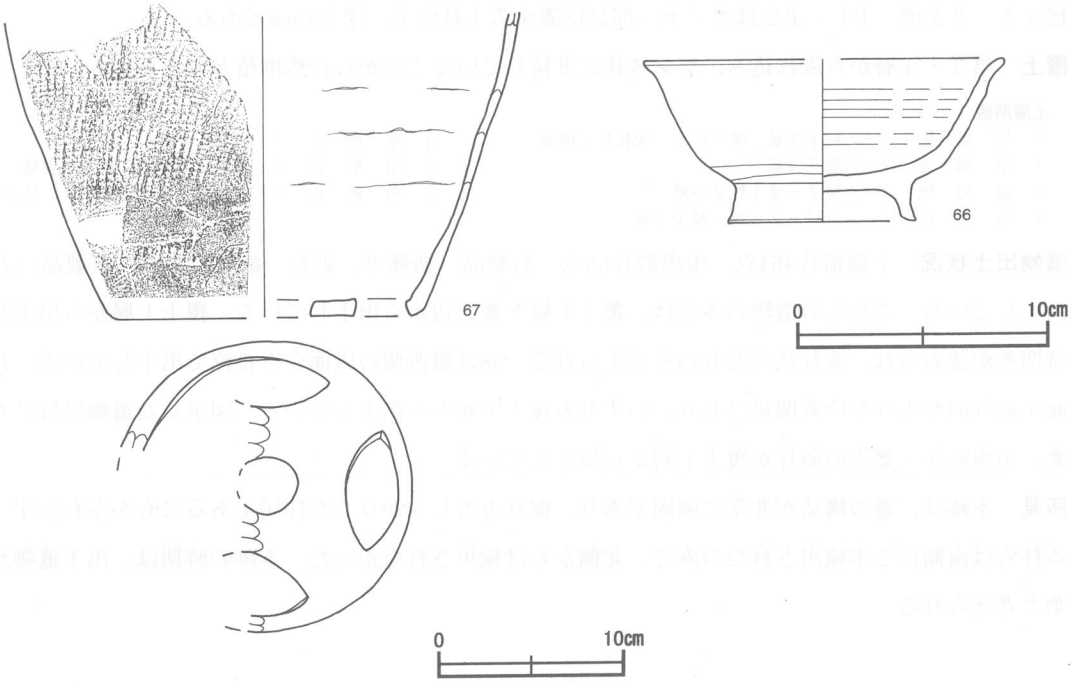
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片277点，須恵器片136点が出土している。これらの遺物の多くは，覆土下層および竈内部から出土している。67は南東コーナー付近，69は竈東側のいずれも床面から出土している。竈の両袖には土師器甕片，須恵器甕片が補強材として利用されている。竈内部からは，78以外に土師器や須恵器の細片が出土している。

所見　竈Bの袖部と焚口は確認されず，周辺には竈を構築していたと推測される砂粒や粘土が焼土とともに散在している。したがって，二つの竈の同時使用は考えにくく，竈Bから竈Aへという使用順が考えられる。また，竈A内部から出土している細片は，二次的な焼成を受けているものが多いことから，支脚や竈の補強等に使用されたと推測される。本跡の時期は，出土した遺物から9世紀後葉と考えられる。



第38図　第155号住居跡・出土遺物実測図



第39図　第155号住居跡出土遺物実測図

第155号住居跡出土遺物観察表（第38・39図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
65	土師器	坏	[12.2]	3.8	[6.6]	長石・雲母	にぶい赤褐	不良	体部下端手持ちヘラ削り	覆土下層	5％内面黒色処理
66	土師器	高台付椀	[14.2]	6.5	7.5	長石·赤色粒子	明赤褐色	普通	高台貼り付け後 ロクロナデ	覆土上層	30％
67	須恵器	甑	－	(16.0)	15.6	長石・石英	灰オリーブ	普通	体部外面擬格子目叩き下位ヘラ削り5孔式	南東コーナー床面	20％
69	須恵器	坏	13.2	4.8	6.0	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部一方向のヘラ削り	竈東側床面	40％二次焼成痕
78	土師器	高台付皿	13.9	3.6	6.8	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	竈Ａ内	80％内面黒色処理 PL19

第156号住居跡（第40・41図）

位置　調査区北部のＣ７ｃ１区に位置し，平坦な台地上に立地している。

重複関係　西壁は第155号住居跡に掘り込まれ，床が貼られている。南西部は第663号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸4.95m，短軸4.65mの正方形で，主軸方向はＮ－４°－Ｗである。壁高は40～42cmで，各壁とも外傾して立ち上がる。

床　平坦で，中央部から西部に硬化面が広がっている。断面Ｕ字状の壁溝が周回している。

竈　北壁中央部に位置し，壁を30cmほど掘り込んで構築されている。袖部は砂粒と粘土を混ぜ合わせて作られており，残存状態は良好である。第４層は袖部の崩落土であり，天井部は認められない。規模は，焚口から煙道部までの長さ120cm，袖部最大幅140cmである。火床部は，床面よりも皿状に４cmほど窪み，燃焼部とともに著しく赤変硬化している。

竈土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量
2　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
3　褐　　色　焼土ブロック中量，炭化粒子・粘土粒子少量
4　黒　褐　色　焼土ブロック中量，粘土粒子少量
5　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
6　暗　褐　色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
7　暗 赤 褐 色　焼土ブロック・炭化粒子中量，ローム粒子微量

ピット　2か所。P1・P2はコーナー部に位置する主柱穴で，深さ16cmである。

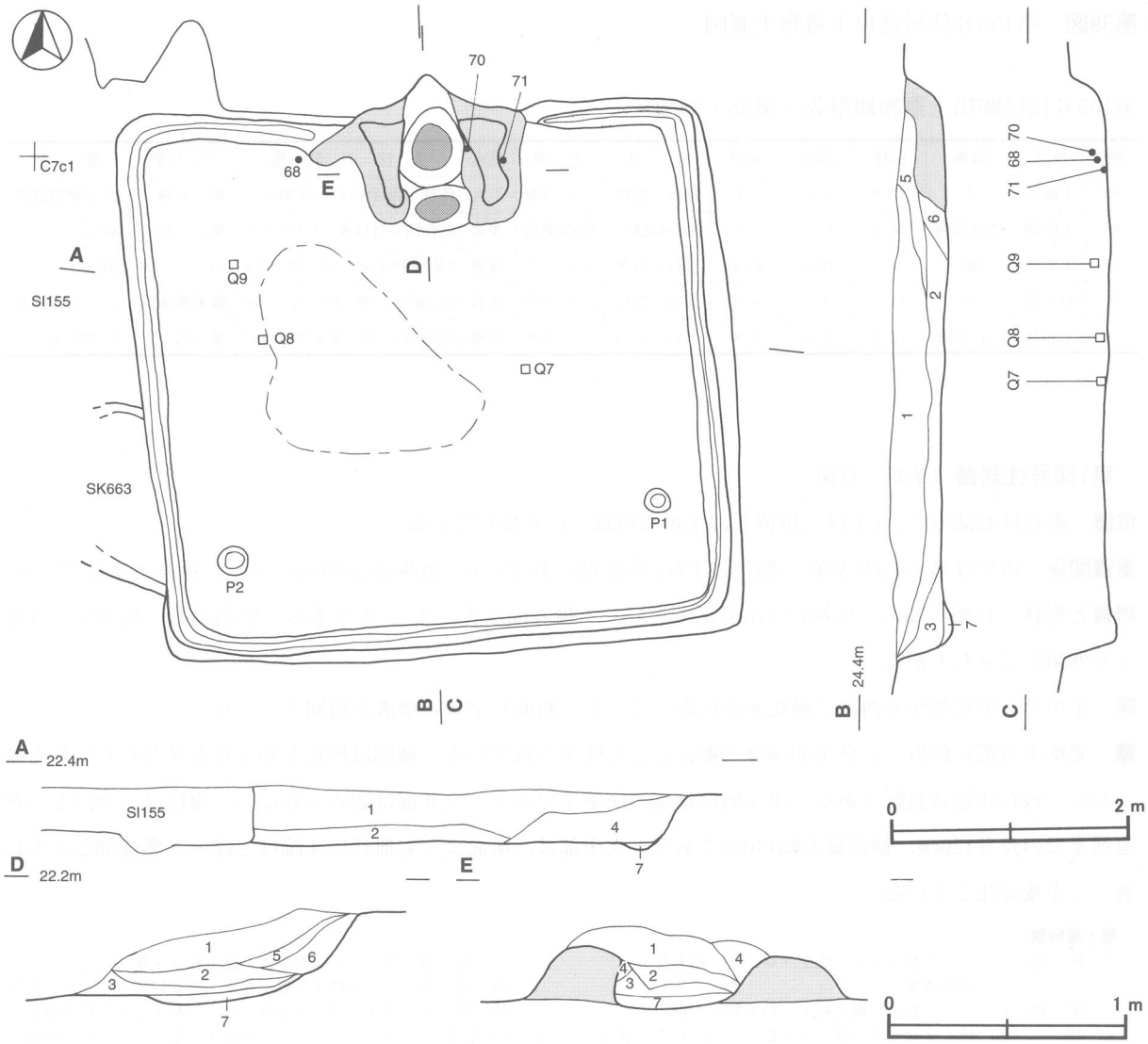
覆土　第3・4層から流れ込み，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

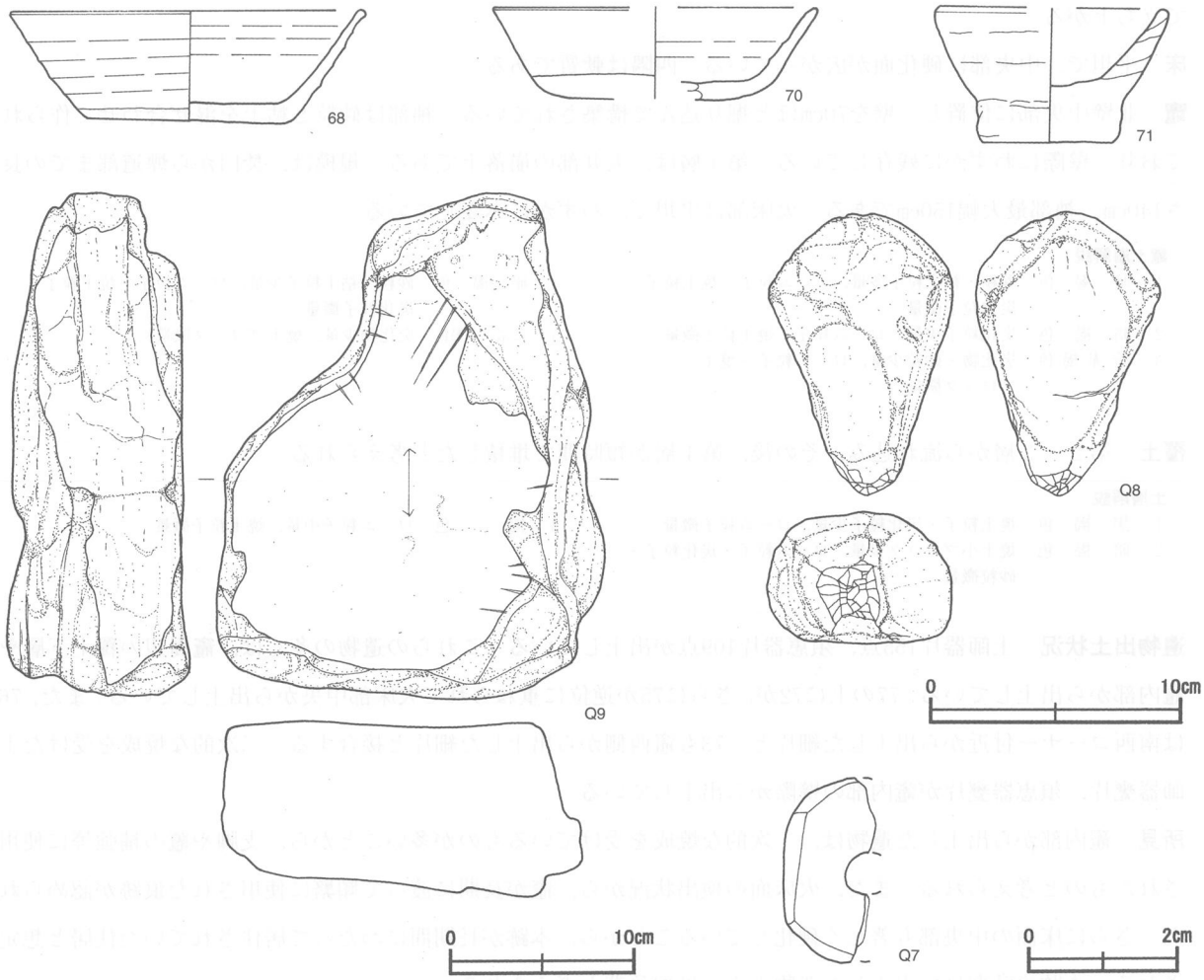
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
4　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
5　暗　褐　色　ローム粒子少量
6　暗　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック少量
7　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，粘土粒子微量

遺物出土状況　土師器片464点，須恵器片66点，石製品（紡錘車，砥石，敲石）3点，鉄製品（刀子）1点が出土している。これらの遺物の多くは，覆土上層と竈周辺から出土している。覆土上層から出土した遺物には時期差が認められ，流れ込んだものと考えられる。68は竈西側の床面から正位で出土している。石製品は硬化面を取り囲むような位置関係にあり，いずれも覆土下層から出土している。図示した遺物以外にも土師器坏・甕，須恵器坏・甕等の破片が覆土下層から出土している。

所見　本跡は，竈の構造が非常に強固であり，掘り方もしっかりした住居であるにもかかわらず，上屋を支える柱穴は南側に2本検出されたのみで，北側からは検出されなかった。本跡の時期は，出土遺物から8世紀後葉と考えられる。



第40図　第156号住居跡実測図



第41図　第156号住居跡出土遺物実測図

第156号住居跡出土遺物観察表（第41図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
68	須恵器	坏	14.2	4.5	8.2	長石・雲母	黄灰色	普通	底部ヘラ切り後一方向のヘラ削り	北西部床面	90% PL18
70	須恵器	坏	[13.0]	3.7	[6.6]	長石・雲母	灰色	普通	体部下端回転ヘラ削り	竈内	30%
71	土師器	手捏	[9.2]	5.5	5.0	砂粒・雲母	赤褐色	普通	内・外面ナデ 底部木葉痕	竈東側床面	40%

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長径	厚さ	孔径	重量				
Q7	紡錘車	(3.7)	(0.6)	0.8	(5.7)	凝灰岩	断面台形 上面欠損 穿孔円形	中央部床面	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q8	敲石	11.3	7.3	5.2	482.0	雲母片岩	先端部に使用痕	西部床面	PL20
Q9	砥石	26.5	20.5	9.5	6,800	雲母片岩	使用面は一面で平坦 端部に金属器の擦痕	西部下層	PL20

第157号住居跡（第42・43図）

位置　調査区北部のＣ７ｂ3区に位置し，平坦な台地上に立地している。

規模と形状　一辺が3.50mの正方形で，主軸方向はＮ－20°－Ｗである。壁高は20cmほどで，各壁とも外傾し

て立ち上がる。

床　平坦で，中央部に硬化面が広がっている。四隅は軟質である。

竈　北壁中央部に位置し，壁を70cmほど掘り込んで構築されている。袖部は砂粒と粘土を混ぜ合わせて作られており，壁際にわずかに残存している。第１層は，天井部の崩落土である。規模は，焚口から煙道部までの長さ140cm，袖部最大幅150cmである。火床部は平坦で，わずかに赤変している。

竈土層解説

1　暗　褐　色　砂粒・粘土粒子多量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
3　暗 赤 褐 色　炭化物・砂粒少量，ローム粒子・焼土ブロック微量
4　暗　褐　色　砂粒・粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5　にぶい赤褐色　炭化物少量，焼土ブロック微量

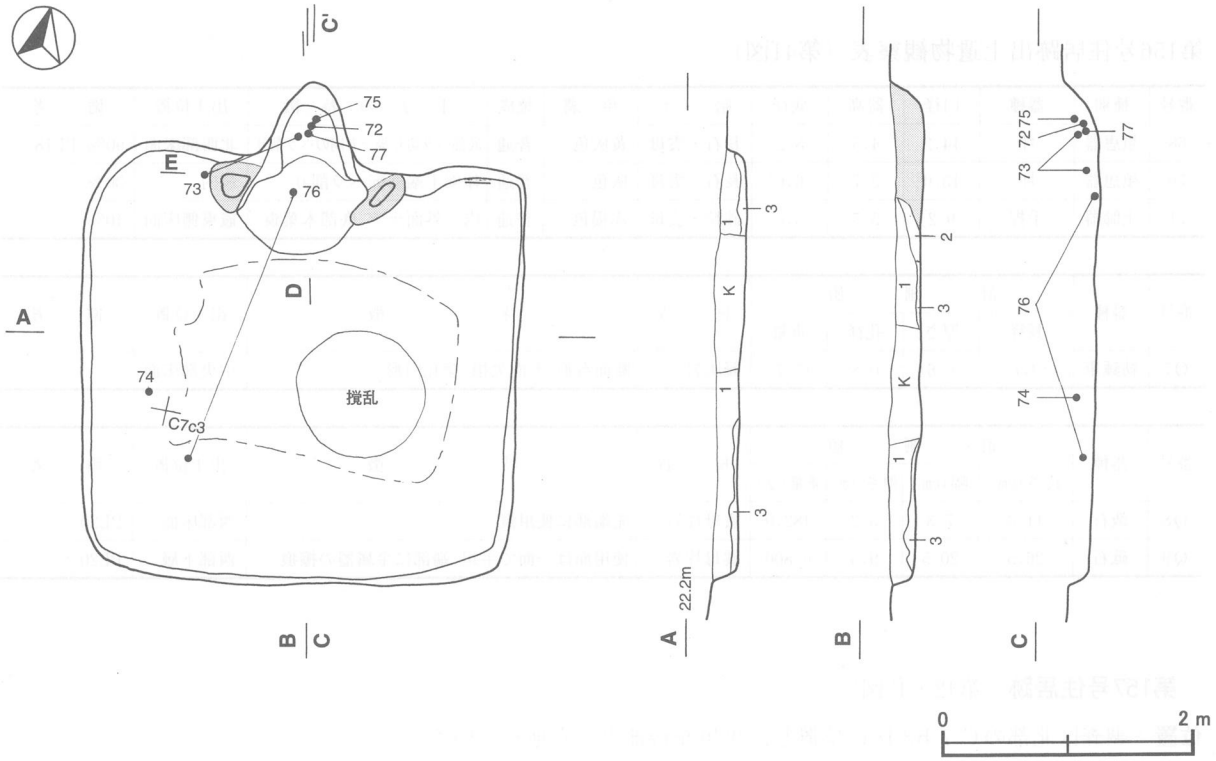
覆土　第２・３層から流れ込み，その後，第１層が短時間で堆積したと考えられる。

土層解説

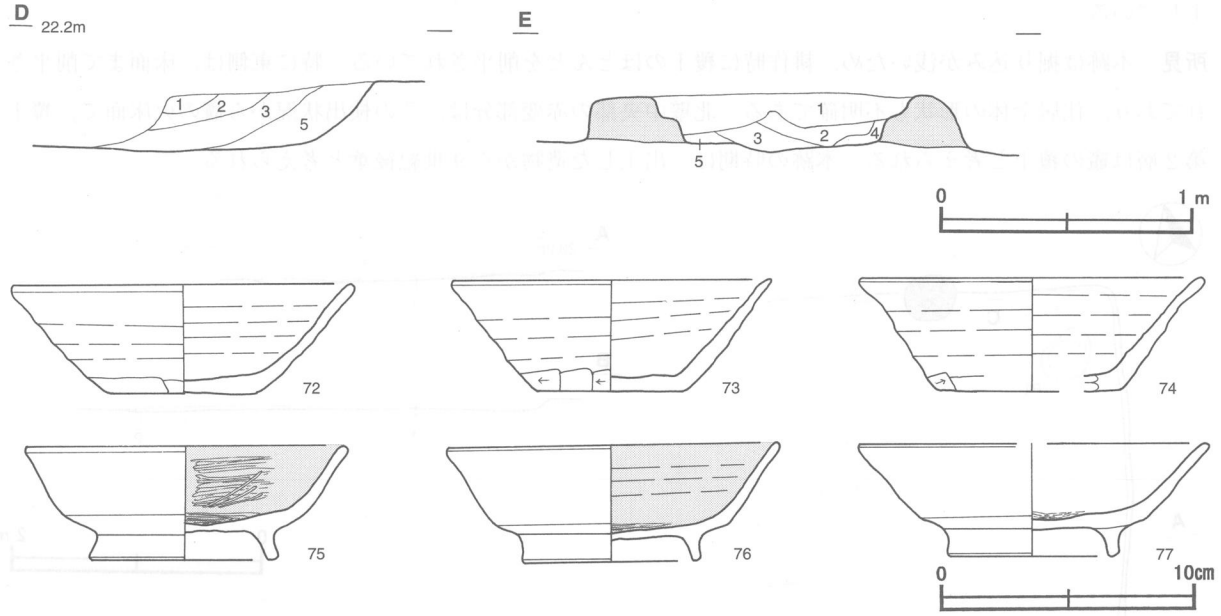
1　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
2　暗　褐　色　焼土小ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量
3　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片155点，須恵器片109点が出土している。これらの遺物の多くは，竈周辺の覆土下層や竈内部から出土している。77の上に72が，さらに75が逆位に重ねられて火床部中央から出土している。また，76は南西コーナー付近から出土した細片と，73も竈西側から出土した細片と接合する。二次的な焼成を受けた土師器甕片，須恵器甕片が竈内部の壁際から出土している。

所見　竈内部から出土した遺物は，二次的な焼成を受けているものが多いことから，支脚や竈の補強等に使用されたものと考えられる。また，火床面の検出状況から，竈が長期に渡って頻繁に使用された痕跡が認められた。さらに床面の中央部も著しく硬化していることから，本跡が長期間にわたって居住されていた住居と想定される。本跡の時期は，出土した遺物から９世紀後葉と考えられる。



第42図　第157号住居跡実測図



第43図　第157号住居跡・出土遺物実測図

第157号住居跡出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　　考
72	須恵器	坏	13.5	4.4	5.6	長石・雲母	灰黄色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部一方向のヘラ削り	竈内	100% PL18
73	須恵器	坏	12.6	4.4	5.8	長石・雲母	灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部一方向のヘラ削り	竈内	50%二次焼成痕 PL18
74	須恵器	坏	[13.4]	4.5	[7.0]	長石・雲母	灰色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部多方向のヘラ削り	西部上層	30%
75	土師器	高台付坏	12.6	4.6	7.6	長石・雲母	明褐色	普通	高台貼り付け後ロクロナデ内面黒色処理	竈内	100%二次焼成痕 PL18
76	土師器	高台付坏	13.2	4.7	6.8	長石・雲母	にぶい褐色	普通	高台貼り付け後ロクロナデ内面黒色処理	竈内	90%二次焼成痕 PL18
77	土師器	高台付坏	[13.8]	4.5	6.8	長石・雲母	橙色	普通	高台貼り付け後ロクロナデ	竈内	30%

第158号住居跡（第44図）

位置　調査区北部のＣ７ｄ3区に位置し，平坦な台地上に立地している。

規模と形状　掘り込みが浅く，北西コーナーと南西コーナー，さらに南北（3.38）m，東西（2.32）mの範囲に床面を確認した。形状は方形と考えられる。

床　平坦である。中央部から西部に硬化した床が散在している。

竈　北壁に，床面を４cmほど皿状に掘り込み，赤変した火床面のみを確認した。付近の床面には，砂粒や粘土，焼土が散在している。

竈土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量

ピット　１か所。Ｐ１は長径50cm，短径30cmの楕円形で，深さ５cmほどである。性格は不明である。

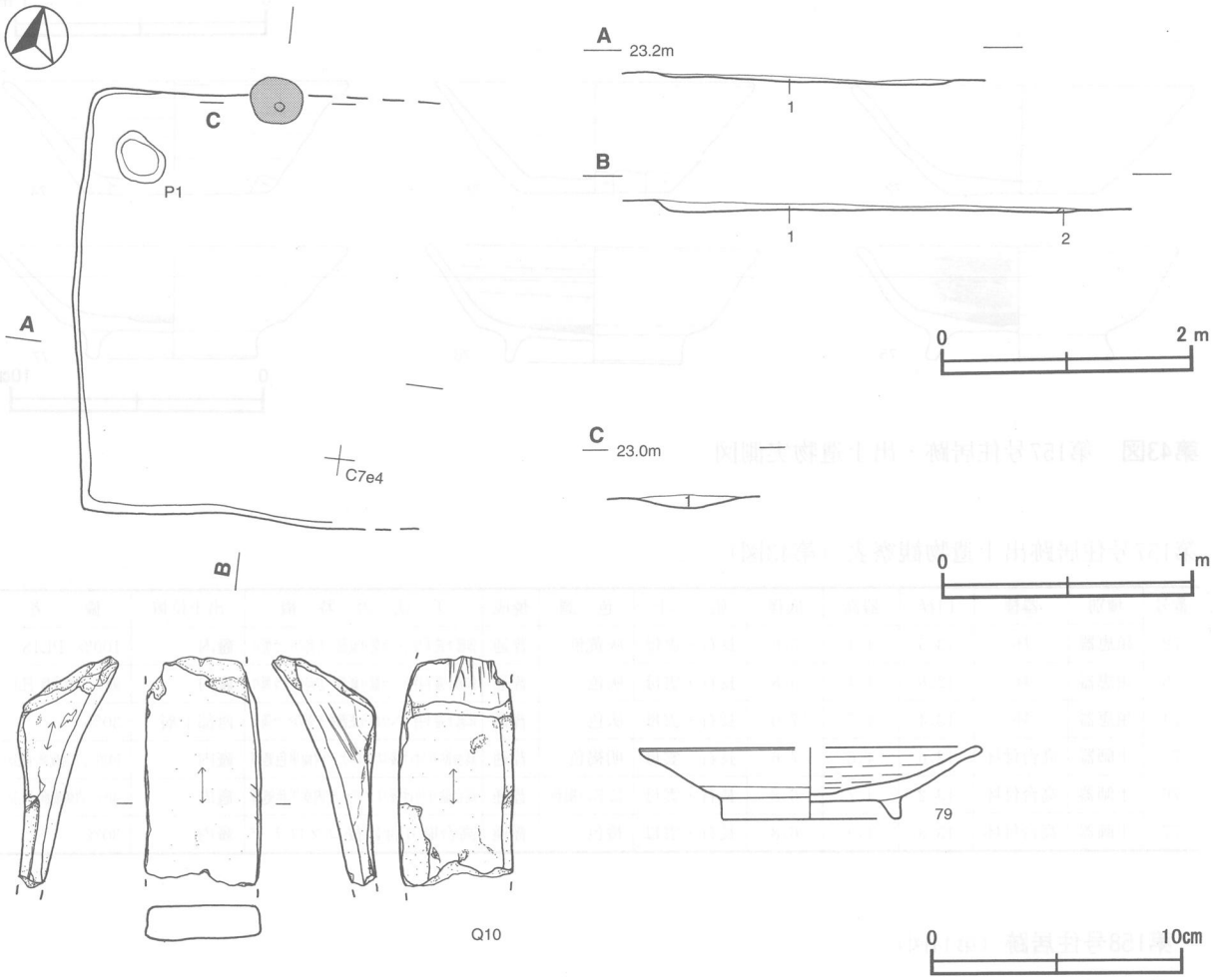
覆土　全体に焼土や炭化粒子の含有が多い層である。堆積状況は不明である。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化物・砂粒微量

遺物出土状況　土師器片39点，須恵器片21点，石製品（砥石）１点が出土している。これらの遺物のほとんどは細片である。79は，覆土中の細片が接合したものである。南壁際からＱ10，ピットから須恵器坏の破片が出

土している。

所見　本跡は掘り込みが浅いため，耕作時に覆土のほとんどを削平されている。特に東側は，床面まで削平されており，住居全体の形状も不明確である。北壁中央部の赤変部分は，その検出状況から竈の火床面で，覆土第２層は竈の覆土と考えられる。本跡の時期は，出土した遺物から９世紀後葉と考えられる。



第44図　第158号住居跡・出土遺物実測図

第158号住居跡出土遺物観察表（第44図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
79	土師器	高台付皿	[13.5]	2.9	7.0	長石･赤色粒子	にぶい橙色	普通	高台貼り付け後ロクロナデ	覆土上層	30%

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q10	砥石	(9.2)	4.6	4.0	(113.2)	凝灰岩	五面使用 一部に金属器の擦痕	覆土下層	

第159号住居跡（第45図）

位置　調査区北部のＣ７ｃ４区に位置し，平坦な台地上に立地している。

重複関係　南東コーナー付近は，第160号住居跡の上に床を貼って構築されている。

規模と形状　長軸3.05m，短軸2.74mの正方形で，主軸方向はＮ－３°－Ｅである。壁高は２cmほどである。壁の形状は不明である。

床　平坦である。中央部に硬化した床が確認されている。

竈　北壁を40cmほど三角形に掘り込まれた部分が赤変し，竈と考えられる。また付近の床面には，焼土や粘土ブロックが散在している。

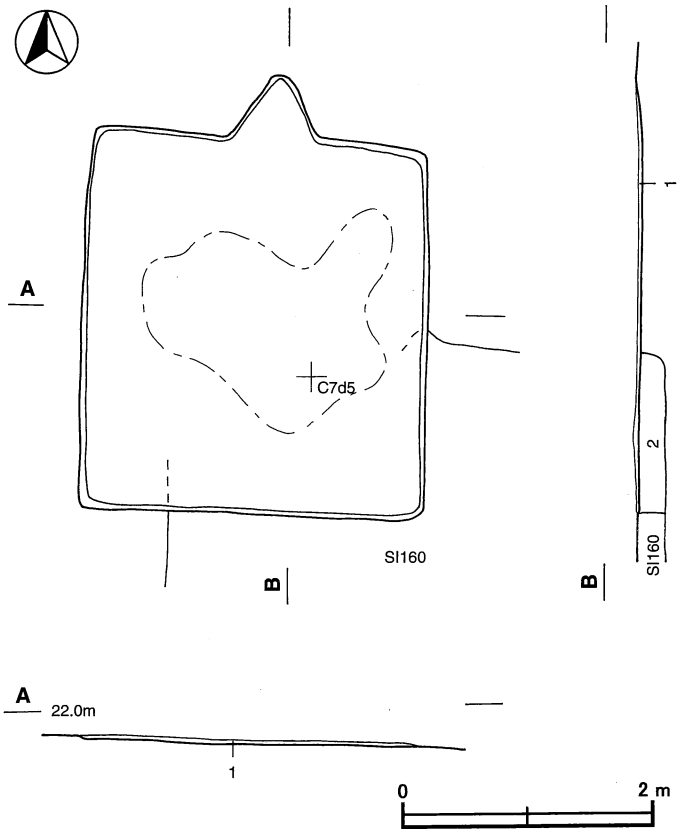
覆土　第２層は貼床である。堆積状況は不明である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片131点，須恵器片56点が出土している。これらの遺物のほとんどは細片で，土師器坏４個体，甕２個体，須恵器坏３個体，甕１個体ほどが出土している。

所見　本跡は，掘り込みが浅いため耕作時に覆土と竈のほとんどを削平されている。北壁中央部の赤変部分は検出状況から竈の火床面で，床面に散在する焼土や粘土ブロックは，火床面や竈構築材の一部と考えられる。本跡の時期は，出土した遺物から９世紀中～後葉と考えられる。



第45図　第159号住居跡実測図

第160号住居跡（第46図）

位置　調査区北部のＣ７ｂ5区に位置し，平坦な台地上に立地している。

重複関係　本跡の北西コーナー部に第159号住居跡が床を貼っている。

規模と形状　長軸3.80m，短軸3.73mの正方形で，主軸方向はＮ－２°－Ｅである。壁高は24cmで，各壁とも垂直に立ち上がる。

床　平坦で軟質である。中央部に硬化したロームが散在している。南壁を除き，断面Ｕ字状の壁溝が周回している。

竈　北壁中央部に位置し，壁を20cmほど掘り込んで構築されている。袖部は砂粒と粘土を混ぜ合わせて作られている。第３層は天井部が崩落した層である。西部は，第159号住居によって削平されている。規模は，焚口から煙道部までの長さ120cmである。火床部は平坦で著しく赤変している。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・砂粒少量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・砂粒少量
3　暗　褐　色　粘土粒子・砂粒中量，ローム粒子・焼土ブロック微量
4　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化物微量
5　暗　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量

ピット　５か所。主柱穴はＰ１～Ｐ４で，深さ23～30cmほどである。Ｐ５は深さ９cmで，南壁中央寄りに位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

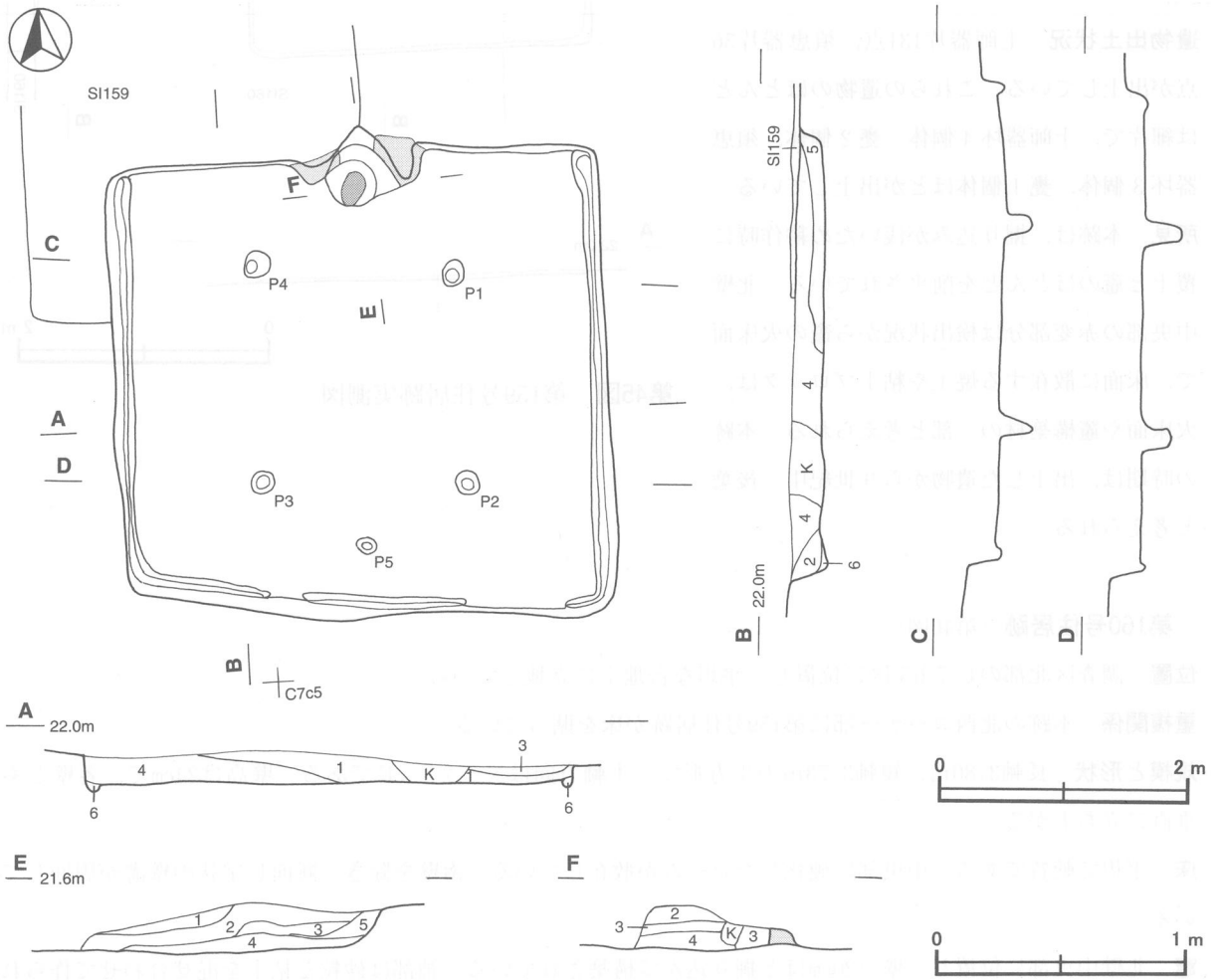
覆土　第２・５層から流れ込み，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量
3　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
5　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
6　暗　褐　色　ロームブロック微量

遺物出土状況　土師器片30点，須恵器片５点が出土している。これらの遺物のほとんどは細片である。土師器坏・甕がそれぞれ約１個体と砥石片が覆土下層から出土している。

所見　本跡から出土した遺物が非常に少ないのは，住居を廃絶する際に，土器類を持ち出したためと推測される。竈西側の床面に少量の焼土や粘土ブロックが認められるが，これは第159号住居を構築する際に，崩れた竈構築材の一部と考えられる。本跡の時期は，出土した遺物から９世紀中～後葉と考えられる。



第46図　第160号住居跡実測図

第161号住居跡（第47・48図）

位置　調査区北部のＣ６ｇ2区に位置し，平坦な台地上に立地している。

規模と形状　長軸4.82m，短軸4.70mの正方形で，主軸方向はＮ－８°－Ｗである。壁高は18～22cmで，各壁とも外傾して立ち上がる。

床　中央部に高まりを持つ硬化面が広がっており，四隅は軟質である。北壁を除き，断面Ｕ字状の壁溝が周回している。

竈　北壁中央部に位置し，壁を50cmほど掘り込んで構築されている。袖部や天井部は確認されていない。火床部は，長径110cm，短径80cmの楕円形に25cmほど掘り込まれ，著しく赤変硬化している。

竈土層解説

1　暗　褐　色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
2　暗　褐　色　焼土粒子中量，炭化粒子少量，粘土粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
4　暗赤褐色　焼土ブロック・砂粒中量，ローム粒子少量
5　黒　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
6　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
7　暗赤褐色　焼土粒子中量，砂粒少量，ローム粒子微量
8　黒　褐　色　焼土ブロック・砂粒少量，ローム粒子・炭化粒子微量
9　暗　褐　色　砂粒中量，焼土粒子少量，ローム粒子微量

ピット　1か所。P1は深さ22cmで，南壁中央寄りに位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

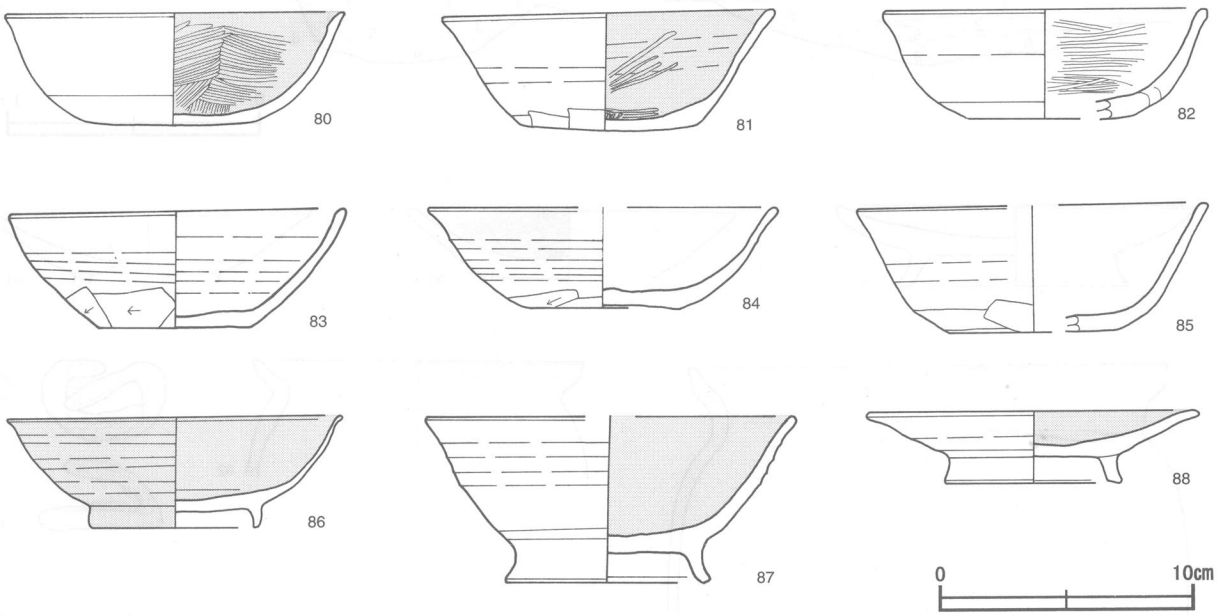
覆土　第3層から流れ込み，順に堆積していったと思われる。

土層解説

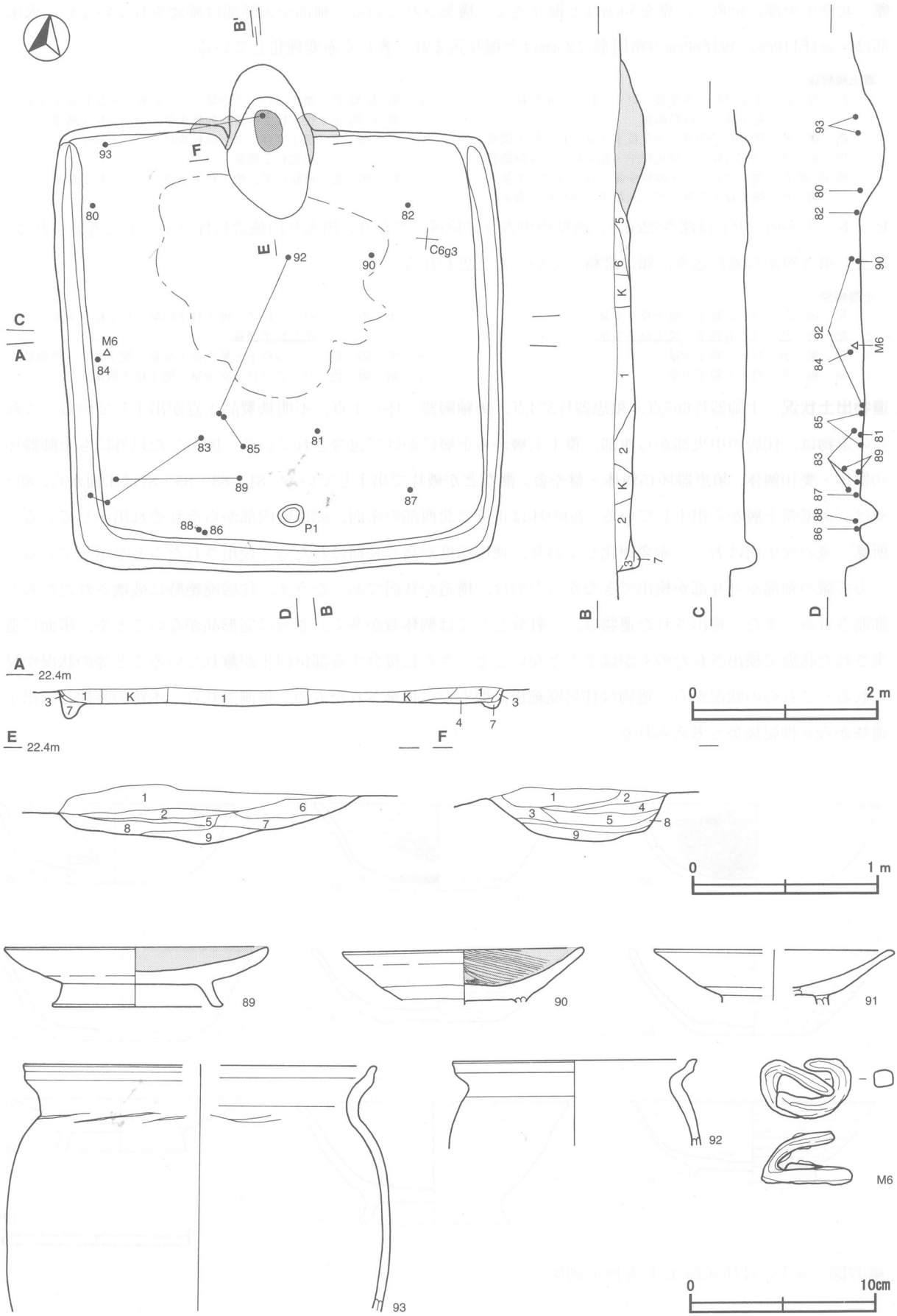
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量
5　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子中量，粘土粒子少量，炭化粒子微量
6　黒　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量，焼土ブロック微量
7　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片667点，須恵器片374点，灰釉陶器（坏）1点，不明鉄製品1点が出土している。これらの遺物は，住居の中央部から西部，覆土上層から下層にかけて包含されている。図示した以外にも土師器坏10個体・甕10個体，須恵器坏15個体・盤や蓋，甑などが破片で出土している。81・83・85・87は床面から，86・88は，南壁際下層から出土している。80の坏は正位で北西部の床面，93は竈内部からそれぞれ出土している。

所見　竈の火床面は著しく赤変硬化しており，使用頻度が高く長期にわたって使用されたことを示している。一方で竈の袖部や天井部が検出できなかったのは，構造が貧弱であったうえ，住居廃絶時に破壊されたためと推測される。また，検出された遺物は，一軒分としては個体数が多く，さらに完形品がないことや，床面に遺棄された状態で検出されたのもがほとんどないこと，さらに接合する部位同士が離れていること等の状況が見られる。これらの状況から，遺物は住居廃絶後，間もなく投棄されたものと推測される。本跡の時期は，出土遺物から9世紀後葉と考えられる。



第47図　第161号住居跡出土遺物実測図



第48図　第161号住居跡・出土遺物実測図

第161号住居跡出土遺物観察表（第47・48図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
80	土師器	坏	13.4	4.6	6.4	長石・雲母	橙色	普通	体部下端回転ヘラ削り底部回転ヘラ切り	北西部床面	95%内面黒色処理 PL19
81	土師器	坏	13.0	4.9	7.0	長石・赤色粒子	橙色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部一方向のヘラ削り	南部床面	70%内面黒色処理 PL19
82	土師器	坏	[12.6]	4.3	[6.6]	長石・赤色粒子	橙色	普通	体部下端回転ヘラ削り	北東部床面	30%
83	須恵器	坏	13.3	4.8	6.0	長石・石英・小礫	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部一方向のヘラ削り	南部床面	80% PL19
84	須恵器	坏	[13.8]	4.0	5.8	長石・雲母	にぶい黄色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部一方向のヘラ削り	西壁際中層	50%
85	須恵器	坏	[13.8]	5.0	[6.7]	長石・雲母	橙色	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部多方向のヘラ削り	南部床面	90%
86	灰釉陶器	高台付坏	13.2	4.5	6.5	灰白色で緻密	薄い緑色釉	良好	口縁部・体部内外面ロクロナデ	南壁際床面	75% PL18
87	土師器	高台付椀	[14.6]	6.6	8.1	長石・赤色粒子	明黄褐色	普通	高台貼り付け後ロクロナデ	南部床面	55%内面黒色処理
88	土師器	高台付皿	13.2	2.9	6.9	長石・赤色粒子	橙色	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け内面黒色処理	南壁際床面	75%二次焼成 PL19
89	土師器	高台付皿	14.0	3.0	[9.5]	長石・石英・小礫	橙色	普通	器面荒れ調整不明 内面黒色処理	南部下層	75%二次焼成痕
90	土師器	高台付皿	[13.0]	(2.9)	－	雲母・赤色粒子	にぶい橙色	普通	器面荒れ内面ヘラ磨き	北東部床面	50%内面黒色処理
91	土師器	高台付皿	[13.0]	(2.7)	－	雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	体部下端回転ヘラ削り	覆土上層	10%
92	土師器	小形甕	13.0	(4.6)	－	長石・石英・小礫	橙色	普通	器面荒れ口縁部内・外面横ナデ	中央部下層	20%
93	土師器	甕	[18.8]	(13.3)	－	長石・石英・小礫	にぶい橙色	普通	体部上位ヘラナデ	竈内	10%

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	径(cm)	重量(g)				
M6	不明	5.0	3.1	0.6	27.3	鉄	腐食が著しい 器種は不明	西壁際中層	

第162号住居跡（第49・50図）

位置　調査区北部のＣ６ｄ８区に位置し，平坦な台地上に立地している。

規模と形状　長軸3.12m，短軸2.75mの長方形で，主軸方向はＮ－５°－Ｅである。壁高は15～20cmで，各壁とも外傾して立ち上がる。

床　中央部と北東コーナー付近に高まりを持つ硬化面が広がっている。

竈Ａ　東壁中央部に位置し，壁を40cmほど掘り込んで構築されている。袖部は砂粒と粘土を混ぜ合わせて作られており，残存状況は良好であるが，天井部は確認できない。規模は，焚口から煙道部までの長さ80cm，袖部最大幅100cmである。火床部は，床面よりも５cmほど皿状に窪み，わずかに赤変している。

竈土層解説

1　暗赤褐色　砂粒中量，焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
2　暗褐色　砂粒中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗褐色　焼土ブロック・炭化粒子少量
4　暗赤褐色　焼土ブロック・炭化粒子中量

竈Ｂ　北壁中央部に位置し，壁を10cmほど掘り込んで構築されている。天井部と焚口は認められない。第４層は粘土粒子を少量含む層で竈構築材の一部と考えられる。

竈土層解説

1　黒褐色　焼土ブロック微量
2　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子中量
3　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・粘土粒子微量

ピット　２か所。主柱穴はＰ１・Ｐ２で深さ15cmである。

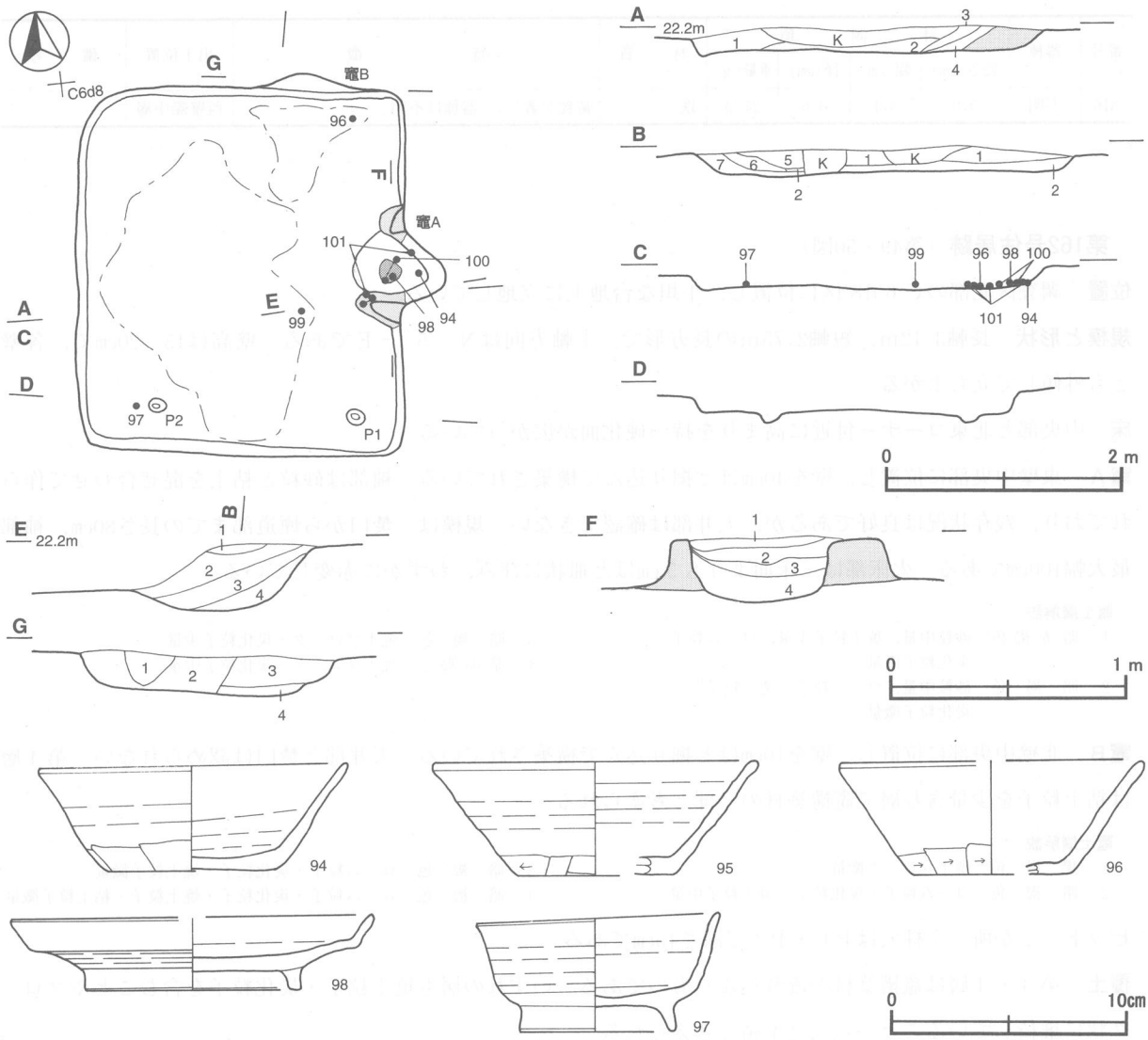
覆土　第３・４層は竈構築材が流れ込んだものである。いずれの層も焼土粒子・炭化粒子を含むことやブロック状に堆積していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

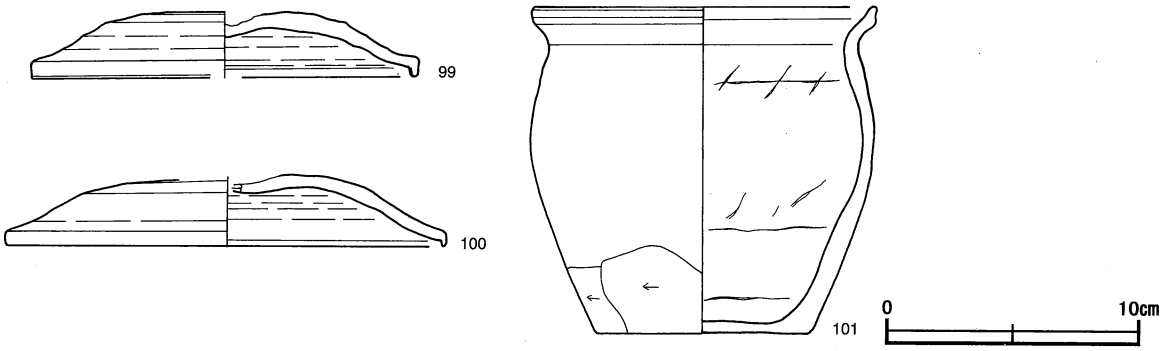
1	黒　褐　色	ローム粒子少量，焼土粒子微量	
2	暗　褐　色	ローム粒子中量，焼土粒子少量，砂粒微量	
3	黒　褐　色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量	
4	黒　褐　色	炭化粒子・砂粒少量，ローム粒子・焼土ブロック微量	
5	黒　褐　色	焼土ブロック微量	
6	暗　褐　色	焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量	
7	暗　褐　色	焼土ブロック中量，ローム粒子・焼土粒子微量	

遺物出土状況　土師器片77点，須恵器片42点が出土している。これらの遺物の多くは，竈周辺と竈内部から出土している。94・98・100はいずれも竈内部から二次的な焼成を受けて重なるように出土している。101は東袖部に貼り付いて出土している。図示した以外にも土師器坏・甕，須恵器坏・蓋・鉢などが破片で出土している。

所見　竈Bが位置する北壁には10cmほどの掘り込みがあり，そこに焼土や炭化物が堆積し周辺が赤変している。また，この掘り込みの前面には焼土や炭化粒子，粘土粒子を含んだ硬化面が広がっている。このことから，二つの竈の同時使用は考えにくく，竈Bから竈Aへという使用順が考えられる。竈Aから出土した遺物は，二次焼成を受け，重なるような状態で出土している。これらの遺物は，支脚や101のように竈の補強材として使用されたと考えられる。本跡の時期は，出土遺物から9世紀前葉と考えられる。



第49図　第162号住居跡・出土遺物実測図



第50図　第162号住居跡出土遺物実測図

第162号住居跡出土遺物観察表（第49・50図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
94	須恵器	坏	13.0	4.5	6.9	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部一方向のヘラ削り	竈内	100%二次焼成痕 PL19
95	須恵器	坏	[13.6]	4.8	[6.6]	長石・石英	灰黄色	普通	体部下端手持ちヘラ削り	竈内	10%二次焼成痕
96	須恵器	坏	[12.8]	4.8	[6.8]	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り底部多方向のヘラ削り	北東部床面	10%
97	須恵器	高台付坏	10.2	5.0	6.4	長石・石英	灰色	普通	体部下端回転ヘラ削り高台貼り付け後ロクロナデ	南西部床面	70%　PL19
98	須恵器	盤	[15.2]	3.1	[9.0]	長石・雲母	橙色	普通	高台貼り付け後ロクロナデ	竈内	40%二次焼成痕
99	須恵器	蓋	[15.4]	(2.6)	－	長石・石英	灰オリーブ	普通	天井部回転ヘラ削り後ロクロナデ	中央部床面	45%
100	須恵器	蓋	17.4	(2.8)	－	長石・雲母	黄灰色	普通	天井部回転ヘラ削り後ロクロナデ	竈内	80%二次焼成痕 PL19
101	土師器	小形甕	13.4	13.0	8.5	長石・石英・小礫	赤褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ体部下端ヘラ削り	竈東側	70%外面煤付着 PL19

表2　住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向（長軸）	平面形	規模（m）（長軸×短軸）	壁高（cm）	床面	壁溝	内部施設 主柱穴	出入口ピット	ピット	炉・竈	貯蔵穴	覆土	出土遺物	時期	備考 新旧関係（旧→新）
91	B 6 h8	N－10°－E	正方形	3.10×3.00	14～16	平坦	一部	1	－	－	－	－	人為	土師器，須恵器，鉄製品	平安	本跡→SI92
92	B 6 h8	N－5°－E	正方形	4.20×3.90	20～25	平坦	一部	4	－	－	－	－	自然	土師器，須恵器	平安	SI91→本跡
110	C 6 b1	N－5°－E	正方形	4.80×4.78	32～37	平坦	全周	3	－	－	竈	－	自然	土師器，須恵器，土製品（紡錘車）鉄製品（刀子）	平安	
120	C 6 e6	N－5°－E	正方形	3.83×3.80	16～19	平坦	全周	4	1	－	竈	－	自然	土師器，須恵器，土製品（支脚）	奈良	
140	G 7 a1	－	不明	4.18×[3.78]	50	平坦	－	－	－	－	－	－	人為	土師器，須恵器	古墳後期	本跡→SI145
141	H 6 a2	N－5°－E	長方形	4.00×3.66	30～38	平坦	半周	3	1	－	竈	－	自然	土師器，須恵器，石製品（石皿）	奈良・平安	
142	G 5 f2	N－20°－W	正方形	5.40×5.05	20～25	平坦	全周	4	1	2	－	－	自然	土師器	古墳後期	
143	G 4 f8	N－3°－W	正方形	4.00×3.62	50	平坦	全周	－	1	－	竈	－	自然	土師器，須恵器，鉄製品（刀子）	奈良・平安	
144	G 4 g6	N－10°－E	正方形	3.67×3.57	24～39	平坦	全周	－	－	－	竈	－	自然	土師器	古墳後期	
145	G 7 a1	N－9°－E	正方形	(3.38)×3.34	45～50	平坦	半周	－	－	－	竈	－	自然	須恵器	奈良・平安	SI140→本跡
146	G 4 b6	N－22°－W	正方形	4.70×4.37	22～24	平坦	全周	3	1	－	－	1	自然	土師器	古墳中期	
147	G 4 c5	N－15°－W	正方形	3.30×3.20	65～70	平坦	全周	－	－	1	竈	－	自然	土師器	古墳後期	
148	F 4 g9	N－5°－E	正方形	4.70×4.30	18～25	平坦	－	4	1	－	竈	－	自然	土師器，須恵器	奈良・平安	
149	B 6 j3	N－19°－E	正方形	4.74×4.32	24～30	平坦	－	4	－	－	竈	－	自然	土師器，須恵器，石製品（砥石）	平安	
150	B 6 h6	N－12°－E	[方形]	[3.20]×3.00	10	－	－	－	－	－	竈	－	不明	土師器，須恵器，石製品（砥石）	平安	
151	C 6 b2	N－5°－E	正方形	3.97×3.87	40	平坦	全周	－	－	－	竈	－	自然	土師器，須恵器，鉄製品(鎌・鋤先)	平安	
152	C 6 b9	N－7°－E	正方形	3.25×3.17	30	平坦	－	－	－	－	竈	－	不明	土師器，須恵器，鉄製品(紡錘・鏨)	平安	
153	C 6 b9	N－85°－W	長方形	3.48×3.02	30～40	平坦	－	－	－	1	竈2	－	自然	土師器，須恵器，土製品（土玉），石製品（砥石）	平安	
154	C 6 a0	N－8°－W	正方形	2.87×2.72	26～30	平坦	－	－	－	－	竈	－	自然	土師器，須恵器，鉄製品（鎌）	奈良	
155	C 6 c0	N－2°－E	正方形	3.50×3.39	28～32	平坦	半周	－	－	－	竈2	－	自然	土師器，須恵器	平安	SI156→本跡→SK663
156	C 7 c1	N－4°－W	正方形	4.95×4.65	40～42	平坦	全周	－	－	2	竈	－	自然	土師器，須恵器，石製品（紡錘車），鉄製品（刀子）	奈良・平安	本跡→SI155→SK663
157	C 7 b3	N－20°－W	正方形	3.50×3.50	20	平坦	－	－	－	－	竈	－	自然	土師器，須恵器	平安	
158	C 7 d3	－	[方形]	(3.38)×(2.32)	－	平坦	－	－	－	1	竈	－	不明	土師器，須恵器，石製品（砥石）	平安	
159	C 7 c4	N－3°－E	正方形	3.05×2.74	2	平坦	－	－	－	－	竈	－	不明	土師器，須恵器	平安	SI160→本跡
160	C 7 b5	N－2°－E	正方形	3.80×3.73	24	平坦	全周	－	1	4	竈	－	自然	土師器，須恵器，石製品（砥石）	平安	本跡→SI159
161	C 6 g2	N－8°－W	正方形	4.82×4.70	18～22	平坦	－	－	－	1	竈	－	自然	土師器，須恵器，灰釉陶器，鉄製品	平安	
162	C 6 d8	N－5°－E	長方形	3.12×2.75	15～20	平坦	－	2	－	－	竈2	－	人為	土師器，須恵器	平安	

3　中近世の遺構と遺物

ここでは検出された遺構を方形竪穴状遺構・地下式壙・火葬土坑・墓壙・井戸・溝・道路状遺構・その他の土坑と分類して記述する。このうち墓壙については，すでに墓壙として報告されている土坑と同様な検出状況や形状であれば人骨等が検出されなくても墓壙として扱う。溝・道路状遺構の土層は本文中に記述し，平面形は全体図（付図）に示した。

(1)　方形竪穴状遺構

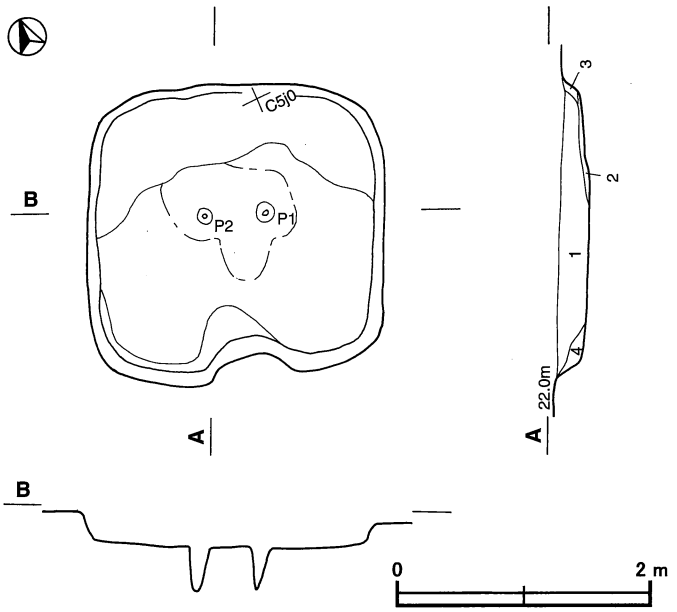
第５号方形竪穴状遺構（第51図）

位置　調査区の北部，Ｃ５ｊ9区に位置し，北に傾斜する台地の縁辺部に立地している。

規模と形状　長軸2.39m，短軸2.34mの隅丸方形で，主軸方向はＮ－16°－Ｅである。南壁中央部は，内側に張り出しており，床面まで緩やかに傾斜している。壁高は19～25cmで，南壁以外は外傾して立ち上がる。

床　南部は平坦で，中央部のピット付近から北部にかけて緩やかに落ち込み，一段下がって平坦になる。ピットを中心に硬化面が広がり北部の床面は軟質である。

ピット　２か所。Ｐ１・Ｐ２は中央部に位置し，北壁に平行に並んでいる。いずれも径13cmの円形で，深さ40cm，掘り方はいずれも逆円錐状である。



第51図　第５号方形竪穴状遺構実測図

覆土　第３・４層から流れ込み，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
4　黒　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　流れ込んだ土師器片５点，須恵器片10点が覆土上層から出土し，覆土中層・下層からは出土していない。

所見　本跡に伴う遺物は出土していない。遺構の形状は，南部の中近世の墓域から検出された竪穴状遺構と酷似している。したがって，10世紀以降の竪穴であると考えられる。

(2)　地下式壙

第５号地下式壙（第52図）

位置　調査区の南部，Ｇ４ｆ0区に位置し，南に緩やかに傾斜する斜面に立地している。本跡の西側約20mには，第６号地下式壙が位置する。

規模と形状　主室は隅丸長方形で，長軸4.90m，短軸1.70m，長軸方向はＮ－20°－Ｅである。竪坑は一辺が1.00mほどの隅丸方形で，主室西壁のやや南寄りに位置している。壁は垂直に立ち上がり，壁高は1.30mである。底面は竪坑から緩やかに傾斜して主室へ続いている。主室の底面は平坦で，軟質である。

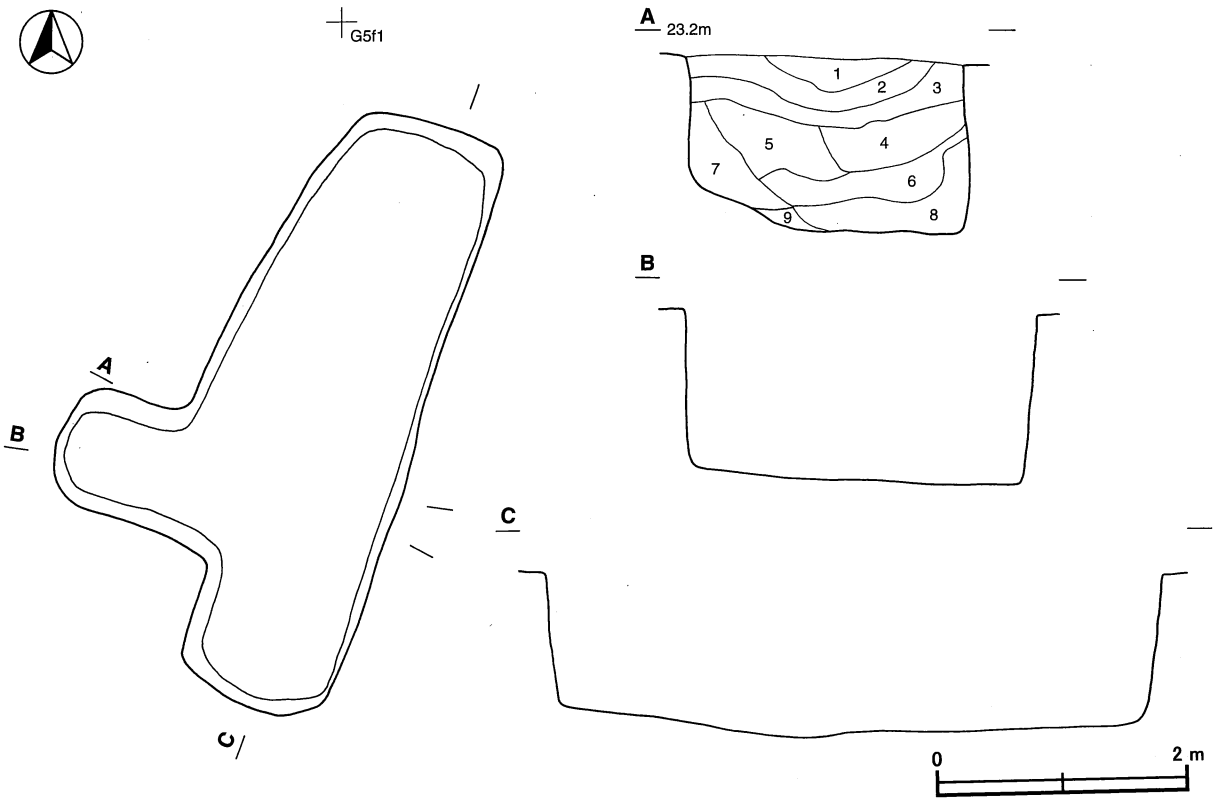
覆土　竪坑から流れ込んだ後，天井が崩落した状況を示している。第６層はロームブロックが主体となっており，天井部の崩落土と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　ローム粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量
4　暗　褐　色　ローム粒子多量
5　褐　　色　ロームブロック中量
6　褐　　色　ロームブロック中量
7　暗　褐　色　ロームブロック中量
8　暗　褐　色　ロームブロック中量
9　黒　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　流れ込んだとみられる土師器片２点，須恵器片１点が覆土上層から出土している。

所見　時期を推察する遺物は出土していない。性格については，周辺に中近世の墓壙と思われる遺構が数多く確認されていることから，墓域との関連が考えられる。



第52図　第５号地下式壙実測図

第６号地下式壙（第53図）

位置　調査区の南部，Ｇ４h6 区に位置し，南に緩やかに傾斜する斜面に立地している。

規模と形状　主室は長軸4.80m，短軸1.50mで，長軸方向はＮ－20°－Ｅである。平面形は隅丸長方形を基に北壁を東西に拡幅した形状である。竪坑は長軸1.80m，短軸1.20mほどの隅丸長方形で，主室の西壁やや南寄りに位置している。壁は垂直に立ち上がり，壁高は1.50mである。底面は竪坑から緩やかに傾斜して主室へ続いている。主室の底面は平坦で，軟質である。

覆土　第７・８層はロームブロックが主体となっていることから，天井部の崩落土と考えられる。その後，南側の第５層から，順に堆積していったと考えられる。

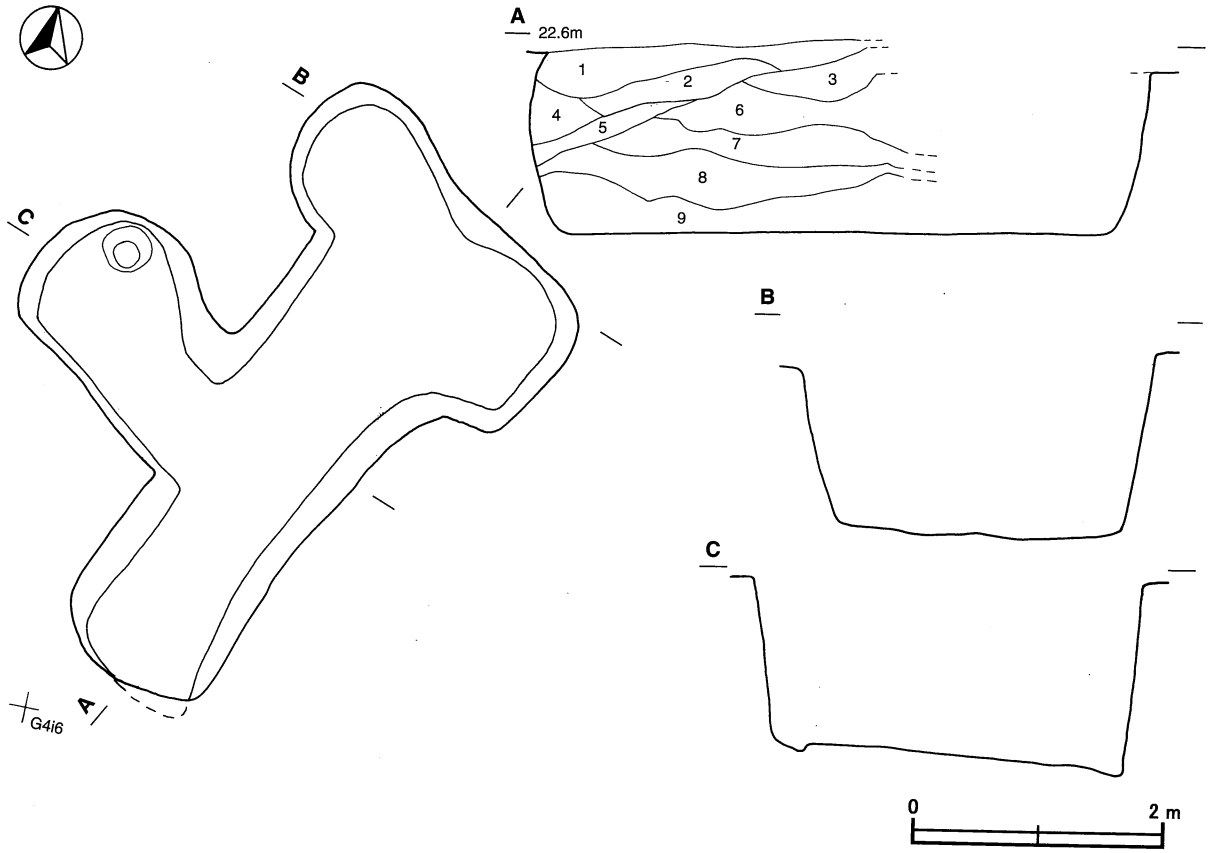
土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量
3　黒　　色　ロームブロック微量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量

5　黒　褐　色　ロームブロック少量
6　黒　褐　色　ロームブロック少量
7　暗　褐　色　ロームブロック多量
8　暗　褐　色　ロームブロック多量
9　暗　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　流れ込んだとみられる土師器片９点，須恵器片２点が覆土上層から出土している。第１層と２層の間から内耳鍋の細片が出土している。

所見　本跡に伴う遺物が出土していないことから，詳細な時期については不明である。中近世の墓域との関連が考えられる。



第53図　第６号地下式壙実測図

(3)　火葬土坑

第621号土坑（第54図）

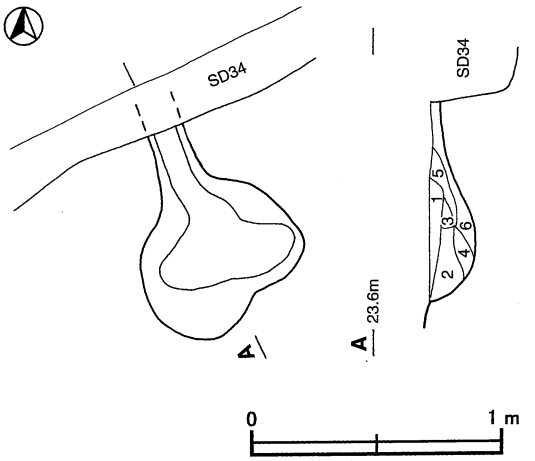
位置　調査区の中央部，Ｇ５ｆ８区に位置し，南に緩やかに傾斜する斜面に立地している。

重複関係　通気溝の部分を第34号溝に掘り込まれている。

規模と形状　燃焼部は長径0.70m，短径0.50mの不整楕円形で，長径方向はＮ－44°－Ｗである。通気溝は長さ0.25m幅0.16m，断面形はＵ字状をしている。

壁面　燃焼部は緩やかに立ち上がる。通気溝は，深さ５cmで燃焼部に向かって緩やかな傾斜を示している。

底面　燃焼部は皿状で，被熱により著しく赤変している。通気溝には炭化物が堆積し，黒色を呈する。



第54図　第621号土坑実測図

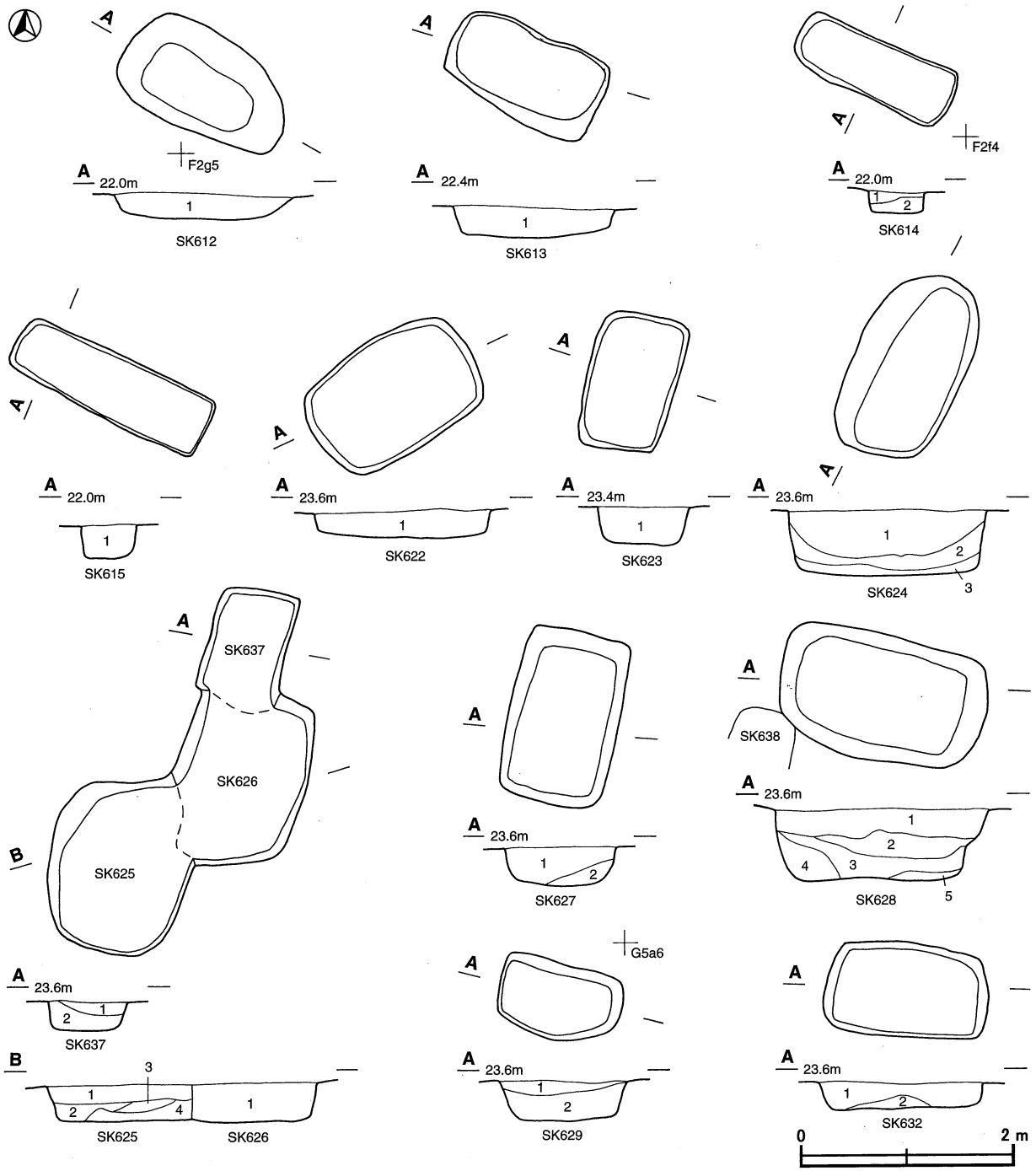
覆土　6層に明確に分層されることから，人為堆積と思われる。

土層解説

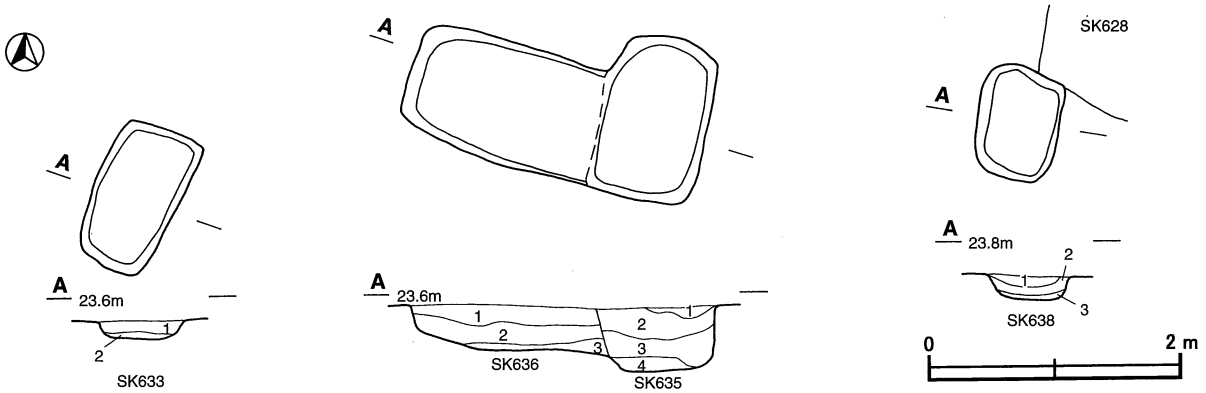
1　黒　　色　炭化粒子中量，焼土粒子・骨粉少量，ローム粒子微量
2　黒　　色　炭化粒子多量，焼土粒子・骨粉少量，ローム粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
4　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
5　暗　褐　色　ロームブロック少量
6　暗　褐　色　ロームブロック少量

所見　本跡は，骨片・焼土・炭化物が検出されていることや，形状から中世の火葬施設と考えられるが，本跡に伴う遺物が出土していないため明確な時期は不明である。

(4)　墓壙（第55・56図）



第55図　墓壙実測図(1)



第56図　墓壙実測図(2)

第612号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム中ブロック少量

第613号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム中ブロック少量

第614号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム中ブロック少量
2　暗　褐　色　ローム中ブロック中量

第615号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム小ブロック少量

第622号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム中ブロック少量

第623号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム中ブロック中量

第624号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子多量
3　黒　褐　色　ローム中ブロック微量

第625号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック中量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック少量
3　黒　褐　色　ローム小ブロック少量
4　黒　褐　色　ローム小ブロック微量

第626号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック少量

第627号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム中ブロック微量
2　暗　褐　色　ローム中ブロック少量

第628号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム小ブロック少量
2　黒　褐　色　ローム中ブロック少量
3　黒　褐　色　ローム中ブロック微量
4　暗　褐　色　ローム小ブロック微量
5　黒　褐　色　ローム小ブロック中量

第629号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック・灰少量
2　暗　褐　色　ローム中ブロック少量

第632号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム中ブロック中量
2　暗　褐　色　ローム中ブロック中量，炭化物少量

第633号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム粒子多量
2　黒　褐　色　ローム中ブロック少量

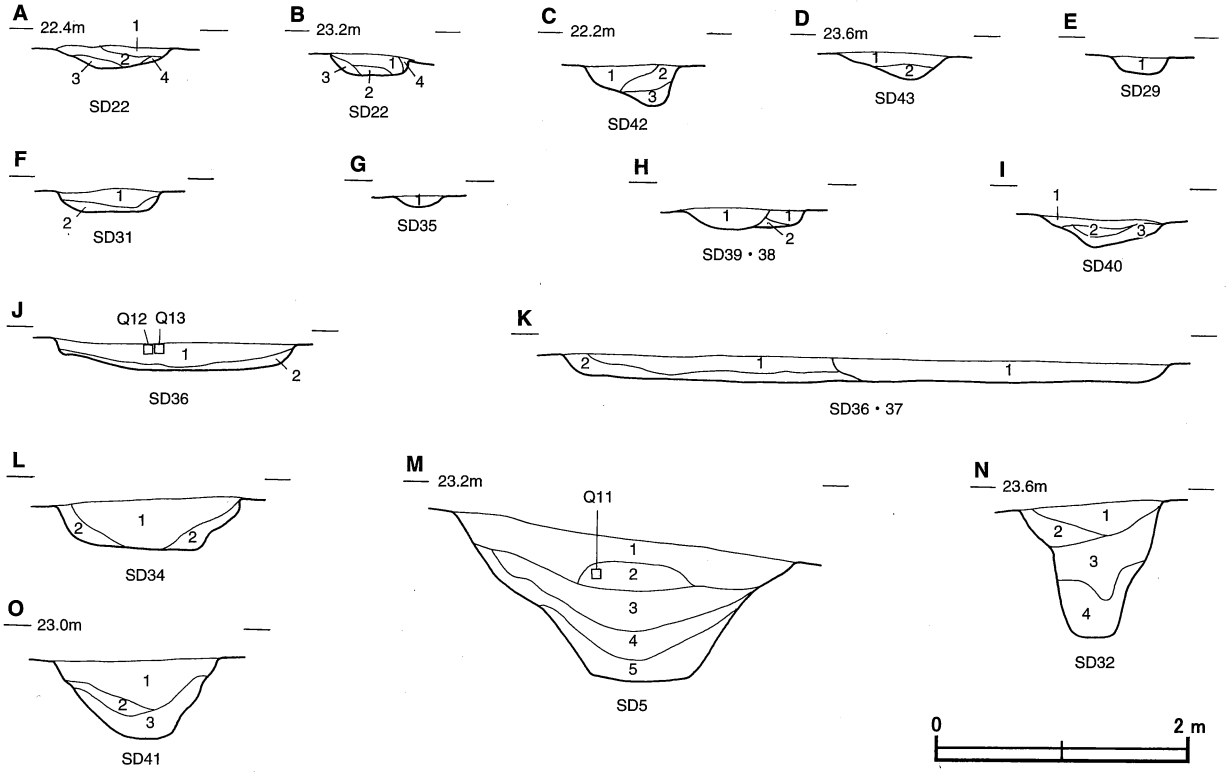
第635号土坑土層解説
1　黒　褐　色　炭化物少量，ローム小ブロック微量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック中量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム中ブロック中量
4　暗　褐　色　ローム大ブロック少量

第636号土坑土層解説
1　極暗褐色　ローム中ブロック少量
2　暗　褐　色　ローム中ブロック少量
3　暗　褐　色　ローム中ブロック中量

第637号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム小ブロック少量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック中量

第638号土坑土層解説
1　黒　褐　色　焼土小ブロック・炭化物少量，ローム粒子微量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
3　暗　褐　色　ローム中ブロック・炭化物少量

(5) 溝跡（付図・第57・58図）



第57図　第５・22・29・31・32・34～43号溝跡土層断面図

第５号溝跡土層解説
1　褐　　色　ローム粒子中量
2　褐　　色　ロームブロック中量
3　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子中量
4　褐　　色　ローム粒子少量
5　暗　褐　色　ローム粒子中量

第22号溝跡土層解説Ａ
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子少量

第22号溝跡土層解説Ｂ
1　黒　褐　色　ローム粒子微量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量
4　褐　　色　ローム小ブロック中量

第29号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量

第31号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ローム中ブロック微量

第32号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　黒　褐　色　ローム小ブロック少量
3　黒　褐　色　ローム粒子微量
4　黒　褐　色　ローム中ブロック微量

第34号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ローム小ブロック少量
2　暗　褐　色　ローム中ブロック少量

第35号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量

第36号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ローム中ブロック中量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック中量

第37号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量

第38号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子多量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック中量

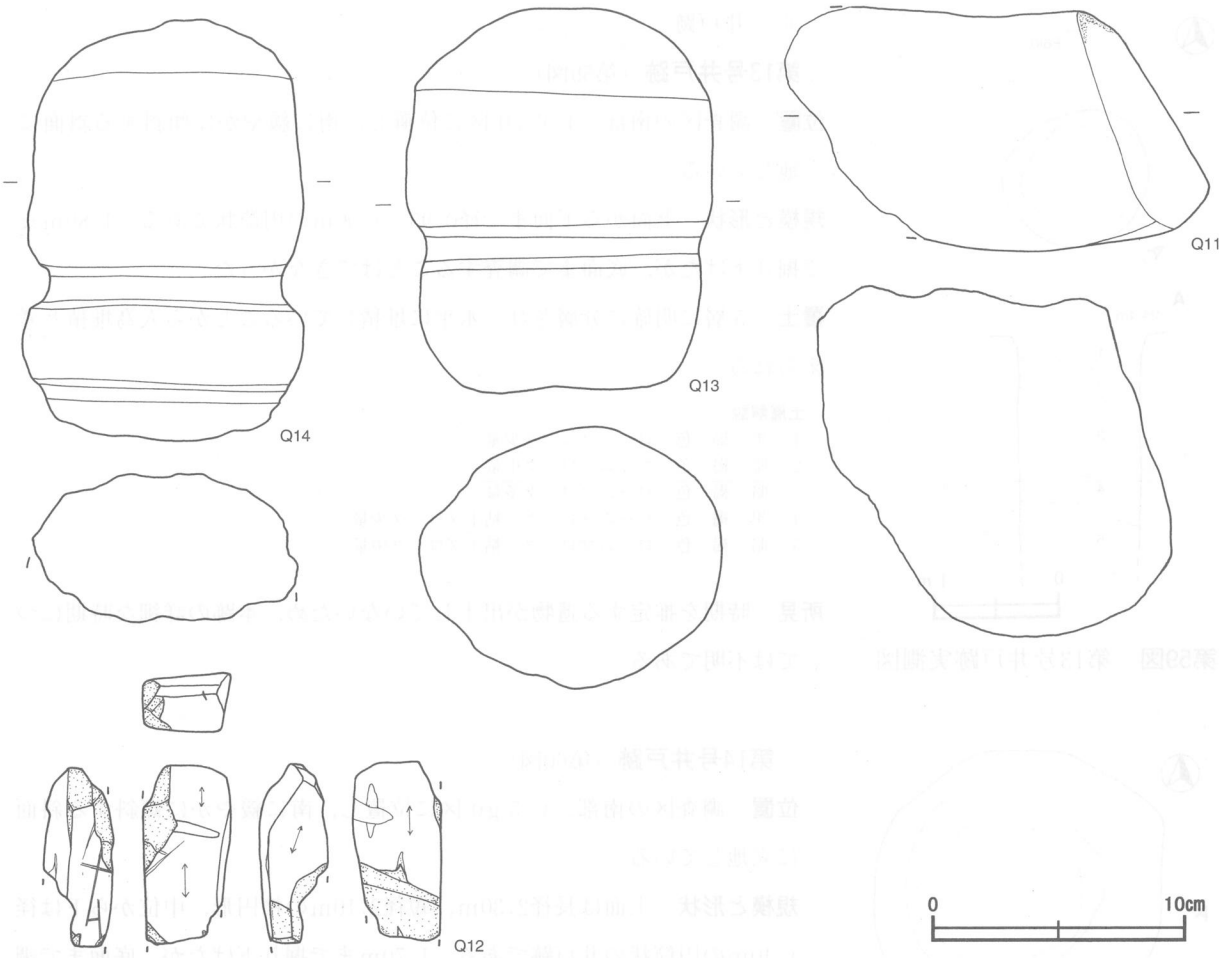
第39号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量

第40号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ローム小ブロック少量
2　暗　褐　色　ローム中ブロック少量
3　暗　褐　色　ローム小ブロック中量

第41号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ローム小ブロック少量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム大ブロック微量

第42号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ローム中ブロック中量，炭化物微量
2　黒　褐　色　ローム小ブロック少量，炭化物微量
3　黒　褐　色　ローム小ブロック少量

第43号溝跡土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　黒　褐　色　ローム中ブロック微量



第58図　第５・32・36号溝跡出土遺物実測図

第５号溝跡出土遺物観察表（第58図）

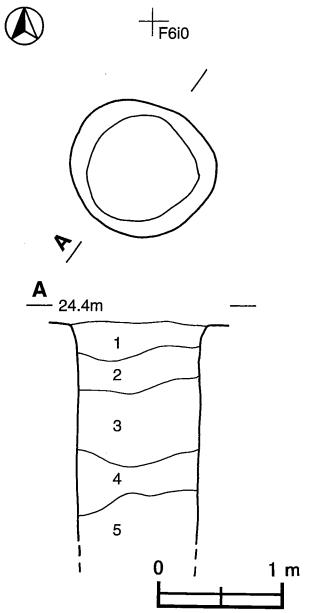
番号	器種	計測値			材質	特徴	出土位置	備考
		高さ(cm)	幅(cm)	重量(g)				
Q11	五輪塔	12.2	(14.7)	(2,800)	花崗岩	風化により脆い 風輪の一部か	覆土上層	

第32号溝跡出土遺物観察表（第58図）

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q12	砥石	(7.2)	3.5	2.8	(48.2)	砂岩	五面使用 一部に金属器による擦痕あり	中央部覆土上層	

第36号溝跡出土遺物観察表（第58図）

番号	器種	計測値			材質	特徴	出土位置	備考
		高さ(cm)	幅(cm)	重量(g)				
Q13	五輪塔	19.8	16.2	5,300	花崗岩	空輪	覆土上層	PL20
Q14	五輪塔	22.1	14.7	(2,800)	花崗岩	空輪	覆土上層	PL20



第59図　第13号井戸跡実測図

(6)　井戸跡

第13号井戸跡（第59図）

位置　調査区の南部，Ｆ６ｉ０区に位置し，南に緩やかに傾斜する斜面に立地している。

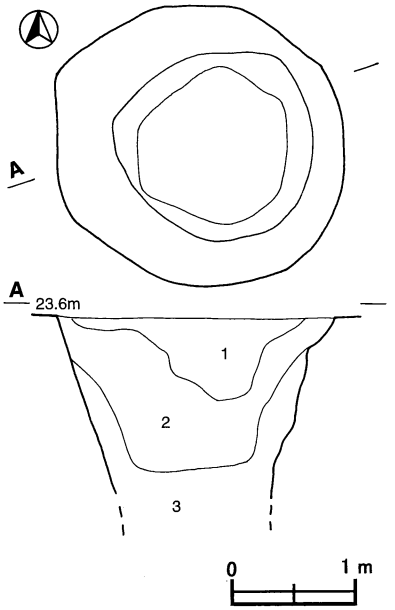
規模と形状　上面から下面まで径0.95～1.00mの円筒状である。1.80mまで掘り下げたが，底面まで調査することはできなかった。

覆土　５層に明確に分層され，水平に堆積していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量
3　暗　褐　色　ロームブロック多量
4　黒　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック少量
5　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック中量

所見　時期を推定する遺物が出土していないため，本跡の詳細な時期については不明である。



第60図　第14号井戸跡実測図

第14号井戸跡（第60図）

位置　調査区の南部，Ｇ５ｇ０区に位置し，南に緩やかに傾斜する斜面に立地している。

規模と形状　上面は長径2.30m，短径2.10mの楕円形，中位から下は径1.40mの円筒状の井戸跡である。1.70mまで掘り下げたが，底面まで調査することはできなかった。

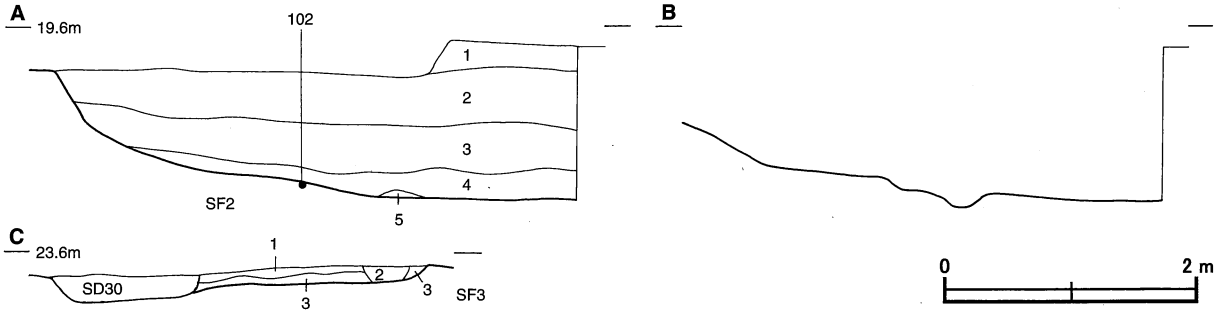
覆土　第１・２層に含まれるロームブロックは，壁が崩落したものと推察される。レンズ状の堆積を示しており，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量

所見　時期を推定する遺物が出土していないため，本跡の詳細な時期については不明である。

(7)　道路状遺構（付図・第61・62図）



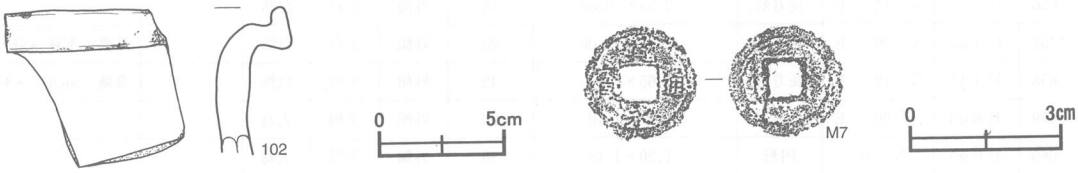
第61図　第２・３号道路状遺構土層断面図

第２号道路状遺構土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物・粘土粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量
4　褐　灰　色　ローム小ブロック・粘土小ブロック・砂粒微量
5　褐　灰　色　ローム小ブロック・粘土小ブロック微量

第３号道路状遺構土層解説

1　極暗褐色　ローム小ブロック少量
2　黒　褐　色　ローム小ブロック微量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量



第62図　第２号道路状遺構出土遺物実測図

第２号道路状遺構出土遺物観察表（第62図）

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		銭径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
M7	古銭	2.2	0.7	0.15	2.26	銅	寛永通宝	調査区南部	PL20

(8)　その他の土坑

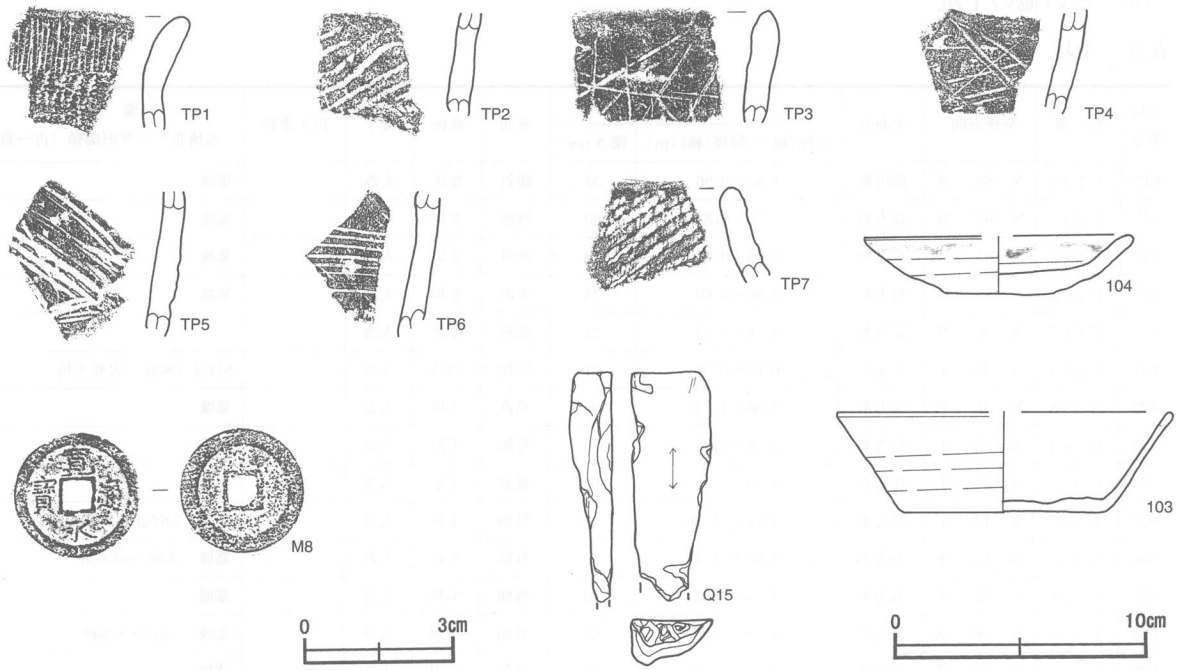
表３　土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					遺構番号・新旧関係（古→新）
612	F２f5	N－60°－W	楕円形	1.65×0.96	33	緩斜	皿状	人為		墓壙
613	F２f5	N－65°－W	長方形	1.50×0.88	30	外傾	平坦	人為		墓壙
614	F２e3	N－65°－W	長方形	1.56×0.56	22	垂直	平坦	人為		墓壙
615	F２e2	N－63°－W	長方形	1.96×0.60	34	垂直	平坦	人為		墓壙
617	F６h5	N－90°－W	長方形	3.56×0.84	24	緩斜	平坦	人為		
621	F２f5	N－39°－E	不定形	0.63×0.56	21	外傾	凹凸	人為		SD34→本跡　火葬土坑
622	G５f8	N－55°－E	長方形	1.65×1.13	25	垂直	平坦	人為		墓壙
623	G５e4	N－13°－E	長方形	1.28×0.84	39	外傾	平坦	人為		墓壙
624	G５c3	N－26°－E	楕円形	1.84×1.02	60	緩斜	平坦	人為		墓壙
625	G５a5	N－12°－E	[長方形]	1.60×(1.30)	29	外傾	平坦	人為		墓壙　SK626→本跡
626	G５a5	N－15°－E	[長方形]	1.62×(1.19)	35	外傾	平坦	人為		墓壙　本跡→SK625
627	G５a6	N－12°－E	長方形	1.53×1.03	33	外傾	平坦	人為		墓壙
628	F５j5	N－78°－W	長方形	1.98×1.20	65	外傾	平坦	人為		墓壙　SK638→本跡
629	G５a5	N－76°－W	長方形	1.19×0.74	38	外傾	平坦	人為		墓壙
632	F５i5	N－86°－W	長方形	1.55×0.89	27	外傾	平坦	人為		墓壙
633	F５h4	N－28°－E	長方形	1.20×0.67	18	外傾	平坦	人為		墓壙
634	F５g5	N－19°－E	長方形	3.13×1.05	90	外傾	凹凸	人為		墓壙
635	G５a5	N－16°－E	長方形	1.31×0.84	50	外傾	平坦	人為		墓壙　SK636→本跡
636	G５a4	N－73°－W	長方形	1.57×0.95	37	外傾	皿状	人為		墓壙　本跡→SK635
637	G５a5	N－10°－E	長方形	1.15×0.72	28	外傾	平坦	人為		墓壙
638	F５j5	N－11°－E	長方形	0.90×0.65	19	外傾	平坦	人為		墓壙　本跡→SK628
644	F５i6	N－14°－E	長方形	2.01×1.05	78	外傾	平坦	人為		
645	F５i6	N－79°－W	[長方形]	0.80×(0.68)	78	外傾	平坦	自然		

土坑番号	位　置	長径方向	平面形	規　模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備　考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					遺構番号・新旧関係（古→新）
648	F 5 j6	N－75°－W	[長方形]	1.08×(0.32)	40	外傾	平坦	人為		
651	G 4 f0	N－20°－E	不定形	5.80×2.73	136	外傾	平坦	自然		第５号地下式壙
653	G 4 f6	N－20°－E	不定形	5.15×3.08	145	外傾	平坦	自然		第６号地下式壙
655	G 4 f4	N－20°－E	長方形	2.86×0.93	15	外傾	平坦	自然		
656	G 4 a5	N－15°－E	[長方形]	2.55×(0.83)	18	外傾	平坦	自然		
657	G 4 a5	N－20°－E	[長方形]	2.22×(1.00)	20	外傾	平坦	自然		墓壙　本跡→SK658
658	F 4 j5	N－12°－E	長方形	1.65×1.04	42	外傾	平坦	自然		墓壙　SK657→本跡
659	B 6 g3	N－20°－E	[長方形]	(1.24)×1.10	20	外傾	平坦	人為		
660	B 6 g3	N－0°	円形	1.20×1.18	36	外傾	平坦	人為		
661	C 7 f1	N－0°	円形	1.10×1.00	30	外傾	平坦	人為		
662	C 7 f1	N－0°	円形	1.31×1.29	25	外傾	平坦	人為		
663	C 7 c1	N－15°－E	[長方形]	1.43×(1.01)	37	外傾	平坦	人為		SI155・156→本跡

4　遺構外出土遺物（第63図）

今回の調査で，遺構に伴わない土器・石器などが出土した。ここではこれらの出土遺物について実測図・拓影図および一覧表を掲載する。



第63図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第63図）

番号	時　期	器形および文様の特徴	出土位置	備　考
TP1 ～2	縄文時代前期後葉	１は口縁部片で，口辺部に細い半截竹菅による縦位の沈線，下位には貝殻波状文が施文されている。２は胴部片で，半截竹菅による押引文が施文されている。	調査区南部	PL20
TP3 ～7	縄文時代後期前葉	３は口縁部片で，雑な沈線文が施文されている。４は３と同様な雑な沈線文が施文されている。５・６は胴部片で数本単位の沈線によって文様が施文されている。７は口縁部片で，Ｌの縄文が施されている。	調査区南部	PL20

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
103	須恵器	坏	13.3	8.4	7.9	長石・石英・雲母	灰黄色	普通	器面荒れ体部下端手持ちヘラ削り	調査区南部	PL19
104	陶器	小皿	(10.4)	2.3	4.2	淡黄色で緻密	淡黄色	普通	口縁部に灰釉底部回転糸切り痕	調査区南部	

番号	器種	計　測　値				材　質	特　　徴	出土位置	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q15	砥石	(9.0)	3.2	1.8	(48.2)	粘板岩	一面使用一部に金属器による擦痕あり	調査区南部	

番号	器種	計　測　値				材　質	特　　徴	出土位置	備　考
		銭径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
M8	古銭	2.5	0.6	0.2	3.12	銅	寛永通宝	調査区南部	PL20

第4節　ま　と　め

神田遺跡は，平成７年度から12年度にかけて計46,811㎡が発掘調査された。すでに37,380㎡については調査報告がなされ，『茨城県教育財団文化財調査報告第121・134集』として刊行されている。ここでは，本遺跡のおかれた環境と検出された遺構，遺物について若干の考察を加え，結びとしたい。

1　検出された遺構や遺物

(1)　旧石器時代から弥生時代

調査区内において旧石器時代から弥生時代の遺構は，検出されていない。旧石器時代の石器は，Ｆ２区とＥ６区から比較的多く採集されているため，この２地区で試掘調査を行った。Ｆ２区から採集された石器は，尖頭器４点（安山岩３，珪質頁岩１），ナイフ形石器２点（頁岩１，チャート１），スクレイパー１点（黒曜石），剥片５点（頁岩５）である。試掘調査では，ナイフ形石器１点（頁岩）と剥片５点（頁岩３，黒曜石２）がソフトローム層中から検出されている。また，Ｅ６区から採集された石器は，剥片７点（黒曜石）である。試掘調査では，剥片16点（黒曜石13，チャート１，安山岩１，頁岩１）がソフトローム層中から検出されたのみであった。これら２地区は，低地に落ち込む緩やかな斜面部に位置するＦ２区，平坦部に位置するＥ６区と異なる立地条件にあり，石器の材質も異なることから，相互の関連は考えにくい。

縄文時代の遺物は，土器片（早期・前期・後期），石鏃，石斧等が検出されている。これらの多くは，西側に傾斜する斜面部から採集されている。土器片は，早期の田戸下層式・田戸上層式が10数点，前期の浮島式・興津式が30数点，後期の加曽利Ｂ式・堀之内式が数点採集されているのみである。採集された土器片が少量であることや，斜面部の北端から陥し穴が検出されていること，さらに20点ほどの石鏃が採集されていることなどから，本地域が狩猟の場などに利用されていたと考えられる。

弥生時代の遺物は，Ｆ３区からＦ４区にかけての平坦部から数点の土器片が検出されている。これらの土器片は縄文を施文したもの，刺突文や櫛描文により施文したもの等であり，その特徴から後期後葉に位置づけられる遺物である。これらの遺物が採集された地区は，後述する古墳時代前期の竪穴住居跡が存在する地区でもあり，弥生時代後期の遺構は検出されていないが古墳時代前期と生活域が隣接するか，あるいは生活域が継続されていたと考えることができる。

(2) 古墳時代

Ｆ４区から検出された第14Ａ・Ｂ号住居跡は，神田遺跡における最古の竪穴住居跡である。第14Ａ号住居跡からは東海系の高坏と坩，南関東系の甕，第14Ｂ号住居跡からも南関東系の甕が出土しており，いずれも４世紀中葉の住居跡である。５世紀代の住居跡も４世紀の住居跡と同様な地区に立置しており，居住域に変化は見られない。これら４～５世紀の住居跡は，２軒ないし３軒を単位として構成されていたと想定される。その後６世紀から７世紀の住居跡は，北西の斜面部に散見され，住居構造もこの時期に炉から竈へと変化している。

(3) 奈良・平安時代

８世紀前葉から９世紀後葉までの遺構は，竪穴住居跡を中心に台地全体から検出されている。これらの住居跡の特徴は，規模や形状が均質化され，いずれも主軸方向が北向きに作られていることである。また，これらの住居跡は，４本柱穴に出入り口施設のピットが伴う構造が一般的であるが，比較的小規模の住居跡には柱穴を持たないものが多い。これら小規模の住居跡は，低い屋根を葺いた後に周堤帯を構築したり，屋根にも土を盛る等の工法により構築されていたと考えられる。柱材はクヌギ節・コナラ節等，屋根材はタケ亜科等が想定される[1)]。

住居に伴う竈の構造は，北壁または東壁を20～30cm外側へ掘り込み，そこにロームを主体にわずかに粘土や砂を混ぜ込んだ土を竈構築材として据え付けただけの非常に貧弱なものである。このためか，竈を作り替えた事例も多く見られる。作り替えの事例は，北壁中央に作ったものを東壁に作り替える場合（第155号住居跡等）と北壁から東壁に作り替える場合（第153・162号住居跡等）の二通りが確認されている。さらに土師器や須恵器の破片を竈の補強材としたり，支脚として利用していた事例（第151・157号住居跡等）も多く見られる。

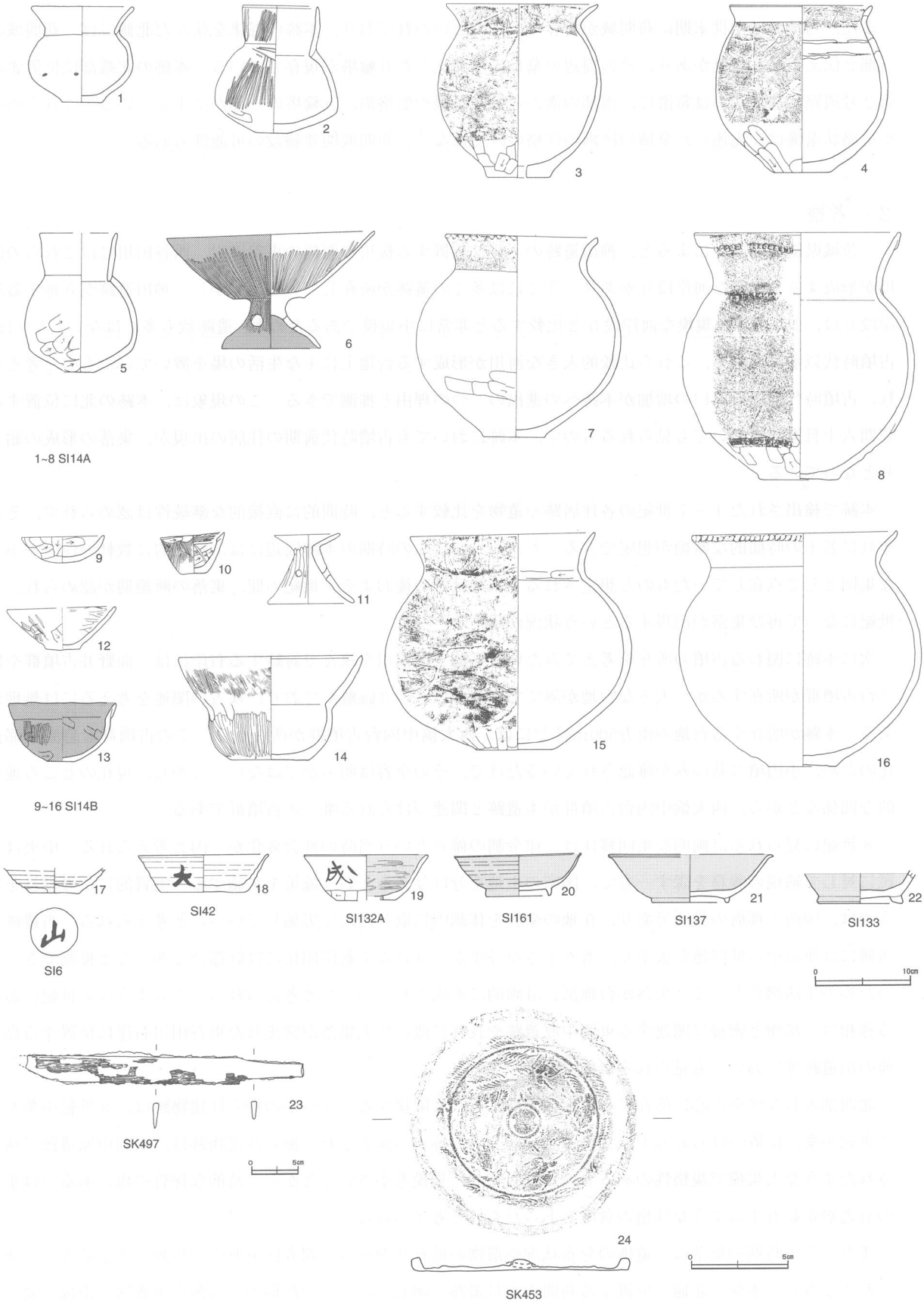
また，数棟の掘立柱建物跡が北西部のＢ３区を中心に検出されている。これらの構造は，桁行３間，梁行２間の小規模で，軸線や堀り方の規模が不規則なものが多い。柱穴から出土した遺物も少ないため，詳細な時期は不明であるが，隣接する竪穴住居跡（第35・36・40・50・54・55号住居跡等）と軸線が重なることから，時期的には８世紀中葉から９世紀中葉のものと考えられる。

竪穴住居跡からの出土遺物は，土師器や須恵器が主で，鉄製品や石製品が希に混在する。須恵器はその胎土から，新治窯跡群から産出された製品が大半を占めている。これらの中には，灰褐色やにぶい褐色を示すいわゆる焼成不良な遺物も数多く見られる。これらの遺物の流通は，この時期の須恵器生産が需要に追いつかない状況を示すものである。鉄製品は，鎌・鋤先・刀子等，石製品は砥石がほとんどであるが，８世紀の住居跡からは鉄鏃も３点出土している。また，墨書土器や灰釉陶器も数点出土している。

(4) 中・近世

中・近世の遺構は，土坑（墓壙），井戸，地下式壙，方形竪穴状遺構，火葬土坑，溝，道路状遺構等が検出されている。これらの遺構は，北西部のＢ３区からＣ４区にかけての地区と東部のＢ７区からＣ７区にかけての地区，それに南部のＥ４区を中心にした地区にまとまって検出されている。土坑の形状は隅丸長方形と円形に大別され，人骨は未確認であるが古銭（北宋銭・寛永通宝）を伴うものがあり，いずれも中世から近世にかけての墓壙と考えられる。これらのまとまりは，多くの土坑に井戸や火葬土坑，地下式壙等が付随する「遺構群」として構成されているようであり，Ｅ４区の遺構群は，西側や南側に付随する溝や道路状遺構によって，区画されている。

遺物は，第453号土坑から13世紀と考えられる白銅製和鏡「松樹千鳥鏡」が黒漆塗りの鏡筥とともに出土している。したがってこの時期，本跡にはすでに墓域が形成されていたようである。他には陶磁器片（常滑，瀬戸美濃系の擂鉢等），古銭，人骨片等が少量検出されているだけで，これら遺構群や各遺構についての詳細な



第64図　おもな出土遺物

時期については不明である。

また，当地には中世末期に苅間城が所在していたといわれており，本跡の谷津を挟んだ北側には，苅間城の一部と伝えられる土塁があり，その周辺の墓地には風化した五輪塔が現存している。本跡の北端部に位置する第２号道路状遺構からは常滑片，南部の溝からは内耳鍋や焙烙鍋，五輪塔の一部が出土している。これらの溝や道路状遺構は，先述した墓域の区画の性格のみではなく，苅間城関連施設の可能性もある。

2　考察

『茨城県遺跡地図』によると，神田遺跡の北側に位置する桜川や西側の東谷田川，西谷田川にはこれらの河川が形成する大規模な河岸段丘があり，そこには多くの遺跡が所在している。しかし，神田遺跡が立地する河岸段丘は，これらの大規模な河岸段丘と比較すると非常に小規模であるためか，遺跡数も多くはない。人々は，古墳時代以前において，これら比較的大きな河川が形成する台地上に主な生活の場を置いていたものと考えられ，古墳時代前期の人口の増加が本跡への進出の一つの理由と推測できる。この現象は，本跡の北に位置する苅間六十目遺跡においても見られるもので，本跡においても古墳時代前期の住居の出現が，集落の形成の始まりとなっている。

本跡で検出された４～７世紀の各住居跡や遺物を比較すると，時間的に直接的な継続性は認められず，それぞれに若干の時間的な断絶が想定できる。したがって，この時期の本跡周辺には，断続的に数軒の住居が小さな集団として点在していたものと想定される。本跡はその後およそ１世紀の間，集落の断絶期が認められ，８世紀になって再び集落が出現するという状況が窺える。

次に本跡に関わる古墳の所在を考えてみたい。本跡と蓮沼川を挟んで対峙する右岸には，面野井古墳群や関ノ台古墳群が所在するが，大きな台地が隔てて本跡とは２～３㎞離れており，双方の関連を考えるには無理がある。本跡が所在する台地の南方500ｍほどには，西大橋中内台古墳群が所在する。この古墳群も急激な都市化のため，小円墳３基のみが確認されているだけで，その全容は明らかではない。しかし，現在のところ地理的な関係などから，西大橋中内台古墳群が本遺跡と関連づけられる唯一の古墳群である。

８世紀に見られる計画的な集団移住は，律令制の確立という当時の社会変化が一因と考えられる。中央は人民に対して納税の義務を課す一方で，国家の土地を分け与えるという施策を実施する。実質的にこの役目を担うのは，国衙・郡衙の役所であり，在地の豪族を体制内に取り込んで実施していったと考えられる。当遺跡の西側には蓮沼川の低湿地が広がり，所々小さな谷津が入り込んで新田開拓には好都合であったと推測でき，そのための生活拠点として，集落が台地部に計画的に形成されていったと考えられる。このような８世紀における様相は，郡衙と密接に関連する東岡中原遺跡や長期に渡って大集落が営まれた東谷田川右岸に位置する島名熊の山遺跡等においても見られる現象である。

北西部のＢ３区を中心に所在する竪穴住居群とそれに隣接するいくつかの掘立柱建物跡は，８世紀中葉から９世紀中葉に位置づけられるものである。しかし，本跡から検出された掘立柱建物跡は，東岡中原遺跡で検出されたような大規模で規格性のあるものとは異なり，規模も小さいことから一時的な保管の場，あるいは集落の有力層が私有するような性格の倉庫であったものと考えられる。

また，この時期の集落は，遺構の分布状況や遺物の散布状況から，調査区東側の平坦地へ広がるものと想定される。さらに本跡の北側に位置する苅間六十目遺跡の調査では，この時期の住居跡が調査区の南部に密に分布するのが確認され，調査区南部の畑地にも遺物の散布が見られたという。この状況は，この時期の集落が，本跡から谷津を挟んで苅間六十目遺跡付近まで広がっていたことを示唆している。今後，台地の東部を調査す

第65図　生活域の変遷

ることにより，さらに集落の範囲が明確になっていくであろう。

竪穴住居跡からの出土遺物は，土師器や須恵器がほとんどで，鉄製品や石製品が希に伴う程度である。また，須恵器坏に「山」，「大」，「成」の三文字が記された墨書土器が３点と，灰釉陶器の高台付坏(黒笹14・90号期)，長頸瓶の底部（黒笹90号期)）が出土している。一方で硯，腰帯具等の官人たちの存在を窺わせるような遺物や個人の身分を誇示するような装飾品は全くみられない。この状況は，苅間六十目遺跡でも同様である。また，先述した東岡中原遺跡や島名熊の山遺跡と比較すると，調査面積や検出された住居跡数を考慮しても小規模の集落ということができ，この８・９世紀の時期の神田遺跡や苅間六十目遺跡を含めたこの地域には，一般的な農耕集落が点在していたと考えるのが自然であろう。いずれにせよ，掘立柱建物跡や灰釉陶器の存在は，有力者の存在を想定させるもので，彼らを中心に一つの集落として存在していたことを示すものである。この状況は９世紀後葉まで続くが，10世紀以降13世紀までの本跡の様相は明らかではない。

その後，本跡は苅間城との関わりをもち，また墓域として人々の生活と深く関わり合ったことは先述したとおりである。蓮沼川右岸の段丘上に中近世の遺物が散見されることは，この時期の遺跡の広がりを示すものといえる。また，本跡から検出された溝や道路状遺構が，苅間城関連の施設とすれば，これらの遺構は主郭部と谷津を挟んで存在することになり，苅間城は自然地形を利用したいくつかの「郭」を有する構造と考えられ，想像以上に規模の大きな城郭と推定することができる。この周辺の台地上には小野崎館跡や大和田氏屋敷跡等の中世館跡が数多く点在しているが，13世紀の時期，４km下流の右岸には一辺100mほどの方形館跡が検出された前野東遺跡が位置し，中世領主的な有力者層が当地域に点在する段階となっていく状況が窺える。

3　おわりに

苅間地区での発掘調査は，本跡と苅間六十目遺跡で行われただけであるが，今後も周辺の調査が実施されるものと思われる。その際にはこの調査報告が生かされ，当地域における祖先の暮らしぶりがさらに明らかにされるための資料として活用されれば幸いである。神田遺跡から検出された遺構や遺物は，長い年月を越えて現代人の我々に当地の歴史の一部を伝えてくれた。現在は，つくばエクスプレスの路線工事が着工され，新たな歴史が始まろうとしている。最後に平成７年度から現場や整理作業で御指導・御助言を賜った方々に，改めて感謝の意を表したい。

註

(1)　時期は異なるが『神田２』の付章において，４世紀の焼失住居跡から検出された炭化材を柱材，屋根の構築材と仮定して樹種同定を行っている。奈良・平安時代と３世紀ほどの時期差はあるが大きな環境の変化はないと判断した。

参考文献

・谷田部の歴史編さん委員会　『谷田部の歴史』　谷田部町教育委員会　1975年９月

・茨城県史編さん中世史部会『茨城県史料中世編Ⅰ』茨城県　1970年

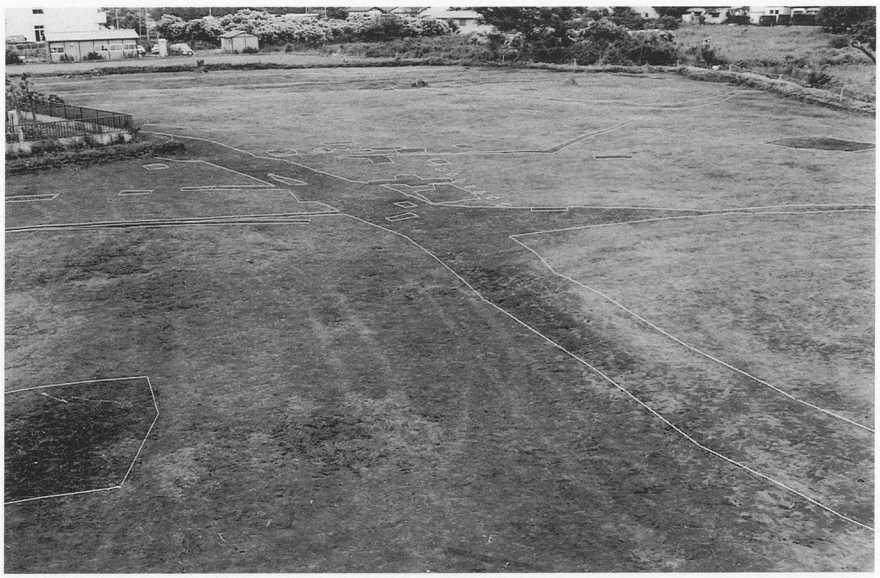
・茨城県教育委員会　『茨城県遺跡地図』　茨城県2001年３月

・笹生衛「東国における中世墓地の諸相－房総の事例を中心に－」『研究紀要16－20周年記念論集』　千葉県文化財センター1995年１月

・茨城県教育財団　「(仮称）葛城地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　神田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第121集1996年３月

・茨城県教育財団　「(仮称) 葛城地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　神田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第134集1997年３月
・茨城県教育財団　「(仮称) 島名・福田坪地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第149集1999年３月
・茨城県教育財団　「(仮称) 葛城地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　六十目遺跡」　『茨城県教育財団文化財調査報告』第160集2000年３月
・茨城県教育財団　「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　中原遺跡３」『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集2001年３月
・茨城県教育財団　「島名・福田坪地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ　島名前野東遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第191集2002年３月

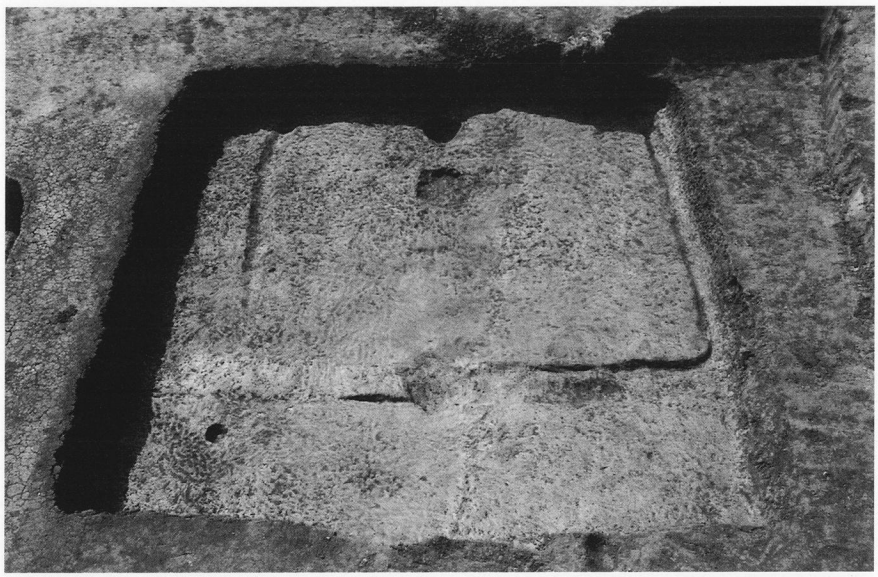
写　真　図　版



南部遺構確認状況

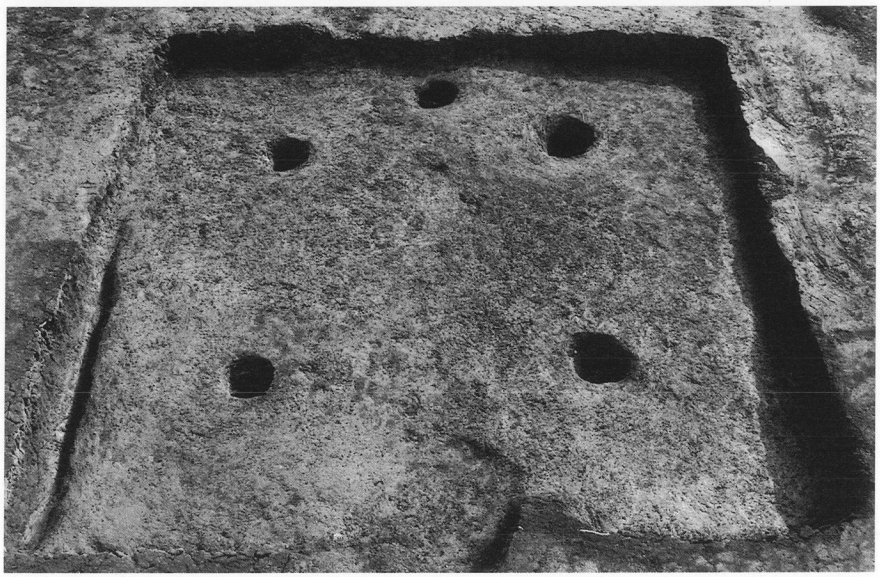
北部完掘状況

第92号住居跡
遺物出土状況



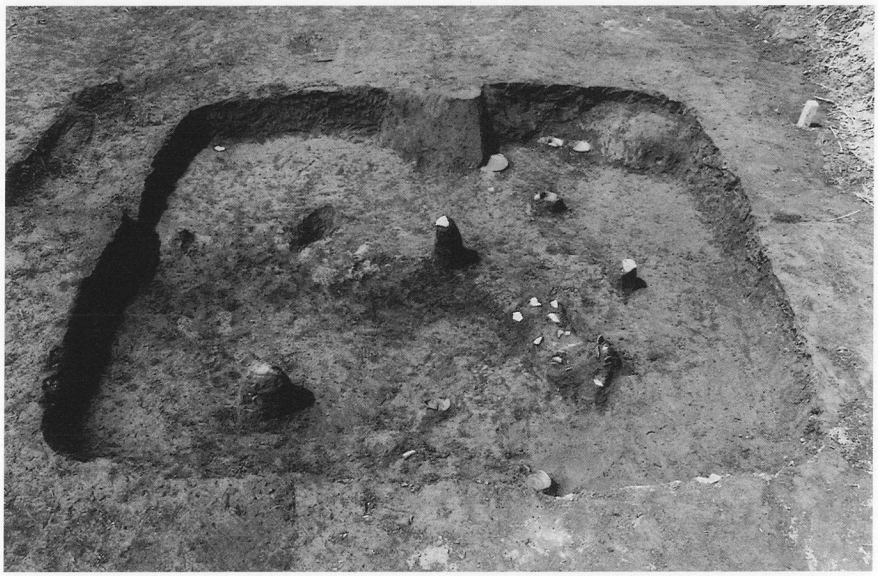
第110号住居跡
完　　掘

第110号住居跡
遺物出土状況



第120号住居跡
完　　掘

第141号住居跡
完　　掘



第141号住居跡
遺物出土状況(1)

第141号住居跡
遺物出土状況(2)

第142号住居跡
完　　掘

第143号住居跡
完　　掘

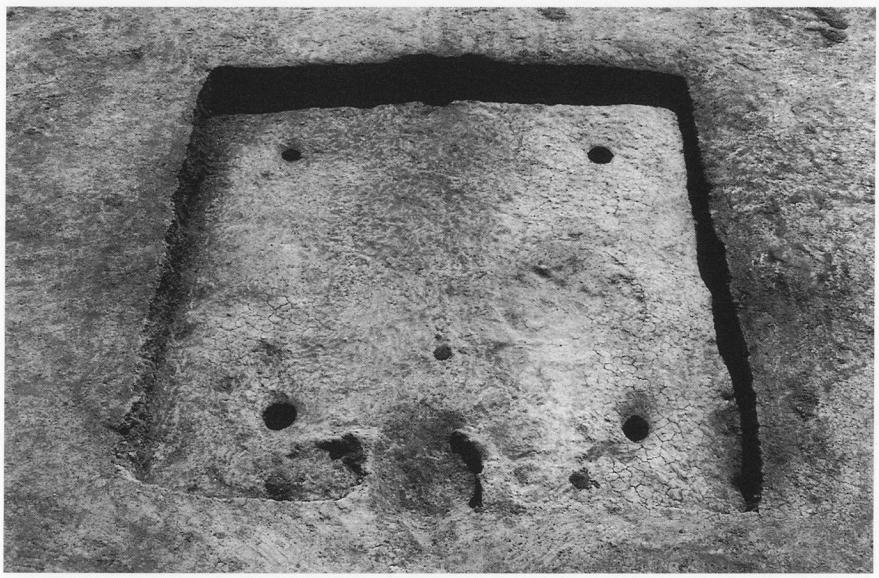
第144号住居跡
完　　掘

第146号住居跡
遺物出土状況(1)

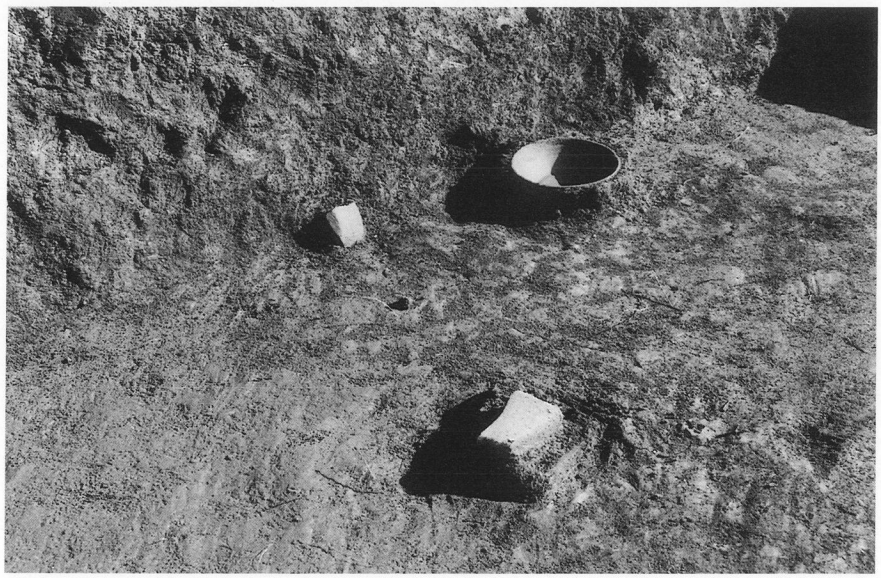
第146号住居跡
遺物出土状況(2)

第147号住居跡
遺物出土状況

第148号住居跡
完　　掘

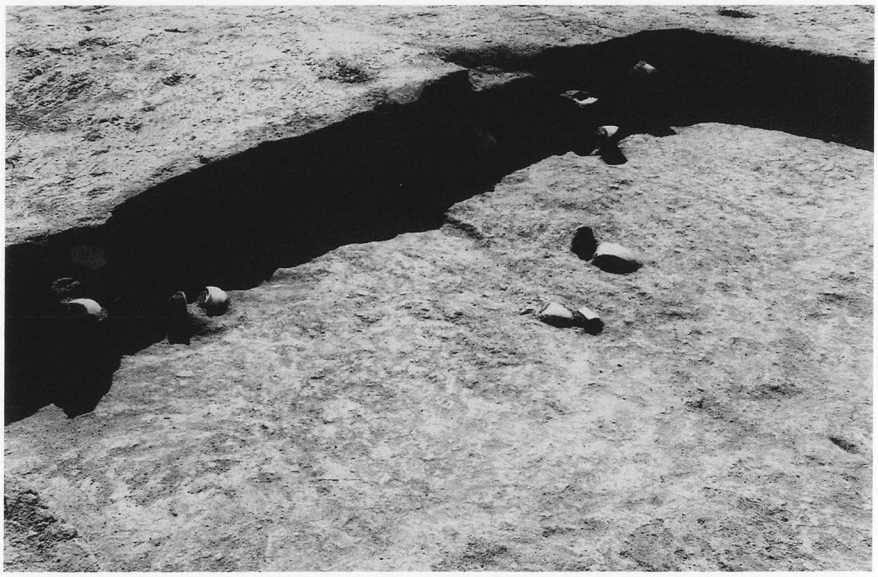


第149号住居跡
完　　掘

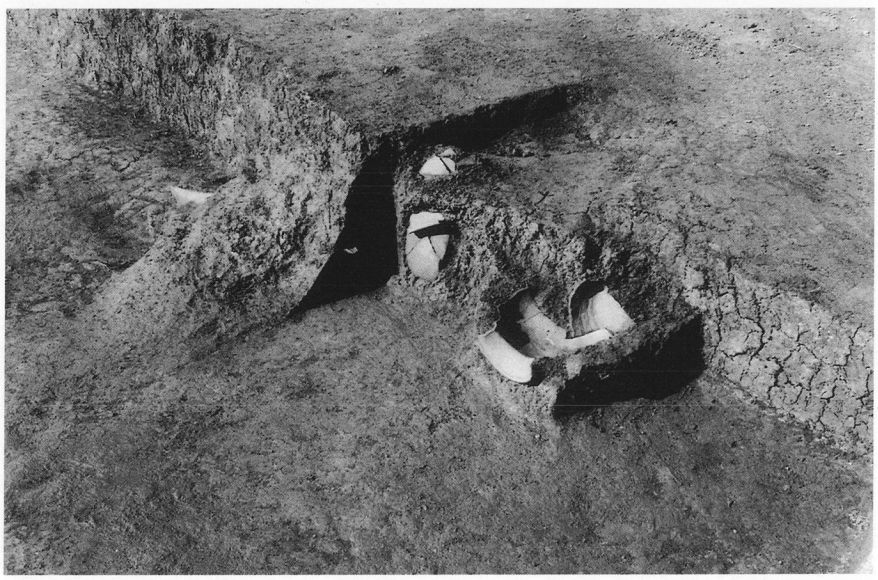


第149号住居跡
遺物出土状況

第151号住居跡
完　　掘



第151号住居跡
遺物出土状況(1)



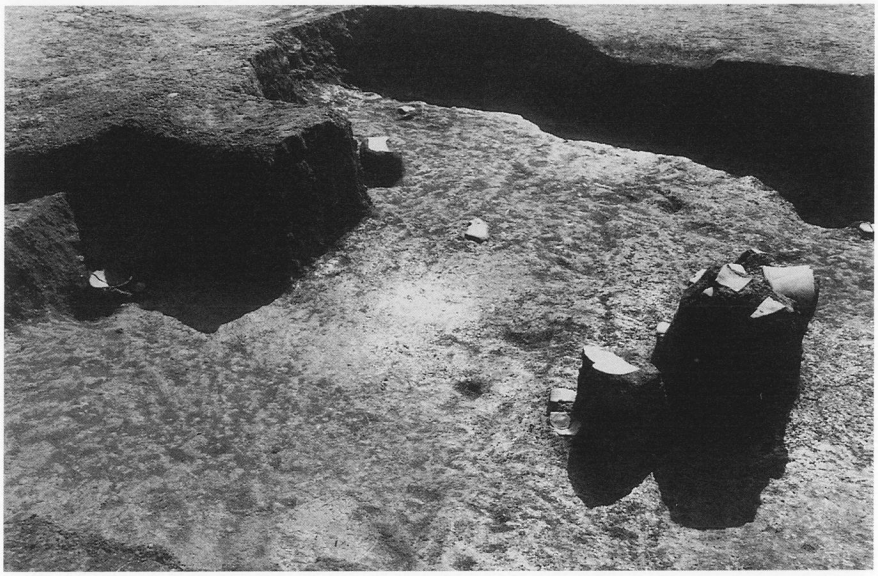
第151号住居跡
遺物出土状況(2)

第151号住居跡
遺物出土状況(3)

第151号住居跡
遺物出土状況(4)

第153号住居跡
完　　掘

第153号住居跡
遺物出土状況(1)



第153号住居跡
遺物出土状況(2)

第154号住居跡
遺物出土状況

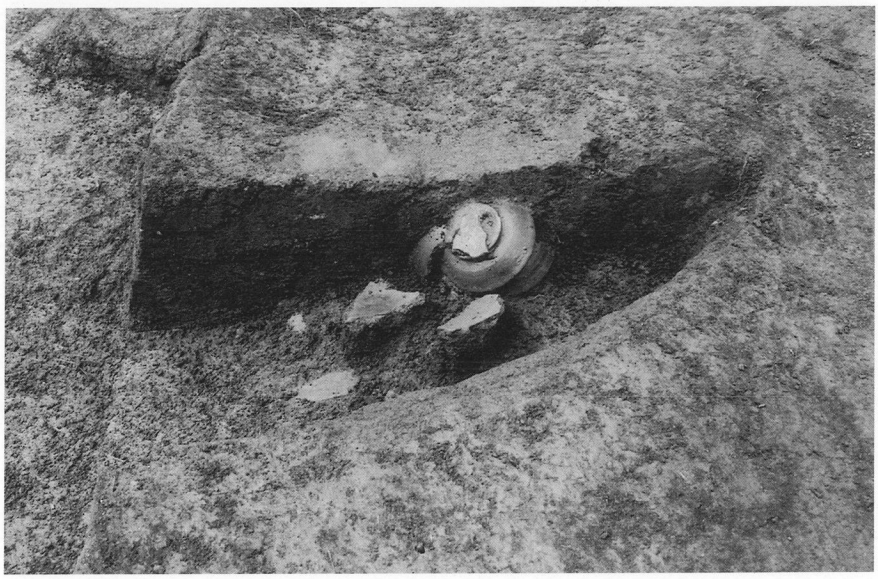
第155号住居跡
遺物出土状況

第156号住居跡
完　　掘

第155・156号住居跡
遺物出土状況(1)

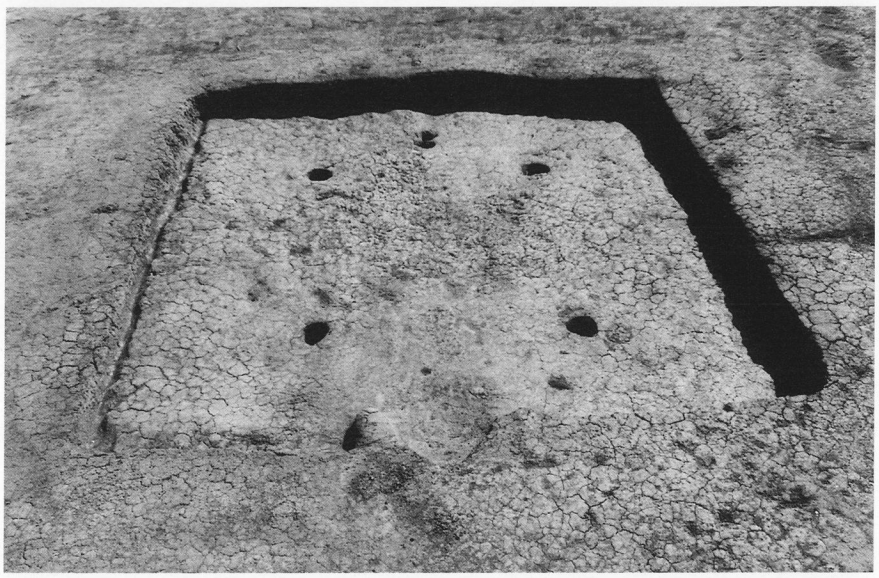
第155・156号住居跡
遺物出土状況(2)

第157号住居跡
遺物出土状況(1)



第157号住居跡
遺物出土状況(2)

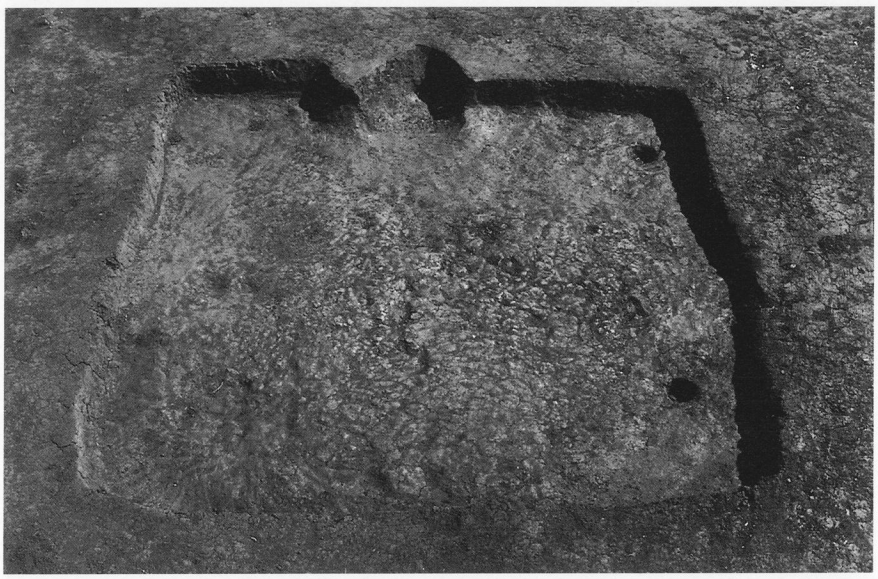
第157号住居跡
遺物出土状況(3)



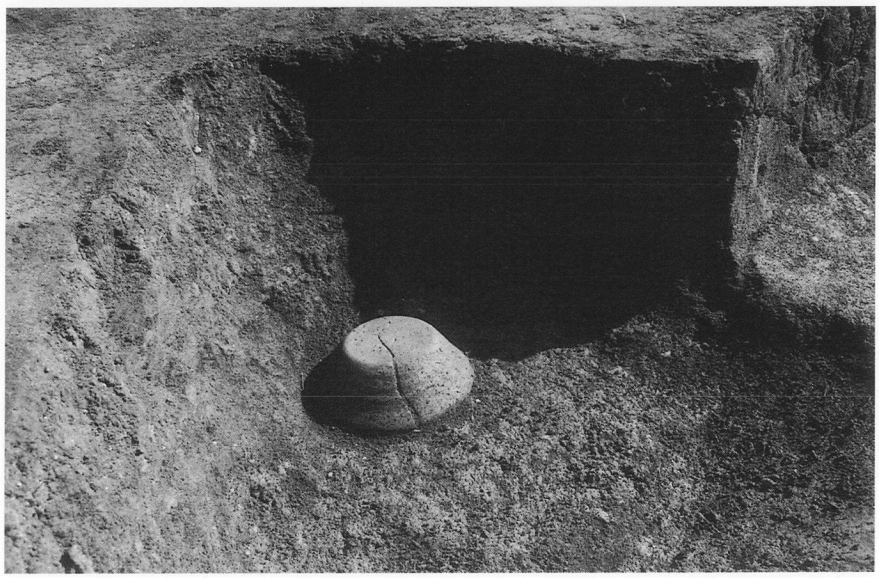
第160号住居跡
完　　掘

第161号住居跡
遺物出土状況(1)

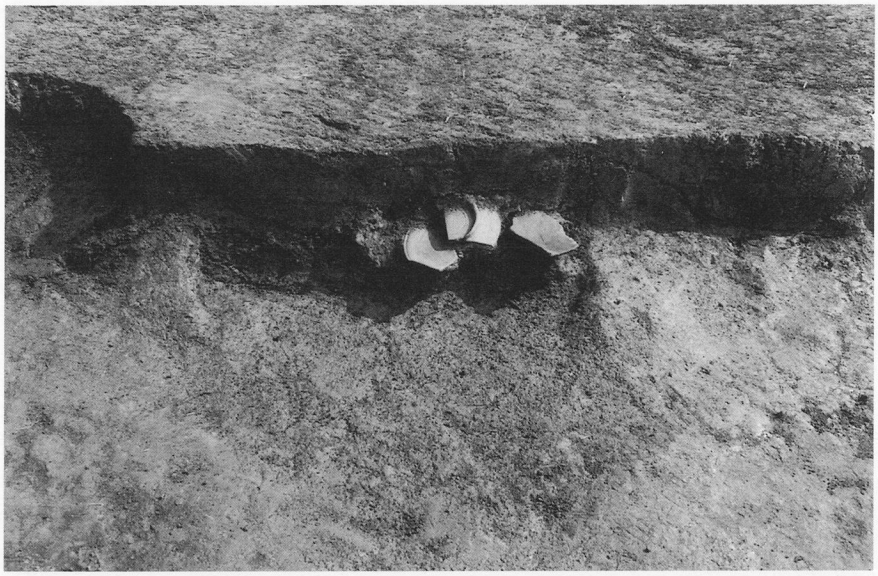
第161号住居跡
遺物出土状況(2)



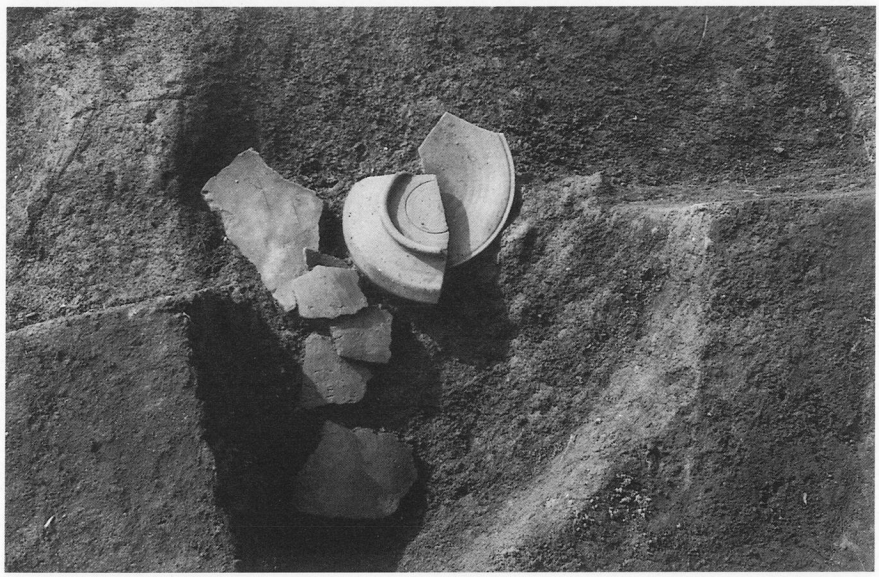
第162号住居跡
完　　掘



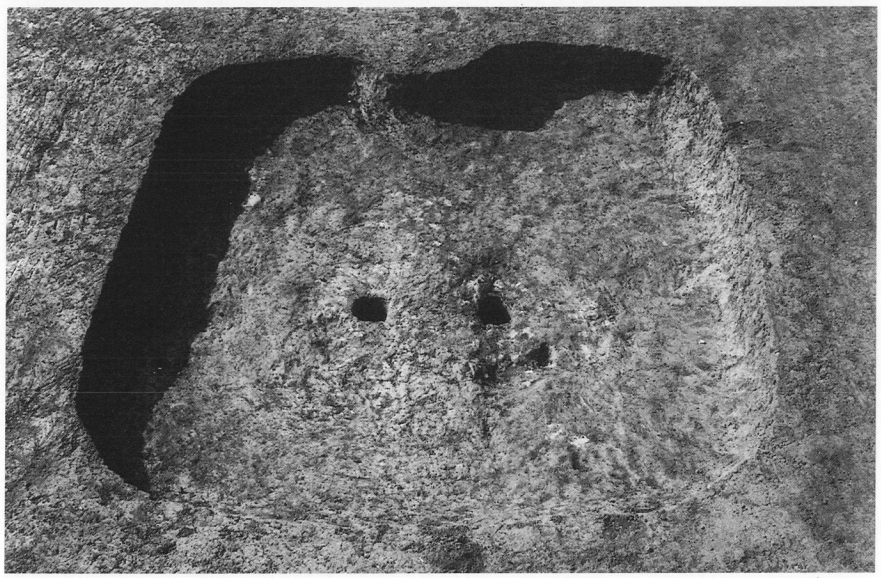
第162号住居跡
遺物出土状況(1)



第162号住居跡
遺物出土状況(2)



第162号住居跡
遺物出土状況(3)

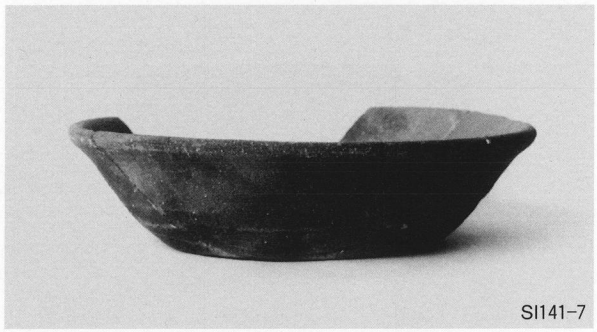


第５号方形竪穴状遺構
完　　掘

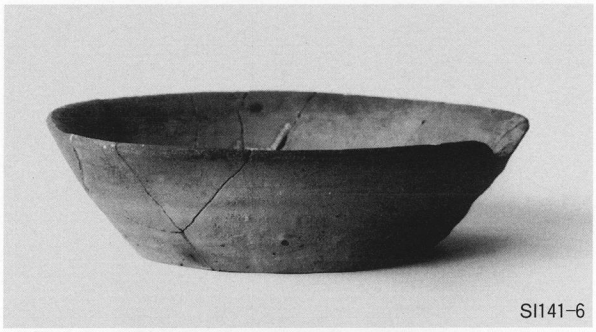
SI141-2

SI141-3

SI141-5

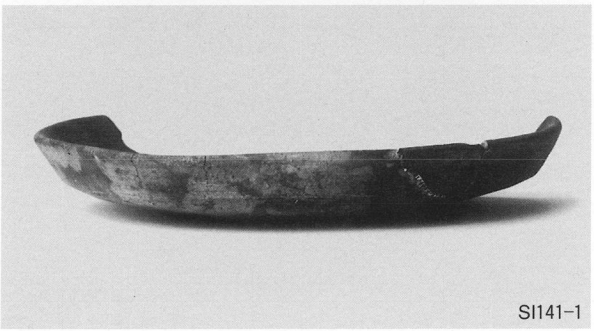

SI141-7

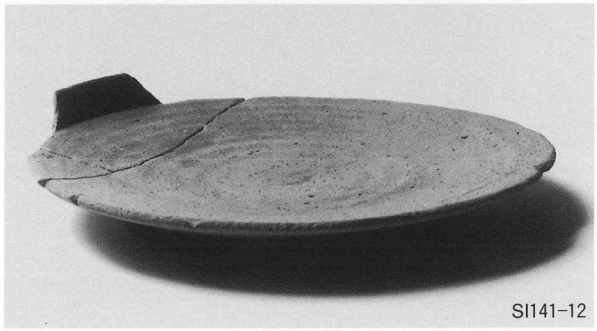
SI141-4


SI141-6

SI141-10

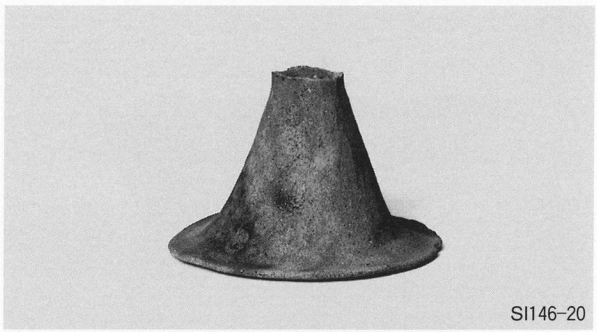
SI141-11

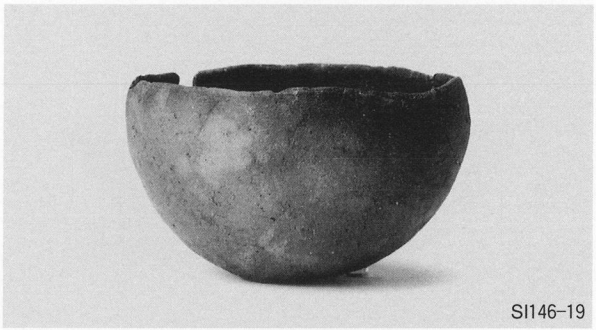

SI141-1


SI141-12

第141号住居跡出土遺物

SI147-25


SI146-20

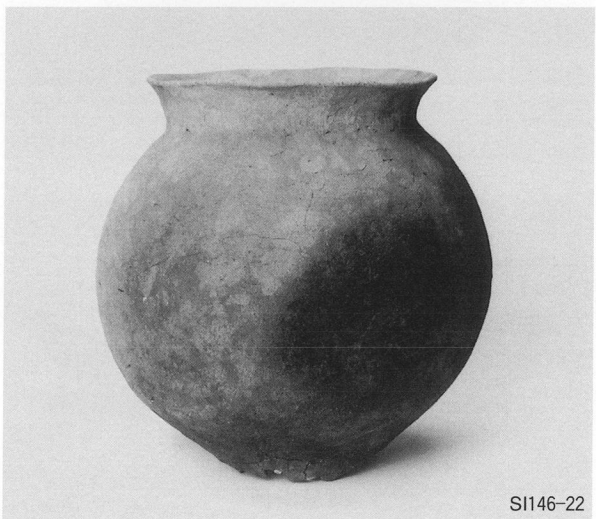

SI146-19

SI147-24

SI146-21

SI148-33

SI146-23


SI146-22

第146・147・148号住居跡出土遺物

SI153-57

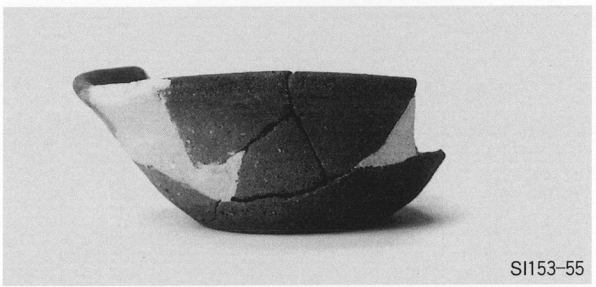
SI150-43

SI149-40

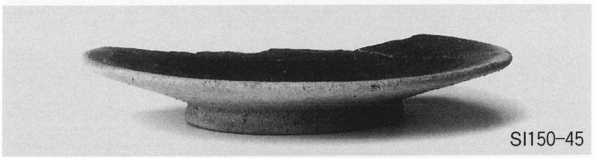
SI149-39

SI110-36

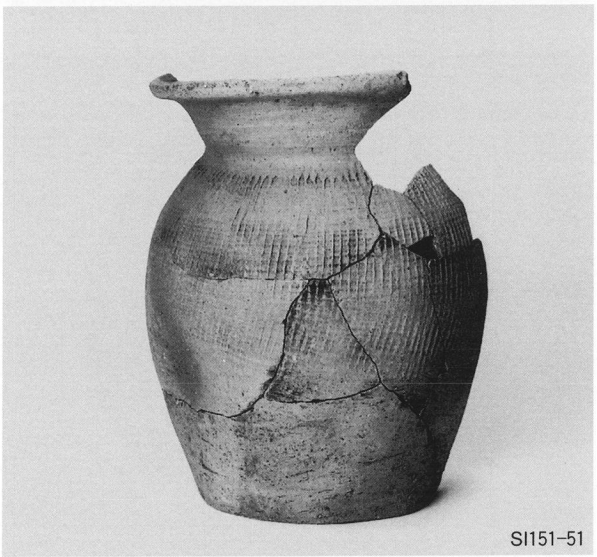
SI153-58


SI153-55

SI110-37


SI150-45

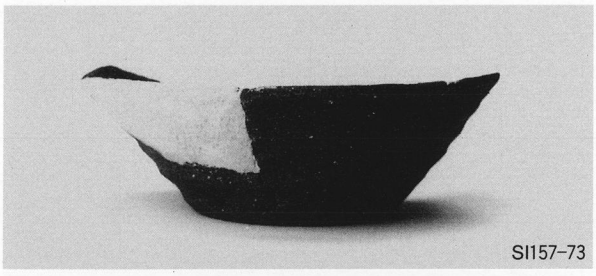
SI151-49

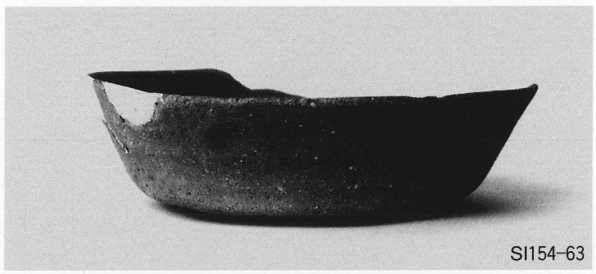

SI151-51

第110・149～151・153号住居跡出土遺物

SI157-76

SI157-75


SI157-73

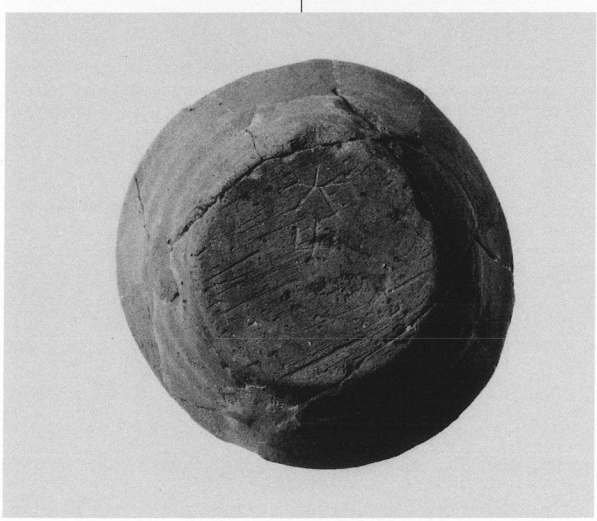

SI154-63

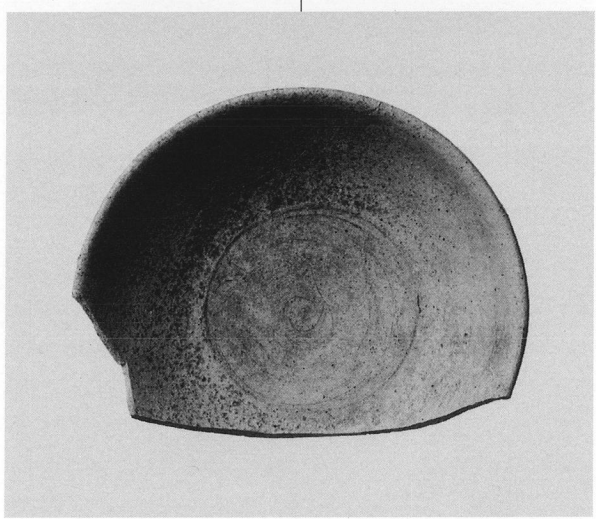
SI156-68

SI157-72

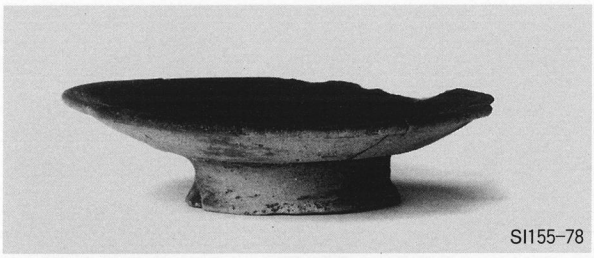
SI148-30

SI161-86





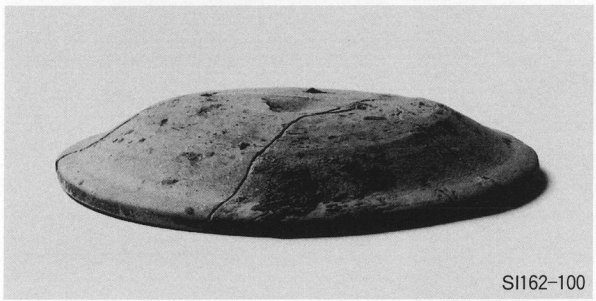
第148・154・156・157・161号住居跡出土遺物


SI155-78

遺構外-103

SI161-81

SI161-80

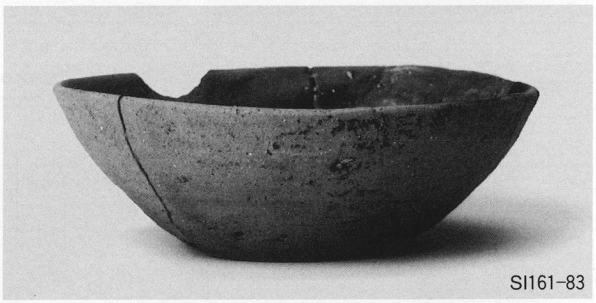

SI162-100

SI92-Q2

SI161-88

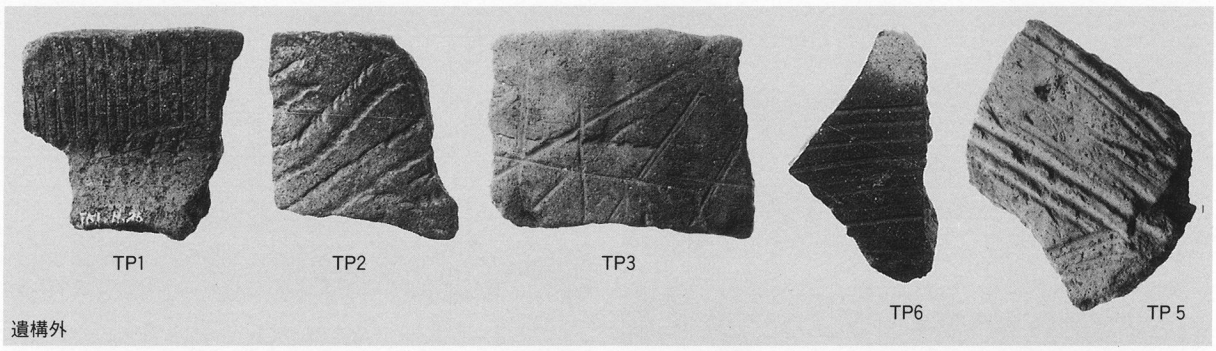
SI162-97

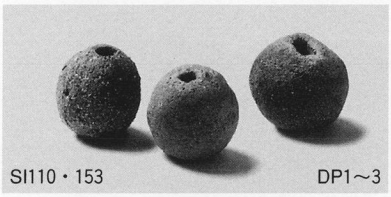
SI162-94

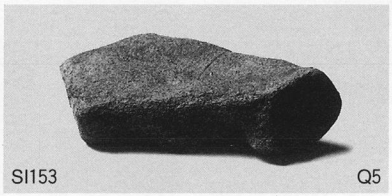

SI161-83

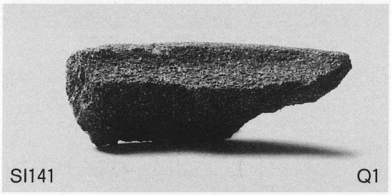
SI162-101

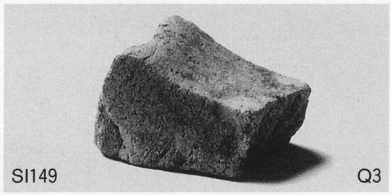
第92・155・161・162号住居跡・遺構外出土遺物

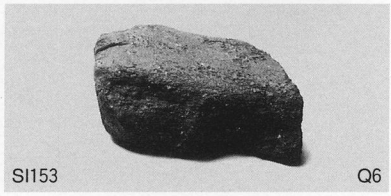


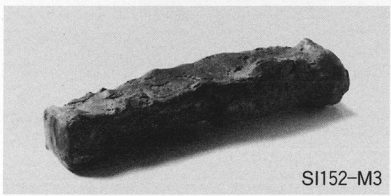


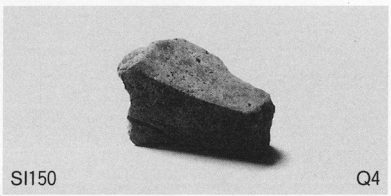


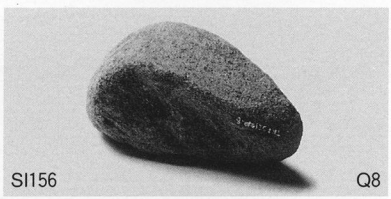


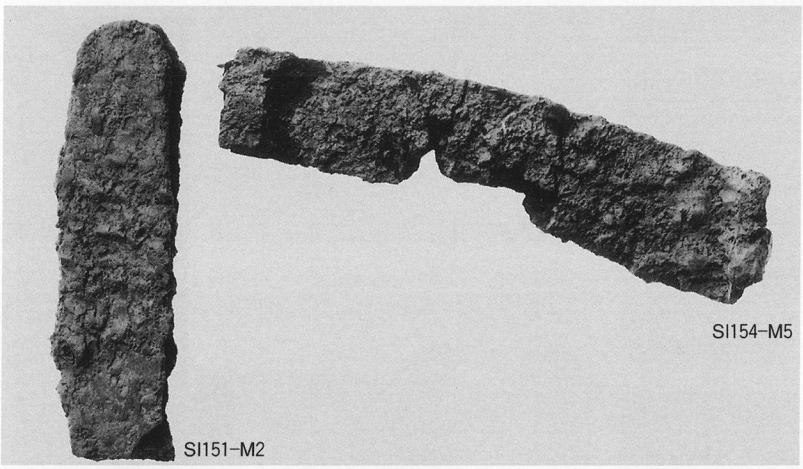


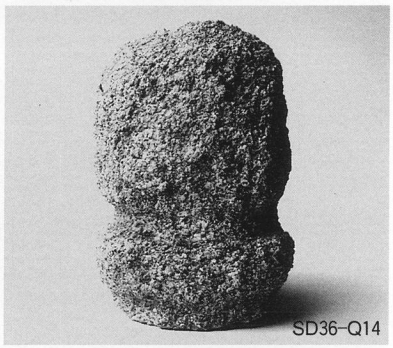


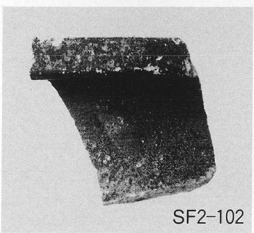


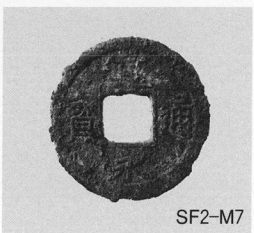


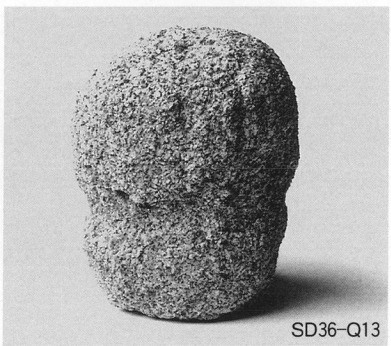












出土遺物（縄文土器片・土製品・石製品・金属製品）

茨城県教育財団文化財調査報告第183集

神田遺跡 3

平成14（2002）年3月20日 印刷
平成14（2002）年3月25日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸市生涯学習センター分館内
TEL 029－225－6587

印刷 株式会社 エリート印刷水戸支社
〒310-0852 水戸市笠原町1497－4－1
TEL 029－244－3355

付　　図

茨城県教育財団文化財調査報告第183集

神田遺跡遺構全体図

付図　神田遺跡遺構全体図